

人類と社会・・・中世から近世へ

1. 中世とはどんな時代か

ヨーロッパを軸として見る歴史区分では、5世紀の西ローマ帝国の滅亡(476年)までを古代、その後、ルネッサンス(14～16世紀)までを中世、絶対王政の確立(16～17世紀)を経て18世紀のフランス革命(1789年)、アメリカ独立戦争(1783年)までを近世、以後を近代と定義することが多いようです。

「人類と社会・・・古代」と比較した場合の問題は、古代には記録に残らなかった多数の民族が歴史の表舞台に登場すること、また、それぞれの民族・地域の社会の進化は必ずしも同じ方向性を持たず、多様性があるため、それらを細部にわたって追跡すると記述が膨大になり、内容が散漫になります。このテキストの目的は、貴方にテキストの対象についてできるだけ単純・明快な概念を得て貰うことにありますから、ここではヨーロッパを主な対象に絞ります。イスラーム社会についてはヨーロッパに深く関わる部分を述べ、中国についてはより簡単に触れ、その他の地域については、ここでは割愛させて貰います。

中世を概観すれば次のようになるのではないのでしょうか。

中世はフン族の圧力を受けたゲルマン民族が西ローマ帝国の版図に大規模に侵入し、先住民族を圧迫する**民族大移動**(4～6世紀)で幕を開け、ローマ帝国の文明は一旦は退行して**ヨーロッパは文明の辺境地**となります。特に9～10世紀はヨーロッパがアジアからの頻繁な侵略に曝され、戦災で人口は激減し、経済も停滞します。「**中世は暗黒時代**」との印象を持たれるのはそのためです。各都市の住民は自衛のためにローマ時代は不要であった城壁を巡らした城砦の中に住み、封建社会が成立します。

代わってこの時期には新興の**イスラーム諸国**が絢爛たる**都市文明**の華を咲かせ、中国もまた専制君主制の文明先進国としての実力を大いに発揮しています。

やがて大陸国家**モンゴル帝国の侵略**(13世紀)にあってイスラーム・中国の両文明圏は大きなダメージを受けて文明の長期的低迷期に陥ります。代わってイスラーム圏が引き継いで育ててきたギリシャ・ローマの文明をヨーロッパが再吸収して更に大きく発展させる過程が**ルネッサンス**(文明復興運動)です。これで勢いを得たヨーロッパは**海洋国家として世界に進出し**、科学技術の進歩により**産業革命**を経て**近代文明**を開発・発展させ、世界のリーダーシップを獲得し、近代に至ります。

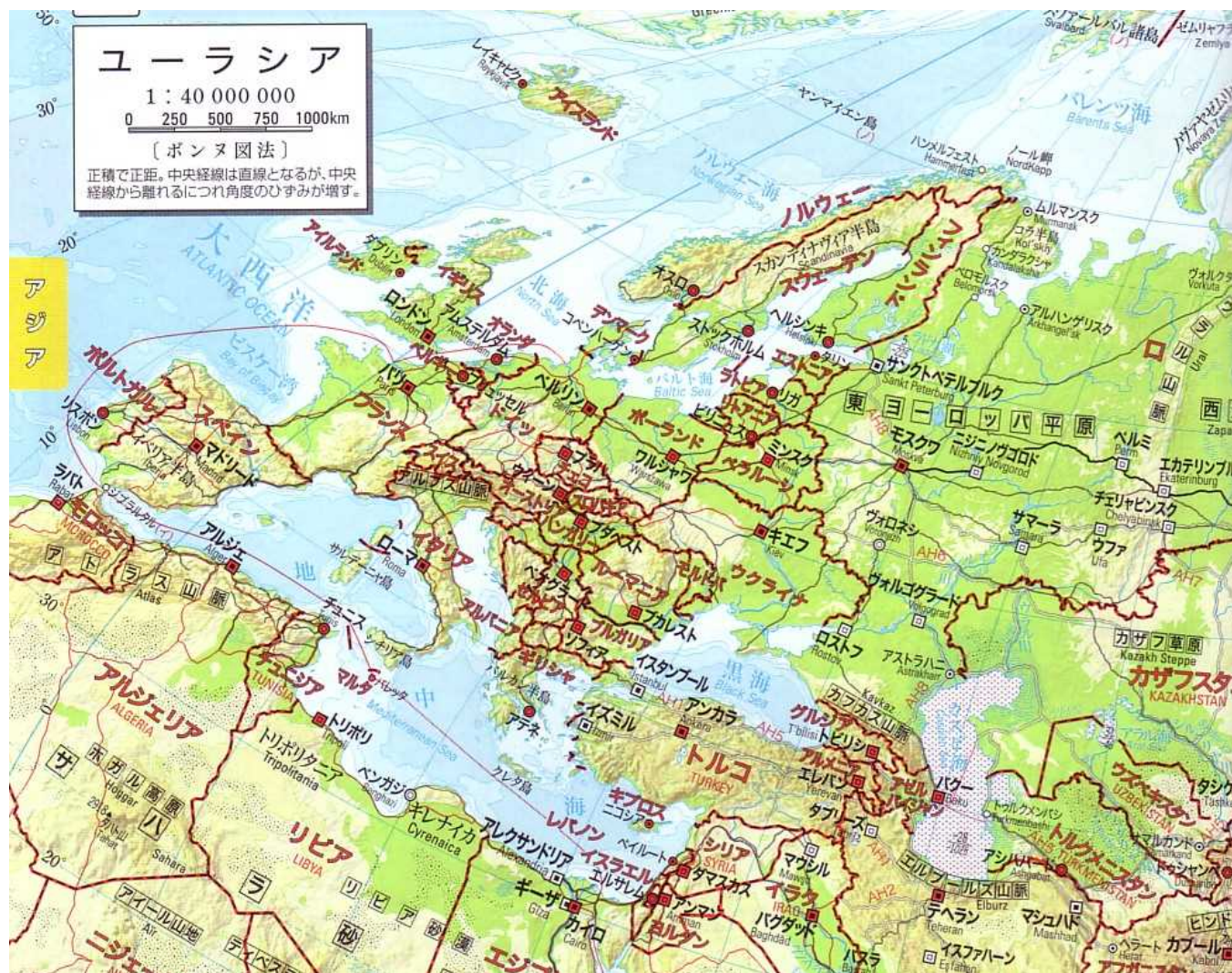
確かに近世・近代は西欧文明が世界を制覇しましたが、文明は決して西欧の専有物ではありません。大きな世界史のうねりの中で、たまたま近代ではヨーロッパ諸国がその時期の文明のリーダーシップを取ってきたのです。より巨視的に述べれば、古代にはギリシャ・ローマが、中世には中国やイスラーム諸国が世界の活動センターであったが、近世・近代にはヨーロッパが世界の活動センターとなり、現代はアメリカが活動センターの地位を占め、近い未来にはアジアに世界の活動センターが移る可能性が見えます。

文明論では「**文明は西に移動する**」がこれまでの経験則となっていますが、そうはさせじとヨーロッパ諸国はEUを結成して、失われたリーダーシップの挽回を図っています。文明は決して特定民族や特定地域の専有物ではなく、その時々勢いを得た地域や民族が活動センターとしての地位をある期間担うものだと考えられます。そのような大きな文明の変遷の流れを見るには、中世は良い教材となります。

2. 民族大移動の時代(4～6世紀)

このテキストには、騎馬民族であるフン族とモンゴル族が非常に重要なキャラクターとして登場します。人種的には追うフン族はモンゴロイド、追われるゲルマン人はコーカソイドのアーリア民族に属します。

中世を席卷した遊牧民族・騎馬軍団とは何か、人種とは何か、その説明から入ります。



ユーラシア大陸の西半分（「詳解現代地図 2007-2008」／二宮書店 p32）

2・1 ユーラシア大陸の三つの気候帯とそこに住む人々

三つの気候帯：世界地図でユーラシア大陸を見てください。カムチャッカ半島からアラビア半島南岸部に直線を引いた南東部分（朝鮮半島、日本、中国の東側、インドシナ半島、インド半島等）は年間降雨量が 500～数千mmに及ぶ湿潤地帯で、土地は森林か耕地であり、主要栽培穀物は米、家畜の主力はウシです。

前述直線の北西部分（モンゴリア、中央アジア、西南アジア等）は年間降雨量は全て 500 mm以下 (250 mm以下もある) の乾燥地帯で、一般には山脈の北斜面を除いては樹木はなく、大部分は草原で、沙漠も多い地帯です。主要栽培穀物は麦で、家畜の主力はヒツジです。上の地図で「東ヨーロッパ平原」「カザフ草原」等が該当します。

更に西側のヨーロッパに達すると、大西洋の暖流(メキシコ湾流)による温暖・湿潤な大気の恩恵で年間降雨量は 500 mmを越える地域となり、大農業国フランスを始め農業に適する地域が多く存在します。

三つの人種：世界の人種を大括りするとモンゴロイド、コーカソイド、ネグロイドの3大人種に分けられます。モンゴロイドは地域的にはアジア、南北両アメリカ大陸(先住民として)に、コーカソイドはヨーロッパ、中東、インドに、ネグロイドはアフリカに主に居住します。

「サルと別れた日」には、人類はあまり遠くない時点で絶滅寸前の数千人規模まで人口が絞られたことがあり、人類全体の遺伝子の違いは互いに山の反対側に住むチンパンジー同士よりも少ないと述べたことがあり

ます。それでも住む環境の違いは数万年の経過で顔付きや体型の顕著な違いを生み出しました。

ネグロイド(人口比 7%) はアフリカを出なかった人類で、赤道に近い強い紫外線に耐えるために皮膚下に大量のメラニン色素を有します。掌や足の裏は肌色です。

コーカソイド(人口比 55%) はヨーロッパに進出した人類で、高緯度(北極に近い)で紫外線が少ない環境に長年住んだため、少ない紫外線でビタミンDを効率良く作るためにメラニン色素を減少させました。このため肌白・金髪・碧眼(目が青色)の特徴を有します。顔の彫りが深いのも、嘗て同じ地域に住んでいたネアンデルタール人と似ており、環境に対する収斂進化であるようです。

モンゴロイド(人口比 37%)は最初にユーラシア大陸に進出した人類で、寒さに耐えるに有利な丸っこい顔(頭の体積の割に顔の表面積が少なく、顔から体温を失わない)をしています。地理的には余り高緯度ではなかったようで、中程度の紫外線に耐えるように、肌には中程度にメラニン色素を含んで黄色や褐色です。紫外線に耐えるように黒髪、黒目に特徴があります。

我々日本人や南北アメリカ先住民もモンゴロイドに属します。

最近の研究結果から、気候の変化に対する皮膚の色の変化に要する時間は 1,000 年未満と認識されています。

2・2 遊牧民の成立

さて、前述の乾燥地帯で人類が最初に定住したのが水が得られるオアシスです。オアシスには天然の泉や河川の近隣その他、カレーズという地下トンネルを掘り、かなり遠距離から水を引いてくる人工のオアシスも少なくありません。オアシスでは農耕社会が成立し、水利権・土地私有制が確立し、地主と小作人の階級分化も進みます。家畜の飼育も始まりますが、大規模なヒツジの群を飼育するには、草原に進出して牧畜を専門とする人たちが必要となってきます。これが遊牧民の始まりです。

遊牧生活は夏と冬の牧営地を遠距離移動し、牧営地の割り当ての争い、通りかかるオアシス農民との衝突も稀ではなく、気候の激変、疫病などによる災難にも襲われます。このため、グループには強い団結と強力なリーダーシップが求められます。この下地があつて、後に有能なリーダーの下に強力な団結力で結ばれた高い戦闘力をもつ騎馬軍団が成立するのです。

初期の遊牧民の単位は 3～10 家族、ヒツジに換算した家畜数は 600～3,000 頭であったようです。家畜はオアシス住民への売り物であり、日常の食物は冬の牧営地で栽培する穀物でした。それに乳、ヨーグルト、バター、チーズ等で栄養を補っています。充分な穀物を自給することは難しく、食糧のかなりの部分はオアシス住民との交易で獲得します。また、金属器や木器製品はオアシス住民から得なければなりません。

オアシス住民と遊牧民は相互依存的な関係にあり、決して対立的な関係にある訳ではありません。人種的にはモンゴロイドとコーカソイドの両方が棲み分けています。

この時期は遊牧民はまだ歴史の表には現れて来ません。

2・3 騎馬民族の勃興

ウマは有史前時代から家畜化されていますが、最初は食用や革細工用であり、やがて車輛の牽引用となりました。意外に思われるかも知れませんが、人類がウマを乗用として用い始めたのは、記録に依れば 2,500～2,300 年前からの比較的最近のことです。というのは、乗馬には轡(くつわ)と手綱(たづな)が絶対に必要であり、更に鞍(くら)と鐙(あぶみ)があれば格段に騎馬時の安定性が増します。これらは順次に発明されて来たことが記録により明らかになっています。

騎馬が実用化されれば、草原はウマを飼うのに最適な場所ですから、忽ちの間に世界的に普及しました。草原の遊牧民の家畜の主力はヒツジです。人間が徒歩で羊飼いをやる状態では、ヒツジの集団遊牧の最大経済規模は約 600 頭ですが、騎馬が可能になれば人間の移動速度が数倍に向上しますので、数千頭のヒツジを

放牧・統御・管理することができ、一つの人間の集団が所有できるヒツジの数量に限界がなくなります。また、距離が遠くても他の集団との連絡がすぐ取れるようになり、部族の中の組織も強化されます。このようにして、騎馬の実用化・普及は遊牧民の社会的・政治的な規模と力を一気に拡大しました。時期的にはギリシャではアテナイの最盛期、インドでゴータマブッダが佛教を創始した時期の前後に当たります。

2・4 フン族の西欧進出とゲルマン民族の大移動

375 年、中央アジアのモンゴロイドの遊牧民**フン族**が（91 年に北漢が討った匈奴が西走した、等諸説あり）大挙ヴォルガ川(現ロシア連邦内)を渡り、アラン族を服従させ、更にドン川(現ロシア連邦内)を越え、ドニエプル下流地帯(現ウクライナ)の東ゴート族を服従させ、更に西進してドニエストル川(現ウクライナ、モルドヴァ)とドナウ川(現ハンガリー、オーストリア、ドイツ)の間(現ルーマニア、ハンガリー、スロバキア、チェコ等)に住む**西ゴート族**に襲いかかりました。

その勢いに押されたキリスト教を奉ずる西ゴート族(西ゴートに住むゲルマン人)の一部は東ローマ帝国の許可を得てローマ帝国内に移住しました。これが部族集団のままの形でローマ領内にゲルマン人が入った最初のケースで、総数 4 万人、内戦士 8,000 人でした。ウシに曳かせた荷車に家財や女・子供を乗せ、米国の西部開拓民のワゴン編隊によく似た形で移動して来ました。ローマ側では西ゴート族の窮状を見かねて緊急救済処置として受け入れたものの、その処理に困り、そこにフン族から逃れて西に移った東ゴートの一部がローマ領内への移住を求めてきました。ローマ側はこれを拒絶し、ここにゲルマン人とローマ帝国の争いが起きます。折角、憧れの地ローマ帝国に入ったのに、どこへ行っても先住民と摩擦を起こして厄介者扱いされ、安住の地が得られない彼らは遂に武力に訴えて必死の反撃に出ます。378 年のアドリアノーブルの戦いでローマ軍は殲滅され、皇帝ヴァレンスは戦死します。これが紛争の幕開けでした。

その後、以前、カエサルがローマの防衛線としたドナウ川は、もはや閉ざされた国境ではなく、ゲルマン人が相次いで越境します。彼らはアラリックを王に選び、ローマ帝国内での進出を重ね、遂に 410 年、ローマは西ゴート王国の手中に落ちます。実は、それ以前からローマ文明に憧れて、もっと少人数単位でどんどんゲルマン人はローマ帝国の辺境地に移住してローマ化しており、最初は補助兵として、やがてローマ軍団の中核部隊として定着しています。西ローマ帝国滅亡の寸前にゲルマン人出身だがローマ人よりローマ魂に燃えたスティリコ将軍の下で戦ったのは徴兵を嫌ったイタリア人でなく、勇猛を以て鳴るゲルマン人だったのです。メソポタミア文明におけるアッカド人やカッシート人の場合と同じく、ゲルマン人も辺境から来た労働民(傭兵など)として現れ、次に植民者となり、最後は征服者となっています。

このような疾風怒濤の時代は 5 世紀末まで約百年間続き、終わってみれば、現イタリアと周辺は東ゴート王国、現南フランスから現スペインは西ゴート王国、残る現フランスやベルギーにはフランク王国、現アフリカにはヴァンダル王国、現英国にはアングロサクソン族がそれぞれの支配地を持ち、旧西ローマ帝国領は殆どゲルマン人の支配に帰し、ローマの支配と秩序はここに瓦解しました。

2・5 中世の支配階級となったゲルマン民族

ギリシャ、ローマの先住民に多いケルト人もゲルマン人もコーカソイドであり、その中でも同じ印欧語を話すアーリア民族という点では共通です。ケルト人もゲルマン人と同じ北方人種ですが、ずっと以前に南下して来たために先住民族との混血が進み、ゲルマン民族としての身体的特徴や戦闘能力を失いました。

ゲルマン民族を現代の住民に当て嵌めると、西ゲルマン系はドイツ人、オーストリア人、オランダ人、フラマン人、アングロサクソン人、北ゲルマン系はノルウェー人、スウェーデン人、デンマーク人、アイスランド人などとなります。彼らは肌白・金髪・碧眼でローマの先住民に較べると遙かに大きく強力な体躯を有し

ます。この特徴は現在の北欧の人たちにはよく残っていますが、ドイツまで南下すると混血が進み、黒髪・黒目が多く混じります。金髪・碧眼のアーリア民族の優生論を繰り返し演説したヒトラーは黒髪でした。

彼らは基礎代謝率が高く、冬でもチュニック(短上着)を着て過ごし、平気で川で水浴するとローマの歴史家タキトゥス(55～120 年)は感嘆を込めて書いています。

彼らの剛勇については、夙(つと)にカエサル「ガリア戦記」に述べられて有名です。

英国であれば先住民族であるケルト人はイングランドを抑えたアングロ族、サクソン族によってウェールズとアイルランドに押し込まれ、現在の人種構成ができあがりました。

中世にあって、多くの国で侵略者ゲルマン人は支配階級を占め、**国王、領主、騎士**はほぼ彼らが抑え、近世、近代に至ります。この階級制度は厳然としてヨーロッパの基底に残り、英国などでのエリート階級と庶民は体格からして違うといわれるのはここに人種起源の違いがあります。

ゲルマン人は支配者ではあるが、人口比ではヴァンダル王国で 1.3%、その他の地域では多いところでも 2% 程度に過ぎず、文化的には周囲に飲み込まれて急速にローマ化して行きました。

しかし、それはもはや広域にわたって統制がとれたローマ帝国ではありません。駅通制度、通貨や税制度、法制度は王国毎に異なり、王国内でも群雄割拠する領主たちによって統制がとれない政治が行われ、各地で無法な篡奪、暴行、略奪が横行し、交易や旅行は困難を極め、庶民は苦しみ、「**暗黒の時代**」となります。辛うじて統制を保って庶民を助け、守り、律したのは残されたキリスト教の教会組織でした。このようにしてヨーロッパの中世は幕が開けます。



6 世紀前半のヨーロッパ (「世界の歴史 3」 p7)

2・6 イスラーム勢力の勃興とヨーロッパ侵攻 (6～8 世紀)

ヨーロッパが古代ローマは崩壊したが、中世はまだ定まっていなかったという混沌とした過渡期に、ムハンマド Muhammad(570～632 年)によって創始された**イスラーム教**により、政教一体のイスラーム共同体が新興の活動力を発揮して急激に各地に侵攻します。**サラセン人**(アラビア人: コーカソイドのセム族に属する。セム族とはバビロニア、アッシリア、アラブ、アラビアなどの諸民族の祖とされる民族)によるイスラーム勢力はペルシャ、シリア、メソポタミア、パレスティナ、エジプト、小アジア、アルメニアを落とし、東地中海の制海権を収め、**673 年**には水陸からコンスタンチノーブルを攻めます。しかし、弱体化したとはいえ、この時代に戦術的な集団行動がとれた唯一の職業軍人集団である東ローマ帝国の軍隊には容易に歯が立ちません。多勢を以てしても遂にこれを落とせなかったイスラーム勢力は、矛先を変えて、地中海沿岸を西に向かって侵攻し、カルタゴを落とし、**711 年**には名将軍タリクが率いるイスラーム軍はアフリカ北端のセウタからジブラルタル(タリクに因んでジェブル・アル・タリク(タリクの岩)と命名)に渡り、一気に西ゴート王国を倒します。

イベリア半島(現スペイン)のキリスト教徒は、半島の西北隅のアストリアに押し込まれました。イスラーム軍は 7 年間でピレネー山脈まで進み、**720 年**にガリア(現フランス)侵攻を開始します。**732 年**に中部フランスのツール、ポアティエ間で 7 日間にわたりイスラーム教軍とカール・マルテル率いるキリスト教軍の大決戦が行われ、初登場のフランク軍の重装騎兵がサラセン人の軽装騎兵を打ち破りました。イスラーム軍はスペインに引き返しましたが、その後もガリア侵略は間欠的に **752 年**まで行われました。

サラセン人の地中海世界の征服は、その速度と広さと永続性(約4世紀間)の点で驚異的です。このような大規模な侵略を起こした理由は人口過剰説ほかいろいろありますが、イスラーム教を世界に広めたいとの宗教的情熱が根底にあることは間違いありません。イスラーム教は現代でも世界的に大きな影響力を持つ宗教なので、その創始から現代にいたる歴史は別途「**宗教…イスラーム教**」で詳しく取り扱います。

このサラセン人の進出も、結果的にはこの時代の民族大移動の一部だと見なすことができます。面白いことに、侵略したゲルマン人はたちまち古代文明に染まって素朴な精神を失って退廃してしまいましたが、サラセン人は古代文明に触れながらもそれに毒されず、返ってそれを利用しながら彼ら独自の文明を確立しました。征服者サラセン人の被征服者に対する人口比はゲルマン人の場合と同じようなものです。しかし、彼らはイスラーム教を堅持する高度の倫理的世界観の持ち主でした。原始的な信仰しか持っていないゲルマン人との違いがありました。諸民族交流の場であった地中海は、今は信仰と諸民族を分ける境界となりました。

3. カール大帝によるローマ帝国の一時的復興(8～9世紀)

フランク王国の支配権はカール・マルテル(686～741年)、ピピンと引き継がれ、次の有能なるカール大帝(仏語読みシャルル・マーニュ：768～814年)はローマ帝国の復興という理想に燃えて、イタリア全土とスペイン辺境領、ドイツを版図に加えて、ローマ帝国時代から存続するローマ法王権の支持を得てローマ皇帝権を与えられます。ここに**皇帝と法王**という二つの権力を中心に政治が動く、中世ヨーロッパの権力構造が生まれます。彼の当時としては長寿である72歳までの40数年間の治世は、彼の理想を深く人々の心に植え付けるに十分な時間であり、彼の理想は中世を通じて政治の指導理念になり続けました。彼の気さくな人柄も人々に愛され、追慕され、実在の人物で彼ほど歌や詩に唱われた人も珍しいといわれます。

彼のカロリング王朝(751～987年)は後継者により三つに、更に四つにと分割され、イタリアでは875年に、ドイツでは911年に、フランスでは987年にそれぞれ断絶しました。

カール大帝の帝国は、実態としては行政組織を殆ど備えていませんでした。組織で動くローマ帝国と違って、当時の帝国の統一は支配者の人格に大きく依存していました。また、サラセン人の地中海制海権により、貨幣経済が衰えて農本主義経済になっており、俸給による官僚を用いた行政が行えず、大所領を有する豪族が勢力を有し、カール大帝も豪族を名目上の役人としてそれぞれの地方を治めさせていました。彼らは中央の権力の強弱によっては何時独立の豪族に化けないともいえない不安定さを持っています。有給官僚を持たない大帝国の統治は、始めから不確実な遺産だったのです。

4. ヴァイキングの活躍した時代(9～10世紀)

9世紀後半から10世紀前半は暗い中世の中でも最も暗い時代です。カール大帝の帝国の分裂と時期を同じくして、北からノルマン人、東からマジャール人、南からサラセン人の侵略が始まり、ヨーロッパ社会は悲惨な状況に置られました。侵略者たちは先の民族大移動のゲルマン人がローマに対して持っていた憧れや尊敬の念を全く持ちません。市全体の破壊や全住民の殺戮など、これまでの侵略では考えられなかった残虐行為が度々行われ、当時の人々の目には「主の怒りの日、再臨の日」とも映りました。

4・1 ノルマン人の攻略

一番大きな被害と後世への影響を与えたのがノルマン人でした。



発掘された船葬のヴァイキング船

彼らはゲルマン人の一派で、スウェーデン、デンマーク、ノルウェーの三部族に別れています。8世紀から地球は温暖期(気候小最適期)に入り、北方の地でも人口が急速に増加し、過剰な人口を外部に向かって押し出す圧力が高まりました。

ヴァイキングは海賊兼商人で、当時は未開の蛮族でしたが、驚くべき高度の造船技術を有していました。前頁右下は 10 世紀のヴァイキング船の正面からの写真(私がノルウェーのヴァイキング博物館で撮影。実物)です。遠征用のものは長さ 20m、高い舳先を持ち、甲板はなく、櫂と帆で走り、約 40~60 人を乗せ、時速 18 kmで走ります。喫水は約 1 mと浅く、河川を遡って航行するのに便利でした。彼らは裕福な寺院や修道院を狙いましたが、都市の攻略にも巧みで、城壁がある大きい都市でさえ多数犠牲となっています。

ヨーロッパへの侵攻：9世紀後半に彼らの侵略が大規模になり、侵略地で越冬するようになってからの被害は大きかったといえます。やがて、祖国で志を得なかった有力者が部下と共に移住してきます。10世紀初めの一首領ロロは西フランク(現フランス)王シャルルから、キリスト教への改宗と領土防衛を条件にノルマンディー地方と王妹を与えられました。**ノルマンディー侯**の誕生です。ここから将来のイギリスの支配者が出ます。この年以降、西フランク王国でのノルマン人らによる大きな脅威は去りました。

イギリスも同じ被害に遭いますが、アルフレッド大王の粘り強い抵抗で遂にノルマン人に打ち勝ち、残留したノルマン人をキリスト教化することに成功しました。アルフレッド大王はカール大帝の政治から学び、政治的にも文化的にも、中世イギリスの発展の基礎を築き上げました。彼の後継者たちは更にノルマン人を破って国土を回復し、イギリス国王の称号を名乗るようになります。

ロシアの建国：スウェーデン人の一首領リューリックは 862 年、スラヴ諸族に招かれて、ノヴゴロドに国を建てます。これがロシアの建国となり、10 世紀までには無統制な群雄割拠状態から脱し、リューリックの子孫であるキエフの首長の下に緩やかな国家的結合体を作り上げます。キエフの首長は 3 代目まではスウェーデン名ですが、4 代目からはスラヴ名になり、混血が進んだことを窺わせます。

勇敢な植民者たち：ノルウェーのヴァイキングの一部は勇敢にも 9 世紀半ばにはアイスランド、9 世紀後半にはグリーンランド、9~10 世紀にはアメリカ大陸北岸にも植民しています。アイスランドのノルウェー人は今も健在ですが、他の二箇所植民地は後日消滅しました。特にグリーンランドの植民地滅亡は**環境災害**の重要な事例として研究がなされており、環境激変に合わせて生活様式を柔軟に変えたエスキモーは生き残れたのに、従来の生活様式に固執したヴァイキングは滅亡したとの貴重な教訓を今日に残しています。

ノルマン人もゲルマン民族であり、彼らの侵略は**ゲルマン人の最後の民族大移動**でもあります。

4・2 マジャール人の攻略

東フランク王国はマジャール人の侵略を受けました。マジャール人は現在のハンガリー人の祖先で、フン族と同じ中央アジアの騎馬民族です。彼らは城砦の攻略は苦手でしたが、アルプスを越えてヴェネチアを襲ったりしてヨーロッパに恐怖をまき散らしました。しかし、ゲルマンの野生のエネルギーをまだ保っていた東フランク(現ドイツ)は 933 年と 955 年の激戦でマジャール軍の主力を破り、その後の侵略は



ハンガリー建国の祖記念碑

止めました。押し戻されたマジャール人はハンガリーの地に建国し、キリスト教化します。
前頁右の写真(私の撮影)は同国にあるハンガリー建国の祖である 10 部族の首長たちを顕彰する記念碑です。

4・3 サラセン人の攻略

チュニスに本拠を置いたイスラーム藩王たちはシチリアのメッシナを占領し、ここからの攻撃で 843 年にローマの聖ペテロ大寺院が焼かれるなどの大きな被害を受けました。また、サラセン海賊はマルセイユ近傍に強固な巢窟を築き、イタリアと他のヨーロッパとの喉元を扼します。972 年に大サン・ベルナル越えの道でクリュニー大修道院の院長が襲われ、途方もない身代金を払って放免されたのに責任を感じたフレネ地方の領主プロヴァンス伯が、大軍を催して海賊を襲撃して殲滅しました。これで大規模なサラセン海賊の侵略も終わり、その後間もなく、ピサ、ジェノア、アマルフィなどのイタリア都市は、逆にサラセン側への反撃に移ります。

5. 封建制度の成立と十字軍の時代（11～13世紀）

5・1 都市の城砦化

ローマ時代は侵略者など存在せず、カエサルは旧ローマ市の城壁を撤去させたくらいに平和でした。しかし、中世ヨーロッパの人たちはこれら幾多の侵略の経験を経て、**侵略に対する有効な防衛策は都市**



中世最大の城砦都市カルカソンヌ Carcassonne（フランス）

の城砦化だと知ります。ヨーロッパの至る処で城壁が築かれ、人々は城砦の中や周辺に住み、田園の光景は一変します。

城砦建設が王権の下に行われたイギリスでは、これが統一イギリスの基礎となりましたが、大陸では外部からの侵略により中央権力の解体・分散が徹底し、独立した地方権力による**封建制度の出発点**となりました。そこには役人による行政組織が入り込む余地がなく、国王が監督できる範囲もカール大帝の頃に較べると、極めて縮小されています。右上の写真は、中世最大と謳われた城砦都市カルカソンヌ(私が撮影)の遠景です。

5・2 封建制度下での君主と臣下の権力構造

中世が封建制度の時代と言えるのは 11 世紀の半ば以降です。それまでも主人と従者が保護と奉仕を誓い合い、主人が従者に知行(封土)を授けることはありましたが、この関係が社会の隅々にまで入り込んでいくのは、外敵の侵略によってカール大帝の帝国が跡形もなく分解し、分散した権力の下に無数の孤立した小社会が発生した後のことです。

封建領主は自分自身が知行(封土)を国王から授けられている立場上、臣下の忠誠心をつなぎ止める上での知行方式の限界を熟知しています。知行の世襲を最初はできるだけ制限したり、世襲となった後では世襲の手続を厳重にし、騎士叙任式や臣従礼に宗教的な儀式を取り入れたり、知行保持の条件を細かく規定したり、できるだけ主君の宮廷に出仕させたり、臣下の子供を騎士叙任式まで主君の家庭に生活させて教育するなど、臣下の自由行動を抑える目的でなされたことです。

当時の主君は強力な官僚組織を持っていませんので、主要な問題を自分一人の力で解決できず、臣下を集めて会議で意見を聞かなければなりません。これを繰り返している内に、臣下の出廷義務はむしろ権利となり、

機会を捕まえて臣下は軍務、その他の義務の負担の軽減を勝ち取るようになります。当時の主君と臣下の力関係はなかなか微妙であったといえます。

国王も一般領主もその力の源泉は直領地にあります。できるだけ多くの直領地を保有し(ウィリアム征服王の場合は全領土の五分之一)、多くの直属の部下を抱えることが、他の臣下の独立を抑える効果的なやり方でした。

国王はその国の教会の最高保護者であり、国王が聖職者の任命権を持つ限りでは、世襲の利害を持たない聖職者を役人として用い、或いは普通以上の兵員や貢納の義務を課して、教会を王権の有力な支柱にすることもできました。しかし、これらの利点は、法王権が皇帝或いは国王に聖職者の任命権を認めている限りのことです。

5・3 自力救済権と自治都市の出現

中世では深刻な争いごとの解決は法廷の内外を問わず、武力で行われることが多かったので、武力による自力救済権を有する者の間ではフェーデ(私闘)が多発しました。農民は武力を持たないため、教会や貴族の保護に頼るほかの道はありません。これは託身といい、託身した者は自力救済権を自ら放棄し、保護者が救済権を行使します。こうして**中世の農奴**が発生しました。

一方、都市の市民たちは互いにフェーデの中止を誓い合って団結し、軍隊とその資金を用意して、完全な平和の団体を市壁の中に作り上げます。これは市民各自が自力救済権を否定し合うことによって、団体そのものを一つの自力救済権の主体に変えることです。団体員に危害を加える者には、市民の団体が自力救済権を発動しました。これに都市領主である司祭が抵抗します。ここに市民の経済的独立の要求もからんで、市民自治への闘争が起きます。これが**コミュン**(自治都市)運動で、通常、司祭はコミュン運動を忌み嫌いましたが、多くの場合、都市を味方に付けようとする君主の支持もあって、市民側の勝利に終わり、ヨーロッパに特有の**自由都市**、即ち、封建権力から解放されて、国王に直属する都市が生まれます。これこそ、規模は小さいが、本質的に国家と呼べる団体の原型なのです。

5・4 カノッサの屈辱

1075年始め、法王グレゴリー七世が俗人(国王や諸侯)による聖職者叙任権を否定し、法王権の至高性を謳った法王教書を発しました。これに反撥したドイツ国王ハインリッヒ四世は、王権もまた神が直接に創設したものだと主張し、法王権の下に立つことを拒みました。いざこざの末、グレゴリー法王は復活祭前の公会議でハインリヒに破門を宣告し、彼とキリスト教徒の交わりを断ち、臣下の彼に対する忠誠義務を解除します。既にドイツは分裂の兆しを見せていた折であり、強気のハインリヒも打つ手に窮します。

彼は法王に恭順の意を表し、**1076年**クリスマス直前に家族の女子供と数名の従者だけを伴い、赦免を乞うために法王庁に向かいます。イタリアに入るとドイツと違って、ハインリヒへの同情者が多数付き従い、あたかも遠征軍並みの規模になりました。これには法王も驚き、要害カノッサ城に閉じ籠もります。謁見を拒み続けた法王も、有力仲介者の懇願もあり、ハインリヒは只一人、三重の城門の第二城門まで入ることを許され、無帽、裸足、粗毛の修道衣をまとっただけで、三日間、雪の上に立ち、涙と共に赦免を乞い続けました。しっかり油を絞られた上で、彼は破門を解かれました。

これは聖職者叙任権を持つキリスト教的皇帝権と、宗教界を司るべき地位にある法王権とのヨーロッパでの最高権威を巡る争いです。この争いは皇帝権と法王権という二つの権力中心を併置したカール大帝のローマ帝国復興以来、何時かは爆発することを運命づけられていた重要な問題なのです。

赦免により自由を得たハインリヒのその後の活動は目覚ましく、聖職者でありながら実際には大きな世俗勢力でもあり、必ずしもグレゴリーの純粋な改革に賛同していない教会勢力を再度掌握し、カノッサ行きを約

東違反として諸侯らが立てた対立王を攻めて戦死させました。グレゴリーは再度ハインリヒを破門しますが、ハインリヒは返って法王の罷免を要求しながら大軍を率いてイタリアを南下し、法王をローマ市の聖アンジェロ城に囲みます。1084年、ハインリヒは新たに法王を立てて、その手から帝冠を授けられます。

次の世代になって、皇帝ハインリヒ五世と法王カリクトス二世の間でウォルムス条約が締結されて、この問題は一応の決着を見ます。皇帝側は司教を任命する権利を放棄し、代わりに司教領を皇帝の知行とし、これを司祭に授封する権利を確保しました。「カエサルのもものはカエサルへ、神のもものは神へ返しなさい」(マタイ福音書 22・21)の実現です。皇帝がカール大帝以来の神政政治を放棄したのです。

東洋の専制君主や東ローマ皇帝のような神権的な絶対支配は、ここヨーロッパでは否定されたのです。「あらゆる権威がその批判者を持つ」ことを意味し、支配者の不正に反抗する臣下の抵抗権を認める中世法を政治上最終的に確認したことになります。このことの意味のヨーロッパ文化に与える影響は重要です。

5・5 古代から中世にかけての人口の推移

ここでローマ帝国からこの時代までの人口の推移を追ってみましょう。(ベロッホの推計によると、)14年(ティベリウス帝の時代)頃、ヨーロッパは2,300万人(イタリア600万人、フランス490万人、スペイン600万人)、アジアは1,950万人、アフリカは1,150万人で、ローマ帝国全土で5,400万人でした。

ローマ帝国は成長を続け、2世紀には約7,000万人と人口のピークを迎えますが、3世紀にははっきりと減少傾向に入ります。165年に西アジアからローマ軍がペストを持ち込み、180年までに人口の大減少を招きます。262年には**発疹チフス**と思われる病気が猖獗を極め、250～270年の飢饉と重なって惨禍を悲惨なものにしています。

ローマ文明が必要とした大量の燃料や建材も**山林を荒廃**させ、**河川の氾濫**を招き、各地に土砂を溢れさせ、**低湿地**を広げてマラリアの温床となり、人の住めぬ**荒野**が随所に出現しました。避妊による人口減少も、暗い将来の見通しに対する人間の自然な反応であったようです。

侵入してきたゲルマン人は、東ゴート族20万人、ブルグント族10万人、ヴァンダル族8万人と少人数なのですが、弱体化したローマ帝国はこれに耐えることができませんでした。エチオピア起源のペストが580年にヨーロッパを襲い、7世紀には人口はどん底に落ちています。

8世紀からの**温暖化**は農業生産の増大をもたらし、社会の各方面に余裕を生じ、**人口は増加**に転じます。目立つのは手工業や商業が活発化して**中都市が勃興**してきます。農村も(カール大帝の)カロリング王朝の時代にゲルマン人が立ち去って空白となっていた地帯に向かい、或いはそれを越えて東に拡張を続けます。モーゼル川流域の村の数を例にとると、800年の340から1200年には1,190となり、この間に人口も11倍になりました。

ヨーロッパの人口は(ベネットの試算によると)200年6,700万人、700年2,700万人、1000年4,200万人、1300年7,300万人です。全体的に8～13世紀の600年間は、人口増加の局面に入ったのです。

このような社会経済的背景を念頭に置いて、前後の章を見直してください。

5・6 十字軍の遠征(1097～1291年)

地中海世界でのイスラーム勢力の膨張は10世紀初めで終わり、11世紀からはヨーロッパ側の反攻が始まりました。イベリア半島(現スペイン)で11世紀前半にコルドヴァのカリフ国が分裂すると、これまで半島北部に圧迫されていたカスティーリア国とアラゴン国が先頭に立って**レコンキスタ**(再征服)を開始します。

11世紀後半から12世紀前半はヨーロッパによる地中海世界のレコンキスタの時代といえます。そして、聖地奪回の十字軍もその一環と位置づけられます。

第一回十字軍（1097～1099 年）：11 世紀にイスラーム教に改宗したイランの騎馬民族セルジューク・トルコが急速に力をつけ、イスラーム勢力の支配階級となり、1071～1081 年に小アジア、シリアを陥落させ、キリスト教の聖地はヨーロッパから遮断されました。1095 年にトルコ軍がコンスタンチノーブルの対岸に迫り、東ローマ皇帝はローマ法王ウルバン二世に救援を求めました。これを東西キリスト教の再統合の好機と見たウルバンはフランスで一大公会議を開催し、火を吐くような熱弁で十字軍の遠征を求め、聴衆は歓喜の声で応えます。「従軍者の財産と家族はローマ教会の直接保護下にあり、万一、聖戦に倒れた者は一切の罪を許されて、天国が保証されるだろう」と法王は述べます。彼は次のようにも述べています。「あなた方の国々は八方塞がり、高い山に取り囲まれ、海によって隔てられていて、そんな多数の人数のためには狭すぎるのです」。聖地奪回の名目の下に、人口過剰対策として領地獲得を目指したいとの本音が出ています。

1097 年にアジアに渡った十字軍の規模は数十万と呼称しましたが、実際は騎兵約 5,000 人、歩兵約 15,000 人で、それでも当時としては大遠征軍です。彼らに同行した東ローマ帝国のビザンツ軍が約束を違えて引き揚げてしまい、イタリアの船団が食糧や攻城用具を供給してくれるのを待って 1098 年春からアンティオキアを攻め、2 ヶ月の凄惨な攻城戦の末に落城させ、救援に来たトルコ軍も徹底的に打ち破りました。戦死等で聖都エルサレムに来られたのは、最初の人数の 3 分の 2 になっていました。聖都が落ちたのは 1099 年夏です。この時の十字軍戦士の異教徒に対する残虐さ、略奪の激しさは目を覆わせるものであったと史書は伝えます。

占領地はエデッサ伯領、アンティオキア公領、トリポリ伯領に分けられてそれぞれの支配者は厳格な封建制をとり、各地に城を築いて支配の拠点とします。エデッサのボードアンが 1100 年のクリスマスにエルサレム国王に推挙されました。

第一次十字軍の成功は、ヨーロッパ側では国家が未成熟で法王権が有効であったために、フランクやノルマンの騎士たちの協働ができたためです。また、イスラーム側では、キリスト教徒の侵入に対する共同の組織が欠けていたために遅れを取りました。法王にとって、好条件に恵まれた勝利でした。

第二回十字軍（1147～1148 年）：1145 年にイスラーム側の反攻でエデッサ伯領を奪い返され、法王の要請でフランス国王、ドイツ国王と多数の司祭、貴族が加わったが、当時はイベリア半島のレコンキスタが佳境に入っており、イタリアの軍勢はそちらに加わることを勧められ、ドイツ諸侯から願い出られた北方スラブ人の征服も北方十字軍として認められ、全然焦点が絞られていない遠征になりました。ドイツ軍とフランス軍は別々の行動を取り、各個撃破され、僅かにエルサレムに辿り着いた軍勢も、聖地巡礼を済ませてしまった気になって十字軍を解散し、それぞれに帰路につきました。遠くまでわざわざ何をしに行ったのでしょうか。この時期は、聖職者叙任権を巡る争いが終わり、どの国も封建制による組織化が進んだ時期で、それが一段落するまでは、例え君主に意欲があっても本来は外征するだけの余裕はなかったのです。

この後のイスラーム側の失地回復は目覚ましいものがあります。将軍・君主サラディン(1137～1193 年)の登場により、イスラーム軍は往時の宗教的情熱と戦闘精神を取り戻し、1187 年にエルサレム王国は落ち、キリスト教徒の下には僅か三市だけが残されます。

第三回十字軍（1189～1192 年）：エルサレムの陥落は流石にこたえました。法王の呼びかけで、ドイツ皇帝フリードリヒ一世(赤髭王)、フランス王フィリップ二世、イギリス王リチャード一世(獅子心王)は日頃の反目を捨てて大同団結しました。指揮者の顔ぶれとしてはこれほど立派な十字軍はありません。しかし、彼らはやはりヨーロッパでの対立をそっくり遠征に持ち込みました。アッコンを落としたのを機に、フランス王は引き揚げます。リチャードは転戦してサラディンの軍を破りますが、さすがに独力で聖都を奪還する力はなく、サラディンと交渉して巡礼者の聖都通行権を得たのに満足して帰国中に、オーストリアで皇帝ハインリヒ六世の軍に捉えられ、莫大な身代金を払って放免され、帰国しました。既に国家の政治的利害が宗教的情

熱を凌いでしまっているのです。

第四回十字軍（1202～1204年）：その頃、法王であった偉大な政治家イノセント三世は、十字軍の大義を説いてヨーロッパを和合させ、その上に法王の覇権を築こうとの雄大な構想の下に、相争う各国を手玉にとって一種の主導権を取るには成功したのですが、諸国の王を十字軍に糾合するのは全く失敗しました。彼の勧誘に乗ったのは、主に北フランスの騎士たちです。この十字軍はやることが無茶苦茶でした。本来はエジプト遠征が目的でしたが、輸送をヴェネツィアに依頼したところ、その商人たちに船賃と引き換えに頼まれて、少し前に商人たちがハンガリー王に奪われたアドリア海の都市ザラを簡単に取り返してやり、法王を怒らせて破門されます。脱線は更に続き、ヴェネツィア商人の口車に乗って、宮廷陰謀渦巻くコンスタンティノープルに矛先を向け、難攻不落といわれた東ローマ帝国の首都を陥落させました。事前の約束に従って、十字軍とヴェネツィアは略奪品を折半し、領土は内陸部を十字軍が、首都の一面と沿岸の諸島をヴェネツィアが分け、自分たちの代表をラテン帝国の皇帝にしました。破門した十字軍が奇妙な大成功を遂げるのを見て、法王は掌を返して、この成功を東西教会の合同として祝福しました。その上で彼らに聖地奪還を要請しましたが、獲物に満足した彼らは、もう、動きませんでした。

十字軍は第八回まであり、更に番外編として参加した子供たちが全員奴隷として売られたフランス少年十字軍(1212年)と、アルプス越えの後に司教の強力な阻止で帰路についた哀れなドイツ少年十字軍等があり、後者は「ハルメーンの笛吹き男」の題材になっています。これも法王庁が各地へ派遣した十字軍説教師を使って宗教的情熱を煽り立てたために、純真で疑うことを知らない少年たちが熱情に駆られての行動です。1291年に聖地最後の拠点アッコンを失った時点で、十字軍のミッションは終了したと考えてよいでしょう。

ヨーロッパが得たもの：十字軍は結果だけ見れば、永続的な領土の獲得には失敗しました。しかし、侵略地に滞在したヨーロッパ人の多数が現地のアラビア語を学び、シリア、スペイン、シチリアにある当時の文明先進国アラブの学校で学びました。そこで得た知識は、その後のヨーロッパの発展に欠かせないものになります。**ギリシャ・ローマ文明の遺産**は、翻訳者にして後継者である**アラブ**を介して、始めて**ヨーロッパに伝わります**。医学、天文学、化学、地理学、数学、建築などの分野で、ヨーロッパ人たちはアラビア語の著書から知識を汲み取り、同化し、模倣し、そしてやがて追い越して行きます。**Algebra**(代数学)、**Algorism**(アラビア記数法)、**Alchemy**(錬金術)、**Alkali**(アルカリ)など、アラビア語源の科学用語が多数あるのは、その名残です。

産業でもヨーロッパ人は紙の製造法、皮のなめし方、紡績、アルコールや砂糖の蒸留法などについて、まず、アラブが用いていた方法を取り入れ、それから改良して行きました。農業も中東との接触によって豊かになっています。アンズ、ナス、冬ネギ、オレンジ、スイカなどのヨーロッパ語はアラビア語源ですし、レモン、オレンジ、バナナ、サフランなどもイスラーム帝国が世界に広めたものです。

5・7 異端審判（13～15世紀）

十字軍が宗教的情熱が外に向かって発揮されたものだとしたら、内へ向かって発揮されたのが異端審判です。審判は訴えを待たず、裁判官が自ら被告人を探しだし、裁判するものです。イノセント三世は裁判は非公開、密告制を許し、被疑者は弁護人を許されず、拷問によって自白を強要されました。このため、一度異端の疑いを掛けられたら、それを晴らすことは殆ど不可能でした。被疑者にその連累者の自白を強要したため、無実の罪が無数に発生しました。「弟は兄を、妻は夫を、召使いは主人を、また各々はその逆を訴えた」と年代史には書かれています。有罪者は罪の軽重により頭割り、舌抜き、火刑に処されました。

異端審判の悲惨は、同時に行われた邪教や魔女の摘発で倍加されました。法王にだけ属する托鉢僧団であるドミニカンとフランシスカンが法王権の尖兵として、異端審判官の役割を担いました。

第2～5章で参考にした文献：

「世界の歴史3／中世ヨーロッパ」堀米庸三／中央文庫

「世界の歴史5／西域とイスラム」岩村忍／中央文庫

「古代文明と気候大変動」ブライアン・フェイガン／東郷えりか訳：河出書房

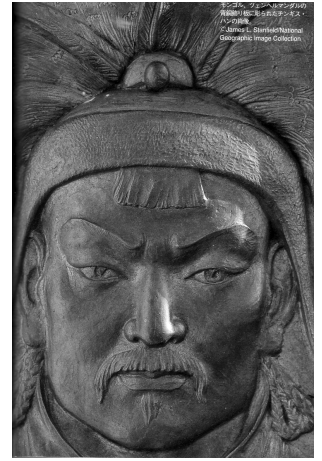
「文明の人口史」湯浅赳男／新評論

6. チンギス・ハンのモンゴル帝国（13～14世紀）

6・1 チンギス・ハンの生い立ちと発展

「歴史の流れは生産技術の進歩と階級闘争によって生じた必然の連続である。個人の存在によって変わるものではない」と共産主義者は唯物史観に立って述べます。しかし、13世紀にユーラシア大陸で生じた改革だけは「彼がいなくても、歴史は同じくなった」とは到底言えません。

1162年、モンゴル族ボルジギン部キャト氏イエスゲイ家にテムジンは生まれました。小貴族の長子という立場です。ところが、父親は早くしてタタル族に毒殺され、キャト氏族は離れ去り、残された家族は草原で孤立し、必死で生き延びます。この悲境が彼の人生の原点なのです。その後も彼の人生は戦いの連続です。彼がモンゴルの支配者になるまでの主な戦いを挙げてみます。



チンギス・ハンの浮き彫り

（「チンギス・ハンの世界」／講談社 p40）

セレンゲ川の戦い：亡父の盟友トオリル・ハンとテムジンの盟友ジャムカの

騎馬隊の力を借りて、メルキト族に掠られた妻ボルテを救い出します。

十三翼の戦い：キャト族はテムジンをハンに推挙せんとし、対抗してジャムカはタイチュウト族を味方にして戦います。テムジンが負けますが、危険を冒した割には双方とも何の得もありませんでした。

タタル族との戦い：金国に討伐軍を差し向けられたタタル族が退却してくるのを、トオリル・ハンとテムジンの連合軍が撃破します。この時点でテムジンはキャト族の唯一の指導者となりました。

キジル・バシュの戦い：トオリル・ハンと共にナイマン族を撃つが、トオリル・ハンは勝手に去り、テムジンは置き去りにされます。ところがトオリル・ハンが攻められ、テムジンは恨みを捨てて援軍を送ります。こうしてテムジンはトオリル・ハンと対等の立場に立てるようになりました。

タイチュウト族との戦い：トオリル・ハンとテムジンの連合軍が有力部族タイチュウト族を打ち破ります。

コイテンの戦い：ジャムカが対抗勢力を糾合して、トオリル・テムジン連合軍と戦い、ジャムカが敗れて逃走し、連合軍はモンゴル高原東部を平定しました。

カラカルジト沙漠の戦い：トオリル・ハンは実子セングンの讒言を受け入れ、テムジンを奇襲します。辛くも逃れたテムジンは態勢を立て直し、相手の内紛に乗じてトオリル・ハンを急襲して大勝を収めます。

ラクダ原の戦い：バイカル湖付近のナイマン族を撃ちます。ジャムカも捕らえられ、処刑されます。

西夏攻略：城砦都市を持つ西夏は攻略に5年かかりましたが、戦利品が莫大でした。ラクダは兵站部隊を強化します。

1206年、クリルタイ(部族集会)でテムジンはチンギス・ハンの称号を受け、部族名もモンゴルと改めます。こうしてチンギス・ハンの中央アジアのトルコ系、モンゴル系の諸部族を自己の権力下に統合する事業は約20年をかけて完成しました。彼ははいよいよ世界征服に乗り出します。

6・2 チンギス・ハンのモンゴル帝国建設事業

第一次金国攻略戦争：金国は南宋の進攻を斥けて、大いに意気が上り、活力に満ちていました。約500kmのゴビ砂漠を越えるために、慎重な準備が必要です。チンギス・ハンは周到な外交戦略を巡らし、金国の味方であったキタイ(契丹)族とオングート族を味方に付けます。こうして沙漠の補給線を確保、1210年に3軍に分かれて南下、90余の都市を攻略し、1215年中都(現・北京)を兵糧攻めで陥落させます。



（「世界を創った男特集」／日本経済新聞 2007/5/20）

クチュルク(西遼)討伐：西遼

(カラキタイ)に逃れ、
国王になっていたナイマン
族のクチュルク王子を征伐
すべく、1218年、ハンは将
軍ジュベに2万の軍を与え
ます。

彼は西遼国内に密偵を放ち、
噂や密告で攪乱戦術を行い、
内乱状態と化した西遼に
ジュベは軍を進め、支配下
に収めます。



「世界を創った男特集」 堺屋太一／日本経済新聞 2007/5/20)

大西征(中央アジア征服戦争)：1218年、ハンは大通商団を中央アジアに派遣し、当時、最盛期にあったホラズム王国との通商再開を求めますが、商隊は全員殺害されます。

この時にハンは次のように宣言します。「司令官、大官、平民よ。神が東から西に及ぶ地上の帝国を朕に
与え賜うたことを知れ。降伏する者は助命さるべし。抵抗する者は不幸に襲われ、妻子、平民と共に屠
られん」。

ハンのこの言葉は単なる威嚇ではなく、その後の遠征でも言葉通りに実行され、彼らが世界と考える領
域をほぼ全部征服しました。ホラズムの場合は、ハンは 20 万の軍勢を率いて攻め込み、城砦都市ブハ
ラを落とし、瞬間に首都サマルカンドも制圧しました。

インダス川の戦い：ホラズム王国の後継者ジェラルール・アッディーンが現在のアフガニスタンで 1221 年に
7万の大軍を集め、3万のモンゴル軍と対戦し、ほぼ全滅させます。ハンは復讐戦に乗り出し、両軍は
遂にインダス川で対戦、負けたジェラルール・アッディーンは単騎崖から川に飛び込み、泳ぎ去ります。
ハンは孫たちにその姿を見せ、「あれぞ真の勇者」と讃えました。モンゴル軍はインドに侵入して追いま
すが、酷暑と各種の病気に襲われ、インドの征服を断念して帰国しました。

カルカ川の戦い：カフカス山脈を越えて侵略するモンゴル軍にロシアとブルガルの諸侯が連合軍を編成、迎
え撃ちますが、重装騎兵の連合軍は軽装騎兵のモンゴル軍を深追ひして囲まれ、全員殺害されます。
その後、ロシアは長くモンゴル帝国の支配下に置かれました。「タルタルの軛(くびき)」といひます。

西夏再攻略：西夏王はホラズム攻撃に従軍を拒み、1226年、ハンは自ら指揮して進攻します。本当は南宋攻
略を目指していたような準備と布陣でした。俄にハンは重病に罹り、8日後に逝去します。享年 64 歳
でした。遺骸はケンテイ山脈に埋葬されたといひますが、いまでも、その場所は明らかになっていません。

6・3 後継者に引き継がれたモンゴル帝国の版図拡大と維持

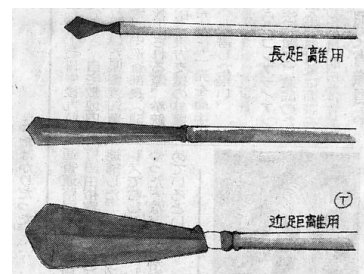
モンゴル帝国は、最盛期にはユーラシア大陸の7割の面積と6割の人口を版図に収めました。孫であるフビ
ライ・ハンの時代に最盛期を迎えた元朝(1271～1368年)は約百年間で終わります。

次男チャガタイの子孫の地はアルタイ山からアム川まで及び、1360年にバルラス氏族のティムールが嗣ぎ、
その子孫は北インドに入ってムガル帝国(“モンゴル”の意)を創り、1858年にイギリスにより帝位を廃位さ
れるまで続けました。

ロシアは1237年に侵略され、以来、約500年間にわたってモンゴルに支配されています。この間にロシアの文明は著しく発展し、モスクワは大都市に成長しました。17世紀まではロシアではチンギス・ハンの子孫でないとツァーリ(ハン)になれませんでした。ロシア人にはモンゴル人の血が色濃く入っています。いま、日本人の若者たちは茶髪にするなど西洋人の風貌を真似るのが格好良いとの風潮がありますが、当時のモンゴル帝国の人々の理想の風貌はモンゴル人のそれでした。

6・4 チンギス・ハンの軍は何故強かったのか

- (1) **全兵士騎兵編成**：主力の軽装騎兵は絹の下着、フェルトの上着に革製の胸当てを着用、弓矢と刀で武装します。約50kgもの重装備を身に付けたヨーロッパの騎士は俊敏な動きができず、弓矢を主な武器として敏捷に進退するモンゴル騎兵に対抗できませんでした。
- (2) **命令必行の戦闘体制**：モンゴル兵はウマとヒツジを伴って行軍するので、家畜に牧草を与えるために広く展開します。南北1000kmもの巾 **モンゴル軍の鏃** (大沼映夫画) に展開し、約束の日に敵前で一斉に集合しています。これを実行するには、①命令権者は明確にただ一人とする、②命令は単純明快にする、③一度決めたら滅多に変えない、の三原則を徹底しています。
- (3) **強力な弓矢**：元寇の役の時、元の矢の射程距離は世界で最も長い約200m、日本は約120mであったと伝えられます。戦士は各自72本の長距離用矢と破壊力が大きい短距離戦用矢を用意します。長距離用の軽い弓と短距離用の重い弓を持ち、接近戦になると矢継ぎ早に矢を連射し、一対一の槍勝負に慣れたヨーロッパの騎士では歯が立ちません。右上図の一番下の接近戦用のごつい鏃(やじり)を見てください。軽装で機動力に優れた蒙古騎兵は、これで西欧の鈍重な重装騎兵の鎧(よろい)の鉄板を貫いたのです。一日の戦闘で、平均50本の矢を射たといえます。
- (4) **鉄の利用と大量物量作戦**：この時期に石炭・コークスを熱源とする製鉄技術の普及が鉄の大量生産を可能にしました。優れた兵站力を持ち、城砦を攻略する時は投石機、投槍機、大型梯子、各種城壁破壊機などの大型兵器を大量に製造・運搬し、それを見た中国や中東の兵は仰天したといえます。
- (5) **大量殺戮戦略**：降伏勧告に応じた敵は許すが、抵抗した敵は皆殺しにします。その冷酷・残虐さは歴史に定評がありますが、誇大に噂に流し、敵の抵抗意志を削ぐ意図もありました。米国が広島、長崎に原爆を落としたのも、全く同じ戦略思想によるということが出来ます。
- (6) **大量報復戦略**：支配した各地に「ガルダチ(地方統治官)と60人のモンゴル兵」を置いていきます。ガルダチが殺害されるような事態が起こると、その都市の住民を皆殺しにして都市を完全に破壊します。チンギス・ハンの騎馬軍団は、組織力・兵站力・情報力・敵を欺く奇抜な戦法など、あらゆる面で当時の最先端の能力を持つ恐るべき軍団だったのです。



6・5 チンギス・ハンの理念と戦略

基本理念：「地に境界なく、人に差別ない」世界を創るのがハンの基本理念です。具体的には

- (1) **無限無差別取り込み主義**：敵対者には厳しく残忍ですが、降伏・帰順した者には寛大です。残った差別は「先に臣従した者ほど上座に座る」伝統的社会慣習だけでした。家系や地位や宗教に関係なく、功労や能力によって隷属部族や異邦人も分け隔てなく重用しました。異邦人からもモンゴル軍の大將軍が輩出しています。ローマ帝国のやり方とよく似ていませんか。ハンの子や孫の版図拡大の成功も、この組織と慣習のお蔭です。
- (2) **絶対王政**：氏族原理の統治体制から約20年間かけて強力な親衛隊を持つ絶対王政に移行します。

ヨーロッパに絶対王政が生まれる 400 年前のことです。

- (3) **経済重視**：ハンは通商と通信を妨げる者を決して許しませんでした。徹底して情報収集に注力し、諜報要員を全ユーラシアに派遣します。烽火台(のろしだい)を連ね、駅伝制度を整備します。征服戦争でも手工業の職人は拉致して生産に当たらせ、製造業の振興や技術移転も熱心に行います。

6・6 自由貿易と不換紙幣

チンギス・ハンは自由貿易を重視しましたが、その実現のためには、①相互の文化尊重、②取引の安全と均衡、③信頼でき十分な量がある通貨、の三つが必要です。モンゴル帝国は世界で始めて「塩引(えんいん)」や「交鈔(こうしゃ)」などの**不換紙幣**を大量に発行、これを唯一の**基軸通貨**としました。いまのドルと同じ存在です。この不換紙幣は価値を下げながらも、80 年間もユーラシア大陸で流通し続けました。驚くべき先見性です。これまで、細く危険であった**東西の交易**が、治安も良く、関税もない**安全な産業**となり、投資事業組合「オルトク」(現代風にいえば「**投資ファンド**」)も大成長しました。フビライ・ハンの治世にはヴェニス商人**マルコ・ポーロ**父子が中国に来るほどに東西交通も安全になりました。マルコ・ポーロは 17 年後に海路でインド洋を横切って帰国しています。海洋通商まで盛んになっていたのです。

同じ時代のヨーロッパの、治安が最悪で、交易は愚か交通もままならず、至る処で勝手に通行税を取る状況との余りの落差に感嘆を禁じ得ません。現代の EU は、域内でモンゴル帝国のような人や物の移動が自由な状態を作りだそうとするものです。

……チンギス・ハンは生涯に少なくとも四度、絶体絶命の窮地に陥った。史上の英傑で、これほど何度も負けた者は珍しい。だが、その都度這い上がり、以前に増した地位に躍り出る。その心身の強靱さには感嘆と畏敬を禁じ得ない。……特に最後の二十年間、チンギス・ハンが高齢になってから行った中華の金朝や中央アジアへの征服戦争では、種々な人種から出た人々がいろんな分野で活躍する。その殆どは低い身分から出た苦労人であり、正規の教育を受けたことのなさそうな人々である。そんな人々が、軍事だけでなく、行政や立法、財政、金融の面でも、斬新な発想を持って近代的な概念と制度を作り上げた。……それを具(つぶさ)に見ると、チンギス・ハンの許には、史上の大天才が雲集したのかと思うほどだ。何しろ十年かそこらの内に、文字も暦も知らなかった連中が、世界の大半を征服し、「世界」の概念と大交流時代を開く仕組みの基本を創り上げたのだから凄い。これほどの革新を、これほどの短期間にやり遂げた集団は、世界史上に例がない。しかし、チンギス・ハンの時代に限って、漠北草原や中央アジアの乾燥地帯に各分野の大天才が多生したとは考え難い。チンギス・ハンが人種や宗教や年齢に捕らわれず、人材を登用したのは凄いが、彼が接し得た人数は多寡が知れている。論文公募や試験選択で秀才を選び抜く制度があった訳でもない。チンギス・ハンが遭遇した何千人かの中に大天才が何人もいたのではなく、いつ何処にでもいる人間集団の中から、近代を開く人材が見出され、大任を委され提案を受け入れられたことで「天才的業績」を残したのであろう。名君は賢臣を創るのである。……

(「名君の許に賢臣あり」堺屋太一／日本経済新聞 2007/9/9)

6・7 モンゴル帝国の没落

どのような帝国・国家も、永久・不滅ということはありません。モンゴル帝国の場合の没落の原因は何だったのでしょうか。14 世紀になると、チンギス・ハンの子孫たちにも、イスラーム教やキリスト教や佛教などの宗教に熱中する者が現れます。その多くが、現地王族から入った王妃からの感化によります。

「無限無差別の取り込み主義」は破れ、政治からの文化への介入が強まり、軍事力は分散して大量報復も行われなくなりました。支配層は経済重視の原則を忘れて、信仰にのめり込み、宗徒による差別が広がります。

反乱は交易を妨げ、通貨の需要を減らし、不換紙幣は過剰になり急激に価値を失いました。不換紙幣の増発で財政を賄ってきた政府は財政破綻し、軍事の物量作戦も不可能になります。「**世界帝国の敵**」は主観的な**価値観**(この場合は宗教)の押しつけです。このようにして、チンギス・ハンの死から 110 年経った 1337 年頃から約 20 年間で、帝国の主要な地域での支配力を失いました。

いま、米国が「民主主義」と「経済のグローバリズム」いう価値観を世界に押しつけていますが、「民主主義」の押しつけは、受け入れの下地があった日本では成功しましたが、全く価値観が相容れないイラクでは破綻に瀕しているようです。

この章で参考にした文献：

「チンギス・ハンの世界」 堺屋太一／講談社

「世界を創った男」 堺屋太一／日本経済新聞 2007 年

7. イスラーム教国の中世から近代

7・1 イスラーム教

ユダヤ教はヘブライ語の、キリスト教はギリシャ語の、イスラーム教はアラビア語の聖典(クルアーン)を持つ**同一の神**を信仰する一神教です。同じ神だが、信仰の仕方が違うのです。イスラームとはアラビア語で「神への絶対的帰依者」の意で、「教」の意も含まれます。今日なお、新鮮な活動力を有して信者数を増しつつあり、米国でもキリスト教に代わって社会の底辺の人たちを汲み取り、拡大しつつある有力な宗教です。

イスラーム教は570年頃、アラビアのメッカに生れた**ムハンマド**を創始者とし、当時の経済格差や人種差別が酷かった部族主義社会を否定し、イスラーム共同体に属する信徒は全て神の前に平等で、相互扶助の精神を強調する**社会主義的主張の宗教**です。その成立と発展の詳細は「**宗教…イスラーム教**」に譲りますが、イスラーム教を知らないと、現代の世界を読み解くことができないと思ってください。その生い立ちから「戦士の宗教」としての色彩が濃く、「**政教一体**」の社会構造を持ち、「宗教」と「政治」を截然と分離して近代国家を建設して来た西欧諸国と鋭い一線を画しています。

これは単なる信仰体系ではなく、明確な共同体構築の原理で、政府、法律、制度を規定しています。生活に関しても一日5回のメッカに向かっての礼拝、年一回(ラマダーン)と月暦で月一回の断食、食肉の禁忌・処理ルール、結婚・離婚、出生、相続、財産、利子、埋葬、割礼、喜捨、聖戦等の詳細な規定があります。



拡大する
イスラーム帝国の最大版図(700~850年頃) (『興亡の世界史 06/イスラーム帝国のジハード』小杉泰/講談社)

7・2 勃興期のアラブ

上図のグリーンの部分が、イスラーム帝国の版図が最大となった8~9世紀の情勢です。褐色部はビザンツ(東ローマ)帝国の版図、ピンク部は唐の版図です。ムハンマドは亡くなる632年までに全アラビア半島を征服し、イスラーム教国として教化しました。

ムハンマド亡き後の初代カリフ(ハリーファ)となったアブー・バルクは離反しかかる諸部族をイスラーム共同体に再度統合するリッダ戦争に勝利します。634年に第二代カリフとなったウマルは猛将ハリードを遣わ

し、ヤルムークの戦いではビザンツ帝国軍 12 万人に 4 万人で立ち向かってイスラームにとっての聖都エルサレムを含むシリアを版図に収めます。更に 400 年にわたって巨大帝国であり続けたササン朝ペルシャを 651 年に破って版図に加えます。ウマルの 10 年の治世でイスラーム国家の周辺から敵対勢力を除き、行政機関が創設され、国家機構が整備されました。

第三代カリフ・ウスマーンは、伝承され神からの啓示であるムハンマドの言葉を蒐集・編纂して聖典クルアーンを完成しました。この時期は一旦征服事業が停滞し、彼が凶刃に倒れた後、「大内紛」と呼ばれる困難な時期が続き、この時に今日も紛争の種であるスンニ派、シーア派等の分派が発生しました。

最終的にはムハンマドの血統には属さないムアウィヤがカリフに就任し、661 年、ウマイヤ朝が始まります。これは、社会規模が大規模になり、共同体のコンセンサスに基づく統治が不可能になった時代に対応するためのものでした。ローマが共和制から帝政に移行したのと同じ状況です。

ここまでは、アラブの民が勃興すれば経済的・地政学的に征服するであろうと納得できます。ここからの更なる征服は新興民族のエネルギーの噴出による成り行きと言えるでしょう。アラブ人たちは新興民族の意気に燃えて、前出「2・6 イスラーム勢力の勃興とヨーロッパ侵攻」に述べたような大発展をします。

14 代続いたウマイヤ朝は 750 年にアッバース朝に交替し、首都はバグダードに移ります。第五代カリフ・ハールーン・ラシード(在位 786~809 年)の治世は概ね平安で、巨大な帝国が繁栄を享受していた意味では**最良の黄金時代**でした。ハールーンは英明君主とされ、「アラビアン・ナイト」の主要な登場人物の一人として知られています。

この時代は、東は中国から西は地中海に至る宏大な地域が、交易と文化交流のネットワークによって結ばれます。北アフリカからサハラ砂漠を南下する貿易ルートも発展し、ほぼ旧大陸全域がこのネットワークでカバーされました。これが**世界で最初の世界貿易網**で、その次がモンゴル帝国の貿易網、そして三番目が近代の西洋列強の制覇・進出により新大陸を含む世界貿易網の成立となります。

その貿易中心となったのが、帝都バグダードです。当時、30 万のモスクと 6 万の浴場があり、推定人口は 200 万人で世界最大の都市でした。

第七代カリフ・マアムーン(在位 813~833 年)は**科学や哲学の文献のアラビア語訳を大規模に進め**させました。これらの諸科学を吸収した上で、更に発展したイスラーム科学が成立しました。

イスラーム文明は西アジアから地中海地域で最も先進的文明となり、イベリア半島ではイスラームに改宗しないキリスト教徒さえもその文化に同化して「モサラベ(アラブ化した人々)」と呼ばれるほどでした。9 世紀のある神父は「若者たちがアラビア語の詩に夢中で、ラテン語の学習を止めてしまった。」と嘆く記録を残しています。

7・3 イスラーム帝国の落日

イスラーム帝国は中央アジア草原のトルコ系遊牧民であったセルジューク朝(1038~1157 年)が支配権を収め、スルタンに就任します。この時代の権力構造はカリフは天皇、スルタンが幕府の将軍のような関係です。勢力を広げたセルジューク勢力の一部がエルサレムを占領し、この時期に「トルコ人が聖地を占領して、キリスト教徒の巡礼を妨害している」との噂がヨーロッパに広がったのが、十字軍派遣の動機となっています。史書はセルジューク・トルコのスルタン・マスウードがカリフのアル・ムスタルシドと通訳付きで話し合ったと記録します。セルジュークは先祖がバグダードを奪取してアラブ世界の支配者となってから 80 年にもなるのに、イスラーム教徒でありながら全くアラビア語を話せないのです。

もっと悪いことに、ユーラシア草原からアラブや地中海文明と全く結び付きがない戦士たち(後出マルムーク等)が定期便のようにやって来て、支配階級である軍部に同化します。以来、アラブは支配され、抑圧され、馬鹿にされ、自分の土地に住みながらよそ者のようになり、7世紀以来始まった自分たちの文化的開化をそれ以上追求するエネルギーを失って行きます。十字軍が襲来した時、彼らは既に社会基盤が弱体化しており、過去の遺産で生きること満足していました。十字軍が来た時点で、この新たな侵略者に対して、殆どの点でまだ明らかに先進的であったにせよ、彼らの衰退は始まっていたのです。

もう一つの問題は、アラブは安定した法制度を確立できなかったのです。十字軍が支配したエルサレムでは、継承問題はトラブルなく行われています。王国の枢密院が王の政治を有効に監督し、聖職者は公認された役割を果たしています。これに対して、イスラーム国家では、このようなことが全くありません。どの国も君主の死に怯えており、どんな跡目相続も内乱を引き起こしています。

……ティブニーンを去って、我々は延々と続く畑と村を通過したが、その土地は上手に耕されていた。住民はみなムスリムだが、彼らはフランク……神よ、我らを誘惑から守り賜え！……と共に、安楽に暮らしている。彼らの家屋は彼らのものだし、財産も手を付けられることがない。シリアのフランクが管理する全地域はこれと同じ制度下にある。つまり、地所も村も畑もムスリムの所有であるということだ。ところで、彼ら(住人たち)の多くが疑念を持つのは、ムスリムの領土に生きる同胞たちの運命と自分たちの運命を比べる時だ。事実、フランクは平等を旨として行動するのに、この同胞たちは同宗の者が行う不正に苦しんでいるからである。…… (イブン・ジュバイルの証言／「アラブが見た十字軍」アミン・マアルーフ／牟田口義郎・新川昌子訳：リポレポート p396)

7・4 モンゴルの侵略

1258年、イラクに襲来したモンゴル軍はチンギス・ハンの孫フラグが率っていました。第37代カリフは降伏しましたが処刑されてアッバース朝は滅び、帝都の住民も多くは虐殺され、その数は推定で10～100万人まで巾があります。宮殿、大図書館、公共図書館も焼け落ち、破壊されました。バグダードは近世まで、この破壊から立ち直ることができず、地方都市に止まっていました。

十字軍がイスラームの地に侵攻したのが1098年、撤退したのが1291年ですから、モンゴル襲来の時期にはイスラームは東西両面から敵の侵略を受けています。十字軍の場合はキリスト教の聖地奪回との限定的な侵略でしたが、モンゴル軍はアッバース朝の帝都を直撃しましたから、イスラームが受けたダメージは深刻でした。イラン、イラク、中央アジアは1370年頃までモンゴルに支配されます。

7・5 担い手を次々変えたイスラーム国家

既に10世紀より各地域にいろんな王朝が出現し始めています。アラビア半島ではファーティマ朝、アイユーブ朝の後、マムルーク朝(1250～1517年)となります。

マムルークとは男性奴隷の意で、トルコ、中央アジアから少年奴隷を入れ、幼年期からイスラーム教化し、軍事養成所で徹底して軍事訓練を行った軍事エリートたちです。彼らは各王朝のカリフたちの私兵として働きますが、クーデタを起こしてエジプト、アラビア半島、シリアの支配権を奪い、およそ3世紀近く自分たちの王朝を維持しました。

7・6 最後の光芒… 陸の帝国・オスマン朝

次にイスラーム帝国を嗣いだのはオスマン王朝(1299～1922 年)です。トルコ系のオスマン王家を君主とする多民族国家です。

ビザンツ(東ローマ)帝国、マルムーク朝などを征服し、17 世紀の最大版図は東西はアゼルバイジャンからモロッコに至り、東西はイエメンからウクライナ、ハンガリー、チェコスロヴァキアに至る広大な領域に及んでいます。

地図で示せば、右図のように地中海世界の過半を覆い尽くす大帝国です。当然、現在ではグローバル文明となっている西欧文明社会に及ぼした影響は強烈でした。



(オスマン帝国／Wikipedia)

8～13 世紀は西欧が人口増加が著しい時期で、人口圧力が十字軍の暴発の原動力となっています。次の章にあるように、この後西欧はペストと小氷河期と戦乱に見舞われて人口は激減して勢力は弱体化します。时期的には、それに合わせてオスマン帝国の勢力は伸張し、西欧キリスト教世界にとっての重大な脅威となり、15 世紀から 16 世紀にかけて、「**オスマンの衝撃**」となりました。それはキリスト教の宗教改革にも大きな影響を及ぼし、ハプスブルグ帝国による西欧の統一とカソリックの世界帝国構築の夢を挫折させています。

宮廷言語こそアラビア語やペルシャ語の語彙を多く取り込んだトルコ語でしたが、支配階層は民族・宗教の枠を越えた様々な出自の人々が登用され、**多民族・多宗教が共存する普遍帝国**でした。

飛躍・発展の時代： 発展の歴史を概説しましょう。13 世紀末にアナトリア西北部に興った部族長オスマン 1 世が率いる戦闘集団が次第に領土を拡大してオスマン君侯国を築きます。1326 年、オスマンを嗣いだオルハンアナトニア最西北部を支配下におき、東ローマ帝国の首都コンスタンチノーブルの対岸のブルサを最初の首都とします。

その子ムラト 1 世はアドリアノーブルを占領して第二首都とします。キリスト教徒の子弟を徴兵して常備歩兵軍イエニチェリを創設します。当時の西欧諸国はまだ常備軍を備えていませんでした。

1389 年のコソヴォの戦いでバルカン諸侯の連合軍を破りますが、ムラト 1 世は敵方に暗殺され、バヤズィト 1 世が戦場で即位しています。

いろいろな経緯があり、一旦は諸侯鼎立となった帝国を、バヤズィトの子メフメト(“ムハンマド”の意)1 世が 1412 年に再統合に成功し、その子ムラト 2 世も失地回復に努めます。

1453 年、ムラト 2 世の子メフメト 2 世は東ローマ帝国の首都コンスタンチノーブルを攻略、1453 年、遂に攻め落とします。西暦 330/5/11 にコンスタンチヌス大帝により創設された東ローマ帝国は 1,123 年に亘る歴史を閉じたのでした。この戦いで、メフメト 2 世が極秘裏に行った百数十隻の艦隊の山越え、当時の技術水準では考えられないほどの巨大な青銅の大砲 30 数門をはるばる運搬して城壁を破壊するために並べた世界最初の重砲部隊など、**オスマン帝国の軍事技術の先進性とそれを支える巨大な経済力**が見て取れます。オスマン帝国の首都となったコンスタンチンノーブルはギリシャ語由来のイスタンブールという名称で呼ばれるようになりました。戦史に名高いこの戦については、ステファン・ツヴァイクの「人生の星輝く時」(三笠新書)の「ビザンツの攻略」の章、或いは塩野七生氏の「コンスタンチノーブルの陥落」(新潮文庫)などの美文を味わってください。

メフメト 2 世は更にギリシャ、セルビア、アルバニア、ボスニアその他多くの国を征服します。

メフメト 2 世は海軍の増強に着手、15 世紀後半には黒海とエーゲ海を「**オスマンの内海**」としています。

2 代後のセリム 1 世は支配領域をアラブ人居住地域に広げ、マルムーク朝を併合し、スンナ派イスラーム世界の盟主となります。

次のスレイマン(“ソロモン”の意)1 世の時代にはオスマン帝国は最も国力が充実し、「**陸の帝国オスマン**」

の令名を轟かします。1521年のベオグラード征服、1526年のハンガリー王国に対する戦勝、1529年の第一次ウィーン包囲、クロアチア、ダルマチア、スロベニア各国を略奪、海上では1522年にロードス島を基地とする聖ヨハネ騎士団の駆逐、1538年のプレヴェザの海戦でアルジェリアに至る地中海の制海権を掌握します。スレイマン1世の治世はオスマン帝国の最盛期であり、国制が完成の域に達し、オスマン帝国の人々にとって理想の時代として記憶されています。

ローマ軍によって破壊されたエルサレム神殿を現在の形にまで再建し、イスラーム教、ユダヤ教、キリスト教の三つの宗教が協働して聖地として使えるようにルール化したのもスレイマン1世です。

緩慢な没落の時代：スレイマン以後は君主が陣頭に立って出征することはなくなり、政治すら殆ど大宰相(首相)が担うようになりました。繁栄の陰で宮廷の弛緩から、危機が進行します。政治を支えるべき大宰相が頻繁に交代する政治情勢となり、君主の母后たちが権勢を振るって政争を繰り返して政治が混乱します。更にハプスブルグ家との抗争やサファヴィー朝との対立が17世紀に入ると継続するようになり、版図を維持するための軍事費が増大し、財政が慢性的に赤字化します。経済的混乱に不満を持った暴徒による反乱が頻発します。安定した法制度の確立がないために、首都イスタンブールでは、スルタン継承の抗争が頻発します。内憂外患で国勢は揺らぎますが、キョプリュリュ家2代の大宰相時代には官僚機構を掌握し、安定政権を確立し、帝国の構造転換に成功します。この時代にギリシャ各地やクレタ島、ウクライナまで征服し、スレイマン時代を上回る最大版図を達成しています。

しかし、次の代で功名心から第二次ウィーン包囲を強行し、欧州連合軍に破れ、史上初めてオスマン帝国の領土は削減され、東欧の覇権はハプスブルグ家のオーストリアに奪われます。

近代化を目指す「欧州の瀕死の病人」：17世紀末から18世紀にかけては西欧諸国の軍事技術が近代化したのに、オスマン帝国は軍制や兵器の旧守に固執し、軍事的衰退が表面化します。しかし、この時期は積極的に西欧の技術や文化を吸収し、後期のトルコ・イスラーム文化が成熟して行った時期でもあります。

18世紀末に入ると、ロシア帝国の南下によって、オスマン帝国の小康状態は破られ、次々と領土を侵食されます。軍制の改革の必要性を痛感したセリム3世は、ヨーロッパの軍制を取り入れた新しい陸軍を編成しますが、世襲が進んで既得権益者となり果てたイエニチェリの抵抗に遭って改革は頓挫し、彼はスルタンを廃位させられます。

18世紀中頃から地方の徴税権を委任された地方名士アーヤーンが18世紀末には地方政治の実権を握るようになり、嘗てオスマン帝国の発展を支えた強固な中央政権体制は無実化しました。

一方、フランス革命から波及した民族独立の気運はキリスト教徒諸民族のナショナリズムを鼓舞し、ギリシャ独立戦争(1821~1829年)によりギリシャ王国が独立します。周辺の強国からの圧力により、バルカンの諸民族は次々と自治・独立を獲得し、20世紀初頭にはオスマン帝国の勢力範囲はバルカンのごく一部と、アナトリア、アラブ地域だけにまで減耗しています。オスマン帝国はこのような事態に対して、防戦一方となり、「ヨーロッパの瀕死の病人」と揶揄される惨状を呈します。

オスマン帝国も退勢挽回に務めます。1808年に即位したメフメト2世は、イエニチェリを廃止して軍の西欧化を推進し、外務・内務・財務3省を設立して中央政府を近代化し、翻訳局を設けて西欧に留学生を派遣して人材を育成し、アーヤーンを征伐して中央政府の支配の再確立を目指します。

1839年にはアブデュルメジト1世は改革派官僚の起草したギュルハネ勅令を発布、全面的な改革政治を開始すると宣言し、行政から軍事、文化に至るまで西欧的体制への転換を図るタンジマートを押し進めました。

1853年にはロシア帝国の侵攻を受けてクリミア戦争が勃発します。ロシアの意図は、弱体化したオスマン帝国をフランスやイギリスと2分割して分け合おうというものでしたが、ロシアの仮借なき侵略が、やがて自国の植民地での権益に悪影響を及ぼすことを恐れたフランスやイギリスなどの助けを借りて、際どい勝利を収めます。

この時に、オスマン帝国が近代化を果たしてロシアに付け込まれない様に自主防衛できるだけの国力をつけよと支援国から強く迫られます。

アブデュルメジト1世は1856年に改革勅令を發布、非ムスリムの権利を認める改革を更に押し進めることを約束し、イスラーム宗教法(シャリーア)と西洋近代法の折衷を目指した新法典の制定、近代教育を行う学校の開設、国有地の原則を改めて土地私有制度を認める土地法の施行などの改革を行いました。この改革の過程で、オスマン帝国は西欧から莫大な借款を受け入れますが、それを返済する原資となる農作物が不作に遭い、借款は返済不能となり、国家財政が破綻します。

こうしてオスマン帝国は当事者能力を失い、タンジマートは挫折に終わりますが、支援国より新たな改革を要求された帝国は、1876年にオスマン帝国憲法を公布し、オスマン帝国が西欧型の法治国家であることを宣言し、帝国議会の設置、ムスリムと非ムスリムの完全平等を定めました。

だが翌年、オスマン帝国の混乱に付け込んでロシアが侵略し、首都近郊までロシア軍が進軍しました。この非常事態を受けて一時、憲法の施行を停止し、アブデュルメジト1世による専制政治になります。この時代には財政破綻以降に帝国経済を掌握した諸外国による資本投下が進み、都市には西欧文化が浸透しました。また、繊維工業などの非競争分野で民族資本が育ち、専制に抵触しない範囲での新聞・雑誌の刊行が拡大され、後の憲政復活後の民主主義、民族主義の拡大を準備しています。

西欧式の近代教育を受けた青年将校や下級官吏らは国情に危機感を抱き、1889年に結成された「統一と進歩委員会」(統一派)等が活動して、いろいろの経緯があって統一派が革命に成功して、憲政を復活させます。その間にも帝国の地方は次々と独立を果たし、オスマン帝国は崩壊状態になりました。統一派政府は1914年からの第一次世界大戦で、これまで無色であったドイツ帝国に退勢挽回の望みを託して同盟しますが、残念ながらこの賭けにも破れ、統一派政府は瓦解します。

対戦中の英雄ムスタファ・ケマルパシャを指導者とするアンカラ政府ができ、メフメト6世のオスマン帝国政府はこれを反逆と断じますが、連合国は両政府を講和会議に召集しました。1922年にケマルパシャは二重政府の解消を名目として大国民会議を開催、帝政の廃止が決議されます。この**トルコ革命**により、623年間続いたオスマン朝はなくなり、**イスラーム帝国は消滅**しました。

ケマルパシャは**トルコ共和国を政教分離の近代国家に造り替え**ました。国民は彼にアタテュルク(トルコの父)の尊称を与えて、近代化の功績に報います。

このオスマン帝国崩壊の過程を見ると、現代にとっての多くの歴史の教訓が汲み取れます。また、トルコ国民が何故日露戦争に勝った日本に対して非常に友好的なのかが理解できるでしょう。

7・7 その後のイスラーム

西ヨーロッパにとっては、十字軍時代は経済的・文化的革命の糸口となりましたが、イスラーム勢力が支配するオリエントでは、この後、今日に続く長い衰退と反開化主義の幾世紀となってしまいました。

十字軍とモンゴル軍に両面から攻め立てられ、イスラーム世界は過度に敏感に、防衛的に、偏狭に、非生産的になり、この態度はその後、世界的な規模での発展が続くに連れて一層深刻になり、発展から阻害されていると思い込むようになりました。

近代化を拒絶して、その文化的・宗教的アイデンティティーを確立すべきか、自分のアイデンティティーを失う危険を冒してでも、近代化への道を進むべきか、イランもイラクもアラブ世界も、このジレンマの解決に成功していません。そのために、今日でも上からの近代化推進の局面と、排外的で極端な教条主義の局面との間を急激に揺れ動く不安定な状況を脱することができません。

最近の例では、国外にいたホメイニ師の指導で1978年にイスラーム革命が起き、既に世俗国家であったイランを潤沢な石油からの資金を使って一層の近代国家にしようと努力した国王パフラヴィー二世を国外退去

させ、現在のイランは政教一体のイスラーム原理主義国家に戻っています。

トルコもまた、1923 年、トルコ共和国初代大統領となったムスタファ・ケマルパシャが近代化改革を行い、国教としてのイスラーム教を廃止して信仰の自由を憲法に定めました。一旦は宗教と政治の分離に成功して近代化への道を歩み始めたのですが、現在は再び宗教勢力が盛り返して政治的漂流の危険性を見せています。EU に参加したいとのトルコの要請が現在保留されているのはそのためです。

2008 年のパキスタンの非常事態も、政教一致を図るイスラーム勢力に対して、政教分離を護持したい軍部出身の世俗政権のムシャラフ大統領の必死の政治的対応だったのです。残念ながら、武力に訴えることなく政治的に事態を収めようとした彼の穏健路線は通らず、国会から大統領弾劾決議を受けて静かに退陣しました。21 世紀の今日でも、アラブ世界の政治的・宗教的指導者たちは、相変わらずサラディンやエルサレム陥落とその奪還を引き合いに出して演説し、十字軍のトラウマ(心的傷害)が如何に大きかったかを窺わせます。イスラーム世界は恒久的に迫害されているとの被害感情が生じるのを阻止できず、ある種の狂信者にとって危険な強迫観念となり、今日の多くのテロ事件を生み出す暗いエネルギーとなって沈潜しています。

この章で参考にした文献：

「興亡の世界史 06／イスラーム帝国のジハード」 小杉泰／講談社

「アラブが見た十字軍」 アミン・マアフル／牟田口義郎・新川雅子訳：リプロポート

Wikipedia「オスマン帝国」

8. 大災害、そして大航海時代（14～16世紀）

8・1 農業の生産性向上

地力低下を防ぐために農地を区分して、冬穀(コムギ)・夏穀(オオムギ)・休耕地(放牧による施肥)とローテーションを組んで耕作する三圃制 three field system 農業が普及し、格段に農業の生産性が向上したのがこの時代です。

この時代は、また、生産量増加を追求して、耕地を増やすために限界的な土地まで開拓し、耕地単位面積も小さくなり、増え続ける人口を支える農業が余裕を失って爪先立った状態となります。確かに生産量そのものは増えていますが、環境の変化に対しては、以前より脆弱になっていました。

14世紀初頭のイギリス農民では、もともと農民支配が弱かった小貴族(騎士)の所領から、富裕な農民が多数現れ始めています。北フランスでも、国王の権力が強まり、村の領主(大貴族)の支配力が弱まるにつれ、納税義務を自らの経済力で買い取り、解放される農民が現れます。時には村全体が団結して村の領主に対して租税軽減などの要求をしました。

11～12世紀では領主に全部貢納して、農民は口にするのができなかったコムギが増産できるようになり、農民も白パンを食べるようになります。以前は農民はニワトリ以外の肉を食べることが殆どなかったのに、放牧での畜産が盛んになったこの時代になると、日常的にウシ、ブタ、ヒツジなどの肉を食べるようになりました。中世末期の都市経済の隆盛は、この農業の生産性向上に支えられて実現したものです。

8・2 小氷期とペストの襲来

折角、生活向上の実感が持てた人々を、無惨にも環境災害と「黒死病」(ペスト)が襲い掛かります。1315～1320年にかけてヨーロッパは長期間の豪雨に悩めつけられ、天候不順による不作で深刻な飢餓が始まっており、栄養不良による抵抗力低下も疫病大流行の一因のようです。

1315～1860年の小氷期 Little Ice Age が始まったのです。名称から誤解しやすいのですが、これは約6世紀にわたって気候が絶えず変わり続けた時代であり、4半世紀(4分の1世紀)以上も同じ気候が続くことは滅多にない気候が極めて不安定な時代を指し、バルト海が凍ったり、テムズ川に氷が張って何ヶ月も冬の市が立ったりもしましたが、中には暖かい時期も混じっています。

「5・5 古代から中世にかけての人口」で、これまでも度々、ペストが人類を襲って甚大な損害を与えたことが述べられています。今回のペストは黒海周辺地での戦争当事者間で大流行し、貿易船に乗ってやってきました。貿易ルートの各地での発病時期と規模の詳しい記録が残されています。ヨーロッパは1348年にペストの襲来を受けました。

ペストは罹病して数日で死亡する激しい伝染病で、ネズミとノミが媒介する腺ペスト(死亡率 40～70%)と、空気伝染する肺ペスト(死亡率 90%)がありますが、大きい被害をもたらしたのは前者でした。

伝染の仕方は二通りあり、急速にヨーロッパを駆け抜けたものは 1348～49/1359～61/1369～76/1382～84年の4回ありました。緩やかなものは1390年以降に都市の内部の汚染地区に宿主のネズミが居座って、散発的に各地で発生しています。戸籍調査が徹底しているイギリスでは1350年の人口は370万人ですが、1377年には200万人にまで激減しています。イタリアのアレッツォでは1390年の納税者は1,776人ですが、翌年には557人となり、差し引き1,219人が死亡しています。

ラテン語の格言「Memento Mori (死を想え)」が社会全体でこれほど身近に感じられた時代はありません。ヨーロッパではその結果の社会的ヒステリーとして、ユダヤ人の虐殺と「鞭打ち苦行運動」が広範囲で起こっています。

社会的苛立ちと利害の厳しい対立は反乱と戦争を引き起こします。北フランスの農民反乱は1358年から頻

繁に起こります。英仏間では1337～1453年にわたって100年戦争が戦われました。戦乱で飢えた兵士は農家を襲って食糧を奪います。多くの農民が、飢えと寒さのダブルパンチで死にました。

ペストで最も死んだのは高齢者、次いで成人男性で、女性は比較的生き残りました。免疫力の差です。ペストが去った時、結婚ブームとなり、沢山の子供が生まれましたが、多くの子供は32本あるべき歯が20本か22本しかない栄養不良状態で、子供が長生きできない状態が執拗に続いています。

ペストが去った後、人口が激減したため、コムギを指標とした労働賃金が約2倍に跳ね上がり、「賃金労働者の黄金時代」が訪れます。生産性が低い限界的農地は放棄されて放牧地になるか森林へ復帰します。その結果、社会全体の生産性は著しく向上しました。これが次の時代の社会経済の隆盛に繋がって行きます。

8・3 大航海時代の先駆け：ポルトガル

1251年、ポルトガル王国のレコンキスタ(再征服)は完成し、サラセン人を駆逐したエネルギーは、方向を変えて大西洋から西アフリカへの探検・征服に向かい始めます。ジョアン一世の三男のエンリケ王子は19歳で現モロッコにあったイスラーム都市セウタの征服に貢献し、大量の金を収奪し、アフリカ北西部がその産出地だと知りました。1419年、エンリケ王子はその地の探検を目標として、ポルトガルの南西端にあるサグレス岬に航海研究所を開設します。彼は各地から優れた航海者、造船技師、地理学者、天文学者、羅針盤製作技師などを集めます。メンバーも知識・能力重視で集め、ヨーロッパ人、ユダヤ人、サラセン人、アフリカ西海岸の部族民と役に立ちそうな人は手当たり次第です。

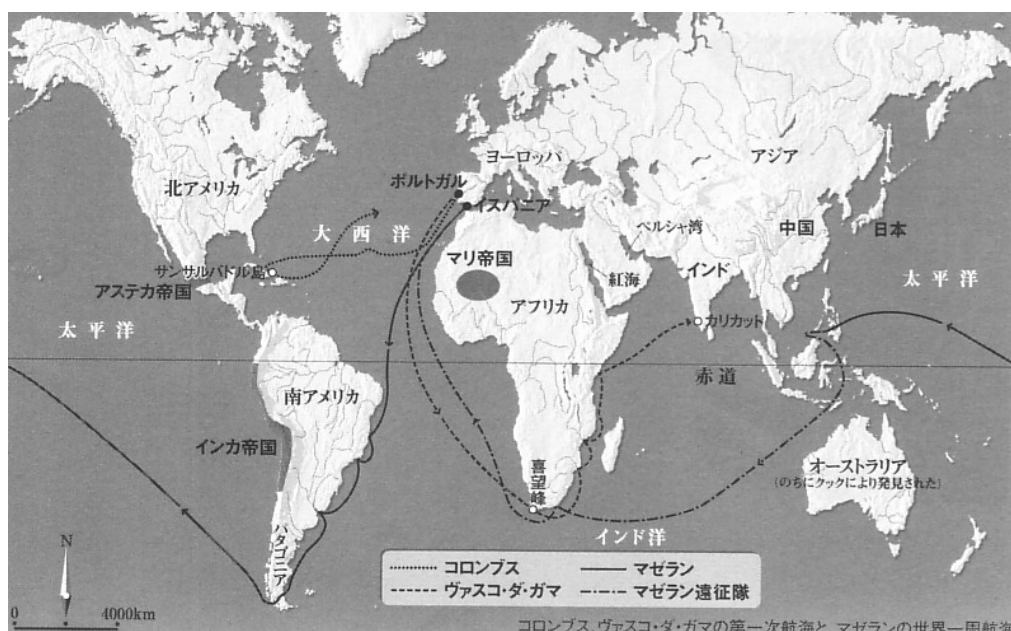
研究の成果は吃水が浅く、甲板を持ち、復元力が強い1本マストの100トン級の帆船となり、エンリケ航海

王子は1460年にこの世を

去るまでの40年間にわたって探検隊を送り続けます。

探検航海事業はジョアン二世、幸運王マヌエルと引き継がれ、探検隊はアフリカ大陸の胡椒海岸、象牙海岸、黄金海岸、奴隷海岸とより遠くを目指し、嘗てイタリアに独占されていたこれら地名の産品をポルトガルが直接貿易できるようになり、新しく開拓された航路による貿易は大きな富をもたらすようになりました。探検航海の一環として、1497年に貴族にして経験豊かな航海士であるヴァスコ・ダ・ガマが荒天に耐える特別設計の4艘の船(178トン級、1艘当たり船員約150名)でサラセン人の制海権下にあるインド洋を横断し、インドのカリカットに到着します。既に長年にわたってサラセン人との貿易を行ってきた現地商人からはガマは貿易相手としては余り大事にはされませんでした。やっとの思いで物々交換で香辛料を買い入れ、帰路に1艘あたり30～100人もの壊血病(ビタミンCの不足)死亡者を出し、水夫不足で2艘を放棄し、2年の遠征から帰国しました。香辛料は遠征に掛かった費用の60倍で売れました。

「インド洋提督」の称号を受けた彼は、1502年、20艘からなる第二次船団を指揮し、武装船団の武力で



大航海時代を開いた人々の航路

「人間ものがたり」J.C.ディヴィス/NHK 出版 p202

威嚇して、インドの王侯からカリカットでの貿易権を得て取引を行ない、帰国後、伯爵の爵位を受け、ここにポルトガルの大航海時代が幕開けします。これまでは武力など無関係な平和的貿易市場であったところに武力で乗り込んで来たルール破りの無法者たちによって、アジア海洋市場の秩序は破壊されてしまいました。ポルトガルは海路を防衛・維持するために海軍基地を設ける戦略を採り、インドのゴア、マレー半島のマラッカ等に基地を設け、ヨーロッパからインド、マレーシア、中国、日本(長崎)への貿易ルートを確立します。こうして、人口 150 万人の小国が海洋貿易における世界の覇者として君臨するに至ります。

しかし、彼らが甘い蜜を吸えたのは僅か半世紀のことでした。この国の国力ではアジアへ行き来し、他国の船を撃退する両面作戦を行える十分な船と船員を調達できないのです。結局、アジア航路にはヨーロッパの他の国々が入り込んで来て、ポルトガルの独占貿易は終わります。1580 年にポルトガルは大国スペインに併合されますが、1640 年には再び独立を勝ち得ています。

8・4 大航海時代の次の主役スペイン

コロンブスの新大陸発見：カスティーリア国女王のイザベル一世とその夫・アラゴン国のフェルナンド二世の連合軍は、1492 年、スペインでのサラセン人最後の拠点グラナダを陥落させてスペインを統一します。スペインもレコンキスタに向けていたエネルギーを、次の目標へと転換する必要がありました。

ジェノバの人**クリストファー・コロンブス**は、この好機にイザベル女王にポルトガルとは逆方向の西方航路を開拓して、インドとの貿易ルートを開設するアイディアの売り込みに成功して特許状を獲得、1492 年、3 艘の船と 90 人の乗組員でパロス港を出航します。

当時の迷信に惑わされた船乗りたちの反抗に悩みながらも、地球球体説を確信する彼は初心を貫き、遂にインドを発見したと思ひ込みますが、これが**メソアメリカ(中米)**でした。

コロンブス自身は不運にも不遇な後半生を送りますが、スペインは彼の偉大な功績を讃えて、右のような立派な顕彰碑(私の撮影)をバルセロナ港近くのロータリーに建てています。

1497 年、イングランド王の勅許状を得たイタリア人ジョン・カポートが 18 人乗りの小さい船で**北アメリカ(北米)**を発見します。

続く探検家・地理学者らによって、南北両大陸が地峡によって繋がっていること、更に西には**太平洋**が開けていることなどが知られます。スペインはポルトガルと違って人口も資源も多いですから、新大陸の内陸部を征服・経営する実力がありました。この新大陸がもたらす巨大な富がヨーロッパの田舎国スペインを一躍世界のトップに押し上げてくれました。



バルセロナのコロンブス顕彰碑

マジェランの世界一周航海：ポルトガルの航海者フェルディナンド・マジェランは西回りのアジア航路の開拓を自国の王に提案して受け入れられず、スペイン王カルロス一世(後の神聖ローマ帝国のカール五世)が取り上げてくれ、1519 年、5 艘の船と 265 人の船員でパラメダ港を出航しました。途中、3 艘の船の反乱と、1 艘の逃亡帰国に悩みながらも、苦労の末に南米の南端近くにあるマジェラン海峡を発見し、太平洋に出ます。マジェランはフィリピン(スペイン国王の名に因む)諸島で現地の住民の紛争に巻き込まれて戦死し、1522 年に僅か 1 艘のヴィクトリア号と、生き残った 18 人と、満載した香辛料となって帰国しました。この莫大

な人命・船舶の損失にも拘わらず、出資者は香辛料の売却で大儲けしています。この時代は人命が如何に安かったかが判ります。マジェランという驚嘆すべき人物は、その全てをなげうって、それまでは理論であった地球が丸いという真理を、世界一周という動かぬ証拠で証明して見せてくれました。また、当時の航海者が考えていたよりも地球は4倍も大きいことも、この航海で証明されました。

スペインのアメリカ内陸部経営： 1519年、スペインのキューバ総督は中米本土探検隊の指揮官としてコルテスを選びました。彼は兵士 508 人と船員約 100 人、馬 16 頭、大砲数門とマスカット銃 13 挺を以てメキシコ東海岸に上陸し、メキシコ中央高原に首都を持つ**アステカ帝国**に向かい、王を捕らえ、多数の貴族を虐殺し、反撃するアステカ軍を2週間で撃破しました。

実はこの時、相手を最も倒したのは、スペイン人が持ち込んだ天然痘、はしか、赤痢であり、これらに全く免疫力を持っていなかったアステカ人は人口の半分以上を失う悲惨な状況に置られました。ささやかなお返しとしてスペイン人が貰ったのが梅毒でした。

マヤ文明は3,200年前に発祥しており、ゼロの概念を含む完全な位取り記数法を発達させ、ルネッサンス以前のヨーロッパ(当時のユリウス暦は太陽の運行から 10 日分ずれていた)よりも正確な暦法を有していました。彼らは文字、書物、神殿、宮殿、王、官僚、神官、連絡道路網、灌漑設備、救災貯蔵庫等ヨーロッパと対比できる文明の要素を全て備えていました。車輪を持たず、金属利用も青銅器に止まってはいましたが、この平和な民族と文明を、スペイン人は非情にも完全に崩壊させてしまったのです。

インカ帝国は現ペルーと現ボリビアを中心に展開する、厳しいが良識がある民族が支配する国家でした。ピサロはスペインのカルロス一世から南米のインカの地の総督に任命され、1531年、180人の兵士、37頭のウマと共にペルーへ渡ります。

5年前から中米から流行してきた天然痘でインカ帝国でも人口が激減しており、また、帝国内では相続権を巡って内乱があり、これに乗じて不意打ちによって王を捕らえ、身代金を積ませておきながら処刑します。スペイン人たちは蓄積されていた財宝を奪い、生き残った人々を金銀の鉱山で悲惨な採掘・精錬作業で酷使し、それらを本国に送ります。彼らの残虐な篡奪は弁解の余地ない文明の一大汚点です。

結果として、スペインは新大陸から湯水の如く流れ込むこの巨大な財宝を、贅沢や建築や軍備に浪費してしまい、将来の発展のための資本として活用することがありませんでした。このため、次の文明発展期の流れに乗り遅れ、最近までヨーロッパの偉大なる田舎の位置を脱することができませんでした。

旧大陸は新大陸からトウモロコシ、ジャガイモ、カンショ(さつまいも)、トマト、ナス、トウガラシ、ナマメなど**40数種の栽培植物**を貰い受けました。この中で、特に**トウモロコシ**と**ジャガイモ**の影響は大きいです。これらは同じ作付け面積でヨーロッパの穀類より**2倍の収量**が得られました。この**農業革命**のお蔭で旧大陸は農産物の生産性が激増し、可扶養人口が増加して後の世代の躍進の原動力となったのです。

8・5 小粒でも頑張りの参入者オランダ

これら二国に続いて、イギリス、オランダが海洋貿易国として伸びてきます。オランダは小国であるにも拘わらず、大活躍しました。オランダは早くから大型輸送船を用いて北欧諸国の物資輸送で活躍し、17世紀には他国の2分の1から3分の1といわれる安い海上運賃で利益を挙げ、「世界の運搬人」といわれる地位を築きます。1634年にはオランダの船舶総数は約34,000艘で、世界の商船の実に4分の3を占めています。優秀な造船技術はこの国をヨーロッパ第一の造船国とし、海上貿易の繁栄に連れて毛織物、絹織物、レンズ工業、製糖業を始め各種加工業が発展し、当時の「**世界の工場**」となります。

オランダの自由な雰囲気は戦乱続きのヨーロッパ各地から優秀な経済能力に富む人たちを吸収し、一層、発

展します。この経済大発展期に世界最初の経済バブルとなった**チューリップ球根のバブル**(1630~1637年)が発生しています。最初は専門家の間で球根の先物売買が行われ、段々と値段が釣り上がってきます。これを知った大衆がなけなしの財産をはたいてマネービルに狂奔しました。高級なチューリップ球根の二、三個あれば、嫁入り持参金として十分な位でした。1637年の大暴落で数千人の破産者を出してブームは終わります。嘗てオランダは大国スペインによって国土を占領されていました。これを歴代オランニエ家の指導により1581年に一部が独立します。全土が独立したのは1648年です。この時には味方になってくれたイギリスと1652年には中継貿易の覇権を争って戦争になり、テムズ川まで侵攻して造船所を焼き払ったり、大いに意気軒昂なところを見せます。結果、この戦争は消耗戦で膠着状態となり、勝者なしで終わりました。1600年にはオランダ船「リーフデ(慈愛)号」が日本の豊後沖に漂着し、この船に乗っていたオランダ人ヤン・ヨーステン(“八重洲”の語源)とイギリス人ウィリアム・アダムス(日本名“三浦按針”)は日本に止まり、江戸幕府の通商顧問として大活躍しました。1609年には平戸にオランダ商館が設けられ、後に長崎の出島に移って、海上貿易と海外の新知識を得る「鎖国の窓」となります。

8・6 海賊からスタートして七つの海を制覇した海洋帝国イギリス(16世紀後半~20世紀初頭)

海賊を活用した海上覇権の確保：海外進出でスペインやポルトガルに後れを取ったイギリスは、国家として特許状を発行して私掠船に敵対国の船や基地を襲撃・略奪させます。これは海軍の常備戦力を削減できる効果があり、掠奪した資材・財宝により経済的に独立した一種の傭兵です。

フランシス・ドレーク(Francis Drake: 1543~1596年)は私掠船の免許を得て1570年から西インド諸島のスペイン船や町を襲撃して財宝を掠奪します。1577年に5艘の艦隊で太平洋に廻り、チリやペルーのスペイン植民地や船を襲って莫大な財宝を得、太平洋を横断して1580年に帰国し、女王エリザベス一世に莫大な金銀財宝を献上しました。その金額は当時のイギリスの国家歳入の2年分に相当したといわれ、その功績により彼は海軍中將に任命され、叙勲を受けます。

彼は1588年、司令官ハワード卿の副司令官としてイギリスを襲撃した**スペインの無敵艦隊(アルマダ)**の艦船131隻、乗組員3万人を相手に回し、105隻の艦船、乗組員1.5万人で立ち向かい、7/21と7/23の砲戦、7/28夜間に可燃物を満載した8隻の火船をスペイン艦隊に突っ込ませて混乱させます。スペイン艦隊も通常の作戦手順通り、大型ボートか中型船程度である火船を警戒して艦隊の前方に鎖を張り巡らしたのですが、ドレークが送り込んだ火船は大型船で鎖などものともせずスペイン艦隊に突っ込み、たまたま炎上する船のために碇を切って編成を乱して港外に逃げ出した敵艦船をイギリス艦隊は各個撃破で集中射撃しています。

スペイン側は水兵の倍の人数の陸兵を載せていましたが、イギリス側は接近戦を避けて砲撃で対抗します。ギリシャ・ローマ以来有効な戦術であった衝角突撃(強固な舳先を相手艦にぶち当てて破壊する)や接舷斬込戦術が無効化され、砲撃が海戦の主力となった戦闘技術のパラダイムチェンジの瞬間でした。

砲撃でも、スペイン艦は破壊力がある短距離重砲と甲板上の兵士を射撃する砲を備えています。イギリス艦は短距離砲の射程外に止まって威力がやや弱い中距離砲で相手の喫水線を狙って船体を破って浸水・沈没させています。

スペイン艦隊では火船攻撃を避けて全ての碇を失った船が多数発生し、集合することも難しくなりました。67隻と約1万人のスペインへ向った船は無事に帰港できましたが、本隊から分離してイングランドに敵対するカソリック教徒のアイランドに向ったスペイン艦隊の生き残りは、不馴れな海岸線の浅瀬や嵐に遭って難破・沈没して悲惨な結末を迎えています。

司令官シドニア公も「自分は海戦の経験がないので、経験がある他の人物を提督にして欲しい」と国王に懇願していますが、国王は他に家柄・経歴等から彼に代れる人物がいけないとの理由で、彼に無理矢理引き受けさせています。この戦いでも、事前にイギリス情報部 MI 6 の前身が蒐集・分析した情報が大いに威力を発揮した(諜報戦の勝利)といえます。

私は、スペイン無敵艦隊の敗因は、太平洋戦争のミッドウェイ海戦における日本海軍の敗因と底通する部分が多いのを見て複雑な思いがします。

スペインは帰還した戦士たちに十分な賞与を与えて労苦に報い、艦隊を再建し、5度までイギリス遠征を試みます。対するイギリスでは、ハワード卿が私財を投げ打って乗組員を救済するが及ばず、政府の資金不足のために解隊した救国の戦士たちは無報酬のまま数ヶ月おかれ、一大社会問題になった後日談があります。

まだ、イギリスは貧乏なものでした。

スペインの第2回と第3回イギリス遠征は何れも強烈な嵐に多数の船舶を失って失敗し、第4回は目的変更してオランダ艦隊を攻め、第5回はアイルランド反乱軍応援のため3,000人の陸軍を上陸させたが、イギリス軍に撃破されて全滅し、遂にイギリス懲罰の試みは挫折しました。

英西戦争は膠着状態に入り、結局、エリザベス一世とフェリペ二世没後の1604年にロンドン条約が結ばれて終結しました。その後もスペインの海上覇権は続きますが、その国勢は緩やかに長期的衰退に向かい、今では欧州の片田舎の立場に甘んじています。

逆にイギリスは時間をかけながらも国勢を向上させ、ここからイギリスの止(とど)まることなき海外進出と植民地経営が始まり、20世紀初頭まで継続した「七つの海を制覇する日の没することなき大英帝国」の基礎が築かれました。

海賊船と私掠船の曖昧な境界：強力な武装船は莫大な投資を要します。私掠船は富裕者に出資を募り、略奪で得た利益を配当する一種の投資ファンドを組む事業です。ドレークのように潜在敵国スペインの町や船から略奪した財宝が莫大で、出資者に多額の配当ができた場合は、事業は大成功ということになります。

キャプテン・キッドで知られるウィリアム・キッド(William Kidd : 1645～1701 年)も事業計画を開示して貴族たちから出資を募り、貴族たちが費用の4/5を出資し、残りを自分の持ち船を売却して36門の大砲と70人の船員を擁する強力な武装船を調達して出航します。不運にも彼は、何時まで経ってもよい獲物に巡り会えませんでした。成果を焦(あせ)る部下の突き上げに負けて、彼は出会う船は敵味方の区別なく略奪を開始します。彼は海賊になったのです。結局、彼は捕らえられて絞首刑となり、テムズ河で晒し者にされ、出資した貴族たちは大恥をかきました。彼は死刑執行直前に、隠された財宝の存在を示唆します。彼とこの話を題材にして、エドガー・アラン・ポーは「黄金虫」、スティーブンソンは「宝島」を書いています。

ヘンリー・モーガン(Henry Morgan : 1635～1688 年)はカリブ海で活躍したイギリス海賊ですが、敵方から略奪して大儲けした後に海賊を廃業し、ジャマイカ島代理総統という国家の役職に就き、海賊を取り締まる側に廻りました。「勝てば官軍、負ければ賊軍」といった結果だけを問われる厳しい実力社会でした。

(この項は Wikipedia「海賊」等を参照した)

9 ルネッサンスとイタリア（14世紀半ば～16世紀末）

9・1 ルネッサンス時代の各国の情勢

ルネッサンス Renaissance(再生)が興った当時の中世ヨーロッパの社会情勢は次のようでした。

- (1) それまで均一であった農民に貧富の格差が現れ、**富農層が広く一般的に出現**しました。
- (2) 商人と手工業者の社会が発達し、その集団居住地である**都市が生まれ**、領主の支配から離れて行政、司法、外交、軍事の自由を持つ**独立した社会**を作り、もはや無視できない大きな勢力となりました。
- (3) 都市と結び付き、その力によって領主層を押さえつけ、**強力な中央集権国家**を造ろうとする**王権が伸び**てきました。

このような変化は緩慢に生成するもので、国によって事情が異なり、その進展の仕方も、行く先も様々です。

イタリア：ルネッサンス活動の中心地となったイタリアでは、**都市の力が圧倒的に強くなって**、都市自身が小国家を作りだし、ドングリの背比べとなり、統一王権が成長できませんでした。このため、初期の段階では、都市とそこに住む人たちは人間の可能性の限界に挑むような目覚ましい業績を挙げますが、終盤では絶対王権を確立して国力の集中力が高まった周辺の国家の圧力に屈することになります。

イギリス：この国では王権が強く、都市の力は弱く、早くから**王権による国家統一が進行**し、領主、騎士階級は宮廷での廷臣化が進みます。富農や市民が力をつけ、有力者たちは国王が主宰する議会の議員として発言力を強め、ピューリタン革命と名誉革命を通じて現在の立憲君主制を完成させます。

フランス：ここでは**王権がうまく都市の勢力と連合して国家の統一が進み**ました。ルイ十四世で絶対君主制の最盛期を迎え、フランス革命により民衆が王室を倒します。その後、ナポレオン皇帝の時代を経て今日の民主主義政体に進展しました。

ドイツ：都市の力が比較的強かったのと、王権が神聖ローマ帝国再建の夢を捨てきれずに無駄な努力を繰り返して勢力を消耗していったのとで、300 数十の**大小の中央集権国家群に分裂**してしまいます。このため、国家の統一が遅れ、その焦りから周辺国と摩擦が絶えません。

9・2 都市国家群イタリア

右の地図は 14 世紀半ばのイタリア中北部の都市国家勢力図です。この地図には 10 の小国家群が見えます。図中、共和国が自治都市国家、王国・公国は王侯が支配する国家です。ローマ法王は法王領を支配します。

これらの小国が相競ってルネッサンス文化は活性化され、学術、芸術が大いに盛んになり、数多くの大聖堂も作られます。ヴェネチア、ミラノ、フィレンツェ、ナポリが四強です。各国は互いに合従連衡(がっしょうれんこう)して小競り合いを繰り返します。それがこの時代の活力の源になったのでしょう。都市国家群であった古代ギリシャと事情を同じくします。

只、都市国家という規模では隣の大国から攻められれば、各個撃破されてひとたまりもありません。それが現実 16 世紀以後に起こります。攻め込んだのはフランス、スペイン、オーストリアでした。



(「世界の歴史7／近代への序曲」p7)

それ以後のイタリアは万年二流国家で、世界の強国として認められることがありませんでした。都市国家も個人の能力発揮には有効ですが、国家としての総合力発揮には問題があります。結局、イタリアの都市国家群というビジネスモデルが有効だったのは、12世紀から16世紀に限られています。しかし、当時のイタリアの創造性や芸術性は文明史上に燦然たる存在であり、長かった西欧の暗黒時代を終わらせ、今日のグローバル文明である西欧文明の先駆け・牽引役となった偉大な役割を決して忘れてはなりません。以下にイタリアの都市国家群から、代表的な国家のプロファイルを紹介しましょう。

9・3 芸術の華咲くフィレンツェ共和国

国名 Firenze は「花の都」の意です。その名の通り、ルネッサンスの華を見事に咲かせ、今日に伝えます。ルネッサンス時代に「神曲」の文豪ダンテ、彫刻家ミケランジェロ、「モナリザ」の万能天才レオナルド・ダ・ビンチ、「君主論」のマキャヴェッリ等の知の巨人たちをこの地から輩出した偉大な都市です。

12世紀に自治都市となり、14世紀には都市人口は14万人、共和国全体で約100万人の規模の国家です。

この都市は薬屋から銀行家になり、途方もない財を築いたメディチ家によって独裁的に支配されました。

コジモ・デ・メディチ(1389～1464年)はこの都市の税金の約65%を負担したといっています。彼は政敵との対立を避け、選挙制度を利用して政治を支配し、学術・芸術を振興しました。多くの芸術家を庇護し、プラトン研究のアカデミーや公共図書館を設立するなどし、没後「祖国の祖」との称号を贈られました。

コジモに天才教育された孫のロレンツォ・ド・メディチ(1449～1492年)の時代には、ルネッサンスの最盛期を迎えます。優れた政治家にして芸術家の良きパトロンで、この都市の隆盛に大いに貢献しました。

彼は優れた政治家で、イタリア各国の利害を調整する上で大きな影響力を振るいました。また、学術・芸術のパトロンで、若き日のミケランジェロに彫刻の才能を見出し、自宅に住まわせて面倒を見ています。一般市民には気前よく振る舞い、絶大な支持を得ました。

彼はイタリア統一という大きな目標を持っていましたが、惜しくも43歳で亡くなりました。上の写真(私の撮影)はウフツィー美術館から望んだポンテ・ベッキオ(“古い橋”の意)です。この橋の最上階部分は、メディチ家より出た初代トスカーナ大公コジモ一世がアルノ川の左岸のビッティ宮殿から右岸の執務事務所(現ウフツィー(オフィスのイタリア語)美術館)まで約1kmを、外部の人混みを通らずに通える専用通路として作らせたヴァザーリの回廊で、1565年竣工です。



アルノ川に掛かるポンテ・ベッキオ

……世界の歴史には、ある時期ある地域に「天才」がかたまって現れることが多い。例えば、15世紀末から16世紀にかけてのルネッサンス期、イタリア半島中央部に美術の天才が群生した。イタリア人が美的創造力が高いとしても、ラファエロ、ダヴィンチ、ミケランジェロ等が出たこの時期ほど凄いことは他にない。……ある時期に有才の士が多く生まれ、他の時期にはそれが生まれないと、生物学的にも考え難い。要は時代の流れや世の中の雰囲気、つまり社会の主流勢力の発想と受け入れ体制によっ

て、個人的な人材が発掘されることもあれば、埋め込まれることもあるのだ。……

(「名君の許に賢臣あり」 堺屋太一／日本経済新聞 2007/9/9)

9・4 海洋国家ヴェネチア共和国

英語読みベニスの名でも知られます。建国の祖たちは5世紀の民族大移動のあおりを受けて、陸地から逃避してアドリア海の干潟に移住し、松のパイルを無数に打ち込んだ上に石板を敷いて人工地盤を作り、その上にこの都市を築きました。177の島、150の運河、400に及ぶ橋よりなる水上都市です。

小国ヴェネチアを大きな存在とした経済力の根源は、東方の香料等の高価な商材を地中海東岸から海を渡って西欧に届けるための地中海貿易の好適な地理的位置を占めていたことにあります。ヴェネチアは海運力とそれを護衛する海軍力を磨き上げ、11世紀に勢力を拡大し、12世紀にはアドリア海の重要勢力となり、13世紀末以降の約200年間に亘って、当時の地中海世界の並ぶ者なき強国となったのです。

その海軍は地中海最強、海運業と商人は地中海貿易の支配者となり、ヴェネチアは歴史上で最小の面積と最小の人口を持つ大国だったのです。

ヴェネチアは西欧文明の大事な要素を多数創出しています。近代的な事業形態であるパートナーシップ、

有限会社(Company Limited)、常設外交使節、それまでは板に描いていた油絵を帆布(キャンバス)上に描くようにした絵画技法の改革、印刷の商業化、演劇やオペラ劇場の商業化等です。

海洋国ヴェネチアは外板で船体を作ってから竜骨と肋骨を置くそれまでの造船法を、竜骨と肋骨を組み立ててから外板を取り付ける近代的造船法へと技術革新し、熟練者でなくても船舶の建造を可能としました。海外貿易による巨大な経済力を背景に、国営造船所では戦時の最盛期には二日で1艘の軍船を進水しました。有力者は挙(こぞ)って軍艦や商船の指揮官となった海洋国家です。地中海の制海権を争って15世紀以後、オスマン帝国と7回にわたって戦役をもった元気な都市で、中でも1571年のレパントの海戦が有名です。長年にわたり、サラセン人が全地中海の制海権を占めていたのが、これ以後はアドリア海から西の地中海の制海権をヨーロッパが取り戻すこととなりました。塩野七生氏の「海の都の物語」にこの海洋国家の最盛期の血湧き肉躍る物語が見られます。

ヴェネチアでは紡績、製紙、印刷、ガラス細工、金属細工、宝石加工等の加工貿易も盛んで都市は繁栄し、人口では1509年に11万5千人であったのが、1575年には18万人強にまで増えています。

しかしながら、遂に地理的優位性が崩れる日が来ました。1499年のスペインによる喜望峰回りのインド洋の航路開拓の影響は直ちに現れ、1502年には地中海を経て西欧へ運ばれる香料貿易は激減しました。

1618年に始まる30年戦争の結果、それまでの上得意だったドイツが約300の小国に分割されて混乱し、人口は激減し、西欧の最も貧しい地域へと転落したのも大きな打撃でした。

16世紀末には地中海にもオランダやイギリスの船舶が多数現れ始め、17世紀後半にはヴェネチアの商船隊はアドリア海や河川を利用した局地的な輸送を行う限定的な存在になります。この頃にはヴェネチアが所有する大型丸型帆船の3/4が外国製になります。

加工貿易も衰退します。織物業は1602年には年産29,000反であったのが、一世紀後には2000反に過ぎません。イギリスが軽くて着易い毛織物で市場に進出した時も、ヴェネチアの商人たちは「イギリスの毛織物は品質では劣るが、価格が安いので売れる」と言い訳しています。ヴェネチアのギルド(職人組合)も布地の



国営造船所付近の運河

製造方法や労働体制について事細かに規制しており、企業家が創意工夫して新製品を創出することを阻害していました。

かくしてヴェネチアは緩慢な衰退モードに入ります。17世紀始めのイギリス大使は報告書にこう書いています。「ヴェネチア人の生き方は変わった。以前彼らの生きる道は交易であったけれども、今や商業から人々は去り、家や土地を買い、馬車や馬を備え、以前より多くの見世物とか劇場とか、そういうことで快適な生活を楽しんでいる。また、嘗ては自分の子息をレバントに送り、航海と貿易に馴れさせたけれども、今ではヨーロッパの海外旅行に送って、商人よりも紳士になるように勉強させている」。

海から陸へ、勤勉から奢侈へ、企業家から利子生活者へ、との生活スタイルの変化が起こっているのです。冒険を避けて過去の蓄積によって生活を享受しようとする消極的な生活態度は、ヴェネチアの貴族の男子で結婚しない人が17世紀には60%へと増えたことにも現れています。収縮経済の中で、生活水準を落としたいくないというライフスタイルが主流になったのです。同じ独身男子現象が、末期のローマ帝国でも、中世のイスラーム文化都市でも、現代の日本でも起こっていることに注目してください。

15世紀末から約一世紀半に亘って、ヴェネチアは文化の面で顕著な発達をしてルネッサンス文化の中心的存在となり、それが失った政治・経済での優越を補って、ヴェネチアを光輝ある存在としました。最大の文化的貢献は、ガリレオも教授として在籍したパドヴァ大学でしょう。医学面で特に卓越した功績を挙げています。人体の解剖が許されたこともあり、大胆な実験的精神によって人間の生理の解明に大きな進歩を加えました。経済的衰亡の条件が整えられてからも、一世紀に亘って文化面で人類の進歩に貢献し続けたのは、お見事との賞賛に値するのではありませんか。（ヴェネチアの項は高坂正典「文明が衰亡するとき」を参照）

9・5 陰謀渦巻く法王領

カソリックの総本山ヴァチカン法王庁を経営するための法王直轄領です。権謀術策の限りを尽くしてローマ法王の座についたアレキサンデル六世（在位1492～1503年）の庶子チェーザレ・ボルジア（チェーザレはシーザーの意）は、分裂状態のイタリアの僭主（せんしゅ）たちを軍を率いて征伐し、法王領を回復します。冷酷な政治家で、多くの政敵を手段を問わず殺害するのをためらわなかったといえます。その政治的・軍事的才能はマキャヴェッリによって高く評価されています。塩野七生氏の「チェーザレ・ボルジアあるいは優雅なる冷酷」に彼の物語が見られます。



聖ペテロ大寺院の正面の列柱広場

右上の写真（私の撮影）から法王庁とそれに連なる聖ペテロ大寺院の規模と世俗的権威の大きさが理解できるでしょう。政教分離の近代国家の原理の中にもありながらも、法王庁は今なおヴァチカン公国という形態で、イタリアの首都ローマの中に独立国としての存在を守り続けています。

9・6 宗教改革（16世紀前半）

アレキサンデル六世の時代に法王庁は贖宥状を乱発して教会財政の金集めに奔走しますが、法王庁やそれに連なる諸教会の放埒（ほうらつ）と拝金主義にキリスト教の墮落を見たルターにより1517年に「聖書に還れ！」をその精神とするプロテスタント派（「抗議」の意）が、また、1536年に「救済の予定説」を信奉するカルヴァンにより礼拝様式と教会制度の改革を重視するカルヴァン派が興ります。

この宗教改革で、以後、カソリック（“普遍”の意）を旧教、プロテスタント派とカルヴァン派を新教とするヨーロッパの宗教的色分けが生じ、両者は血を血で洗う激しい宗教戦争を各地で繰り広げます。

ドイツが約 300 の弱小国家群に分解された 30 年戦争はその最大規模のものでした。

これらの宗教戦争の経験から、西欧の人たちは、「宗教こそは最も扇動的に相手に敵というレッテルを貼り付け、非寛容に容赦なく敵を抹殺する装置」であるとの共通認識を得、以後の近代国家は政治と宗教を厳密に分離することになりました。（詳しくは「宗教…キリスト教」参照）

10. 絶対王制の確立（16～17世紀）から革命へ

10・1 イギリスの王権と議会制度の発達

イギリスの王系：アルフレッド大王(在位 849～899 年)はヴァイキングの侵略を阻止し、国家としてのイギリスの基礎となる諸制度を整え、アングロサクソン王朝の最盛期を迎えます。

この王朝のエドワード懺悔王が亡くなった 1066 年、フランスのノルマンディー侯ウイリアムが王位相続権を主張してイギリスに侵攻・征服し、ノルマン王朝を開きます。彼は全国的検地を行い、土地の所有者、産物と額、家畜、犁の数、価格等を調査して 1086 年頃、イングランド土地台帳 **Domes-day Book** を作成しました。これは大方の王権が、臣下の財産の調査については細かく追求すべきでないと鷹揚に構えていた時代において、極めて先進的な政策です。このようにしてウイリアム征服王の王権はいたるところに浸透し、中世イギリスの強固な統一が生まれ、王権に直属した都市や下級貴族が他国に先んじて「王の会議」に列席するようになり、イギリス独特の議会政治が誕生します。こうしてノルマンディー領を持つフランス王の家臣がイギリスを支配するという結果を生み、家臣が王より強大になる捻れ現象が起きたのです。

大憲章 Magna Carta：この捻れを解消するためにフランス王フィリップ二世は機会を捉え、イギリス王ジョンの知行を取り上げます。ジョン王の失政や重税を恨んでいた貴族たちはジョン王の従軍要請を拒み、王はやむなく傭兵を集めて戦い、負けて帰国し、国内挙げての反抗に遭い、1215 年に貴族たちと会見して大憲章を飲まされます。「第 1 条：教会は国王から自由」「第 12 条：王の決定だけでは戦争協力金などの名目で税金を集めることができない」等の条項を持ち、イギリスの君主が臣下の要求に屈した最初のケースです。この後、1337～1453 年の 116 年間にわたってフランス王国とイングランド王国の間で戦われた 100 年戦争で両者の国境が現在の位置に確定され、フランス国民とイギリス国民という国家体系と帰属意識が形成されました。歴史の「もし」で、この時にイギリスが勝っていたらどうなったでしょう。それまでのイングランド国王は殆どの期間をフランスの経営に当て、イギリスはその軍事行動の経済的資源を供給するためのドル箱の役割を果たしていました。恐らくはフランスが宗主国になり、イギリスは筆られるだけの属国になっていたろうといわれます。この戦いの終盤でフランス軍を起死回生に導いたオルレアン乙女ジャンヌ・ダルク **Jeanne d'Arc**(1412～1431 年)の大活躍があります。

ジェントリーの存在：ジェントリー(郷紳 **Gentry**)は下級地主層の総称で、男爵の下に位し、貴族には含まれません。イギリスの貴族は、フランスのノルマンディー侯ウイリアム(征服王)に付き従って来て、イングランドの各地に封ぜられたノルマン人を起源に持ちますが、ジェントリーたちはそれ以前からイギリスにいた地元の領主や有力者たちです。14～15 世紀には、ジェントリーたちは有力貴族の家臣となることが多かったのですが、国王継承権を巡って血族であるランカスター家とヨーク家の間で争った薔薇戦争(1455～1485 年)は両派の消耗戦となり、これを境に貴族の勢力が弱まると、その庇護を離れて独立した存在となります。16 世紀には領主から地主へと性格が転化しますが、率先して戦場へ向かい、或いは無給の治安判事等を勤めるなどノーブレス・オブリージュ **Noblesse oblige** (仏語：高貴な者の義務)精神を発揮して社会的に一定の尊敬を受けるジェントルマン階級を形成します。16 世紀には中間階級の勃興があり、ビジネスに成功した彼らはヘンリー六世(在位 1509～1547 年)の宗教改革により解散させられたカソリック修道院の土地を合法的に取得し、ジェントルマンの仲間入りをします。成功した人間を体制の反対勢力に追いやることなく、ジェントルマンとして体制の中に取り込む道筋は定着し、イギリスは社会の流動化・活性化を維持しながら、政治の安定化に貢献するシステムを作ることになりました。

ピューリタン革命：テューダー朝最後のエリザベス一世(在位 1558～1603 年)は絶対君主としてイギリスに最も華やかで盛んな時代をもたらしました。女王はジェントルマンや貿易商人たちを国民の中核として育てることに務め、彼らも女王の政策を支持し、彼らの代表が作っている議会と女王との関係も極めて協調的で

した。ジェームズ一世(在位 1603～1625 年)がスコットランドから乗り込んできた時、彼は故国にはない議会の性質が理解できないでいます。王は王権神授説を唱え、議会側は法が王権に優先すると唱え、議会は両者の正面衝突の場となります。彼の子、チャールズ一世の治世になると両者の反目は一層激しくなり、王はイギリス国教会を王権維持の支柱とし、ピューリタン(清教徒:新教の一派)に対して残忍な弾圧を加えます。議会は王党派と議会派に色分けされました。王党派はイギリス国教会に属し、貴族、保守的なジェントルマン、その配下の農民などであり、議会派にはピューリタンが多く、大商人、これと関係深い貴族やジェントルマン、自由農民、中産の商工業者でした。遂に不満は爆発点に達し、1642 年、両派は内乱に突入します。クロンウェルが指揮する議会軍が最終的に勝ち、1649 年 1 月、チャールズ一世は斬首されます。向かうところ敵なしの勢いあるクロンウェルに対して、彼を王位につけようとする動きがありましたが、彼はそれを断固退けます。同年 3 月、議会は「王という職は不必要であり、負担の多いものであり、人民の自由、安全及び公けの利益に有害である」として君主制を廃止しました。

名誉革命： クロンウェルの軍事独裁による「革命の行き過ぎ」是正の大乱の後、チャールズ二世がフランスから帰国します。王は大赦と信仰の自由と土地購入の確認とを約束して、絶対君主としてではなく、議会と協力して政治を行う方針を示し、人民に安心感を与えます。1660 年、議会在王の復位を決定し、王はロンドンに帰ってきます。実際にはこの後、約束に背いて若干の処刑とピューリタンへの弾圧が行われます。彼の後を嗣いだカトリック教徒のジェームズ二世はイギリス国教会とも衝突し、事実上の全ての支持基盤を失って、1688 年、自らフランスへ亡命する結末となります。議会はオランダの総督であるオランニエ家に嫁いでいたメアリーと、その夫・ウィリアムを共同統治者として迎え、「権利宣言」を提出して、これを両者に承認させました。1689 年には「臣民の権利及び自由を宣言し、王位継承を定める法律」いわゆる「権利章典」として議会から発布されました。

この無血革命を名誉革命と呼びます。権利章典によってイギリス王は、議会の同意に基づいてのみ統治することとなりました。この 309 年前の名誉革命でイギリスの現在の**立憲君主制**が成立したのです。

10・2 アメリカの独立

始めからの多国籍国家： ヴァージニアとカロライナにはイギリス人が、ルイジアナ(国王ルイの名に因む)にはフランス人が、ニューヨークやニュージャージーにはオランダ人が、デラウェアにはスウェーデン人が、フロリダにはスペイン人が、それぞれ思い思いに植民地を開拓します。初期の主な移民はカソリックですが、ヨーロッパに宗教戦争が起こると、1620 年のピューリタン(清教徒)のメイフラワー号による移民を嚆矢(こうし)として、新天地を求めた新教徒が続々と入植し、やがて主勢力となります。北米の社会的支配勢力を指す WASP とは White-Anglo-Saxon-Puritan(白人でアングロサクソン族で清教徒)を意味します。

1700～1763 年にわたり北米の支配権がイギリス、フランス、スペインの間で争われ、イギリスが勝利して北米の東海岸全域を手中に収め、大英帝国の礎(いしずえ)を固めます。西へ進んだイギリスは 13 州の植民地(米国旗の 13 本のストライプに相当)を建設します。

独立戦争： 18 世紀に入ると、寒冷で農業には向いていなかった北東部で造船、醸造、運輸などの産業が盛んになり、イギリス本土の産業と競合状態になります。イギリスは各種の法律により工業の発展を妨げ、更に重税を課した段階で住民の怒りは爆発、1773 年、インディアンに扮した住民たちがイギリス船の紅茶を海中に投棄するボストン茶会事件が起こります。イギリスはボストン港を閉鎖、強硬な対応をしました。

ここに 13 州の住民代表がフィラデルフィアに集まって大陸会議を開催し、植民地の自治権を求めて 1775 年、アメリカ独立戦争が勃発します。第二次大陸会議でジョージ・ワシントンが総司令官に選ばれ、大規模な陸軍が編成され、1776 年にトーマス・ジェファークソンが起草した格調高いプロテスタント的思想に基づく

近代民主主義の原点となった**アメリカ独立宣言**が採択・宣言されます。

各国から軍需物資供給や義勇軍派遣などの支援を受けたアメリカ陸軍は戦いに勝利を収め、1783年にイギリスとパリ条約を結んで、独立を果たします。フランスからは当時 20 歳のラファイエット侯爵(フランス革命で再登場する)が義勇軍を組織し、私財で船を買って渡航して戦線に加わります。彼は陸軍少将に任命され、赫々(かっかく)たる武勲を挙げ、ジョージ・ワシントンに次ぐ有名人になります。

フランスは以前イギリスに負けた仕返しにアメリカ軍を支援したのですが、この時の財政的負担(国家歳入約 4 年分相当)による経済的疲弊が、結局はフランス革命が発生する大きな原因になりました。

10・3 フランスの絶対王権の成立と革命

宗教戦争の季節：宗教改革の結果、キリスト教にはお互いに相容れない三つの宗派ができたのですが、中世では領主が自分の信仰を領民にも強制するのが当たり前でしたので、各地でそれを不満とする反乱が発生し、これに権力闘争が複雑に絡んで、深刻な宗教戦争が起こりました。

主なものを挙げると、次の五つになります。

- ①カッペル戦争(1529～1531 年)： スイス／カソリックが勝つ、
 - ②シュマルカルデン戦争(1531～1555 年)： ドイツ／プロテスタントが勝つ、
 - ③ユグノー戦争(1562～1598 年)： フランス／カソリックとプロテスタントが和解する、
 - ④オランダ独立戦争(1568～1648 年)： プロテスタントのオランダとカソリックのスペインが戦い、オランダが勝って完全独立を果たす、
 - ⑤30 年戦争(1618～1648 年)： 列強各国が参加「最後の宗教戦争にして最初の国際戦争」と呼ばれます。
- この宗教戦争で深刻なダメージを受けたヨーロッパ各国は、宗教が持つ不寛容な面を露骨に出せば共倒れになるとの教訓を共同体得し、お互いの宗教の存在を許容し合う「信仰の自由」を認め合うようになります。また、政治と宗教を截然と分離するようになったのもこの時代からの教訓でした。

ブルボン王朝の創設：ユグノー戦争はフランス宗教戦争とも呼ばれ、8 回の戦争からなっています。この内第 8 次の三アンリ(三人の Henri)の戦い(1585～1589 年)で、カソリック教徒であったアンリ三世は、暗殺に倒れる病床で、王位継承者にして新教徒であるブルボン家のアンリに「貴方が宗旨変えを決意されないと、事態は難しいでしょう。思い切って改宗してください。」といい遣します。1589 年、ブルボン家のアンリ(在位 1589～1610 年)はカソリック教国における新教の王に即位します。フランス王国の 6 分の 5 がカソリックで、アンリ四世は孤立します。1593 年、彼はカソリックに改宗し、大部分のカソリック信徒はこれを歓迎し、パリはやっと王に対して門を開きました。残存する反対勢力に対して、王は軍事力、買収、その他の手段を尽くして懐柔に努め、フランス全土が王に帰順しました。1598 年、彼は**ナント勅令**を發布して新教徒に信仰の自由、公職就任権、安全の保証を許し、敵視する新教徒に一種の休戦を受諾させました。

宗教内乱で荒廃していたフランスを王はシュリー公の力を借りて、財政の整備、税制の改革、商工業・農業の保護育成、土木工事、貿易促進等で国土の復興を実現させます。養蚕、絹織物業、ゴブラン織り等が発達し、カナダのケベックの建設もこの時期の業績です。彼(47 歳)はイタリアのメディチ家から王妃マリー(20 歳)を迎え、1601 年、後のルイ 13 世が生まれます。実態は財政難に対処するための政略的な結婚であったようです。マリーはイタリアから、洗練されたスプーン、ナイフ、フォーク等を持参して、それまで手で肉を取って食べていたフランス人の間に洋食器と食事の作法を普及させました。

アンリ四世は狂信的なカソリック教徒に暗殺され、9 歳で即位したルイ 13 世(在位 1610～1643 年)は母后マリーが摂政となり、イタリアから連れてきた寵臣が政治を恣(ほしいまま)にするのを 1617 年に宮廷革命で支配権を回復します。王の絶対的信任を得た宰相リシュリー卿は王権の強化に粉骨砕身して貴族たちの陰謀を粉碎し、フランスを脅かす神聖ローマ帝国のハプスブルグ家を痛めつけるために 30 年戦争に荷担します。

太陽王ルイ 14 世登場： ルイ 13 世の子、ルイ 14 世(在位 1643～1715 年)こそ、絶対王政の絶頂期を作った人物です。彼は 5 歳にして即位し、母后アンヌが摂政となりますが、良き宰相マザランの執政で 1649 年の高等法院のフロンドの乱、翌年の貴族のフロンドの乱等の数々の危難を切り抜けます。彼は二度とこんな目に遭わないように王権の尊厳を維持し、王権への如何なる反抗も許さない絶対君主たらんと決意します。1661 年、マザランが死んだ時、22 歳のルイ 14 世は、宰相を置かず、自ら親政を取ります。彼の治世はフランス絶対王政の最盛期に当たり、新教徒も貴族も政治的な力を失い、貴族は年金を得て宮廷に寄生する無力な存在となります。地方にいる貴族たちも王権に依存して、自分たちの社会的特権を守ることに汲々とする始末です。パリ高等法院も沈黙を守り、ハプスブルグ家も勢威を失い、何処にも王権に反抗する者はおらず、王は宰相を置かず、自ら政務に当たりました。彼が言ったのではありませんが、「朕は国家なり L'Etat, c'est moi」はこの時代をよく言い表しています。1661 年、有能な仕事人間コベールが財務総監の地位に着きますが、彼は諸国との「富の戦争」においてフランスの優位を築くために国家権力によって経済全般に**重商主義**と呼ばれる保護育成政策を行い、大きな成果を挙げます。

富国強兵を達成した王は 1667 年のネーデルランド戦争を始め、オランダ戦争、ファルツ戦争、スペイン継承戦争と多分に侵略的な戦争をやり、結果としてヨーロッパ諸国の連合勢力を敵に回すことになります。コルベールが築き上げた国富もこうした戦争や宮廷生活の浪費で空しくなります。1685 年にはナント勅令を廃止して新教徒、**ルイ 14 世の肖像画** (Wikipedia) たちはあらゆる公職に就けなくなり、30 万人に及ぶ新教徒が他国に亡命し、中に優秀な産業家手工業者、科学者を多数含みました。貧農の生活は政府の苛斂誅求(かれんちゅうきゅう)により耐え難く低下し、絶望からの農民反乱は数えきれません。1715 年、77 歳の老王の衰弱死に対して、国民は「待望久しかった解放を神に感謝し」、王の葬列が通過するパリの街頭では、人々は踊り、歌い、口汚くののしっていたといえます。



フランス王政の落日： 老王の後を曾孫のルイ 15 世(在位 1715～1774 年)が嗣ぎますが、彼は破綻した財政を気にも留めず、狩りに明け暮れた無為・怠惰な国王でした。7 年戦争(1756～1763 年)でイギリスと海外植民地を争ってアメリカ大陸の権益を失い、フランスの衰退に拍車をかけます。多くの誠実で有能な閣僚が抜本的な財政の建て直しに努力しますが、既得権益を持つ貴族たちに抵抗されてことごとく失脚し、「次の代の国王がどのような人物であっても建て直しは不可能であろう」といわれるまで財政事情が悪化しました。彼がいったのではないが、「我が後に洪水よ来たれ **Apres nous le Deluge**」は時代の気分をよく表しています。

狩猟と錠前いじりに情熱を傾けたルイ 16 世(在位 1774～1792 年)は優柔不断で「最も王らしからぬ王」ともいわれます。オーストリア女帝マリア・テレジアの娘マリー・アントワネットは 15 歳で 20 歳のこの王のもとに嫁してきます。美貌の彼女は、忽ち宮廷の浮華軽佻の風に染まってしまいます。民衆は彼女の放埒・贅沢が国家財政悪化の原因と見なし、彼女は冤罪である首飾り事件も彼女の所為にされ、王政に対する尊敬の念はこの事件を境に失われたといえます。彼女はフランス王政の諸悪の根源視され、スケープゴートにされたのです。

フランスに興った啓蒙主義： 18 世紀は「光明の世紀」と呼ばれます。中世の人々を支配した神を中心に置いた世界観が、多くの思想家によってニュートン等に代表される近代科学・技術の着実な進歩を考えに取り

込んで、人間を中心に置いた世界観を持つ近代的ヒューマニズムによって否定される時代です。18 世紀のフランスはヨーロッパ諸国の中でも最も社会的矛盾が激しい国であり、それは最早旧来の思想では処理できない限界に達しています。フランスの社会が矛盾を解決する新しい思想を求め、フランス国内の最優秀の人々がこの課題に応えようとして**啓蒙思想**が誕生しました。

社会科学者の先駆モンテスキュー(1698～1755 年)は「人間は物的な存在としては、他の物体と同じく、不変の法則によって支配される。」「歴史は王や神とは無関係に、自律的に運行する。」といい、「**三権分立**」、即ち、立法・行政・司法は同一人、同一官職が持つべきでないと述べました。この原則は、その後の世界の民主主義国家の根本理念として普遍化します。日本の政体も三権分立の原則に従って構築されています。

民主主義者ルソー(1712～1778 年)は「全ての悪徳は人間に属するというより、悪い政治の下での人間に属する」といい、1755 年「人間不平等起源論」、1762 年「社会契約論」を著し、民主主義の礎石を築きます。彼は「人間は自由なものとして生まれた。しかも至る処で鎖に繋がれている。」といい、「人間が作った一切のものは、人間が破壊することができる。」と結論します。

これらの啓蒙思想は世界の人類を一つのものと見なす普遍性から、忽ちヨーロッパ全土に伝搬して行きます。

フランス革命の勃発と展開： 国家財政の破綻、ブルジョワ階級の勃興、下層階級の極端な生活苦、それに自由平等の思想の普及、イギリス国家に対する人民の革命であるアメリカ独立戦争の勝利。いよいよフランス革命の素材が揃いました。しかし、この革命は勃発から安定期に至までに約 10 年間を要する苦難の経過を辿ります。

①**三部会の開催：** フランスの国家財政は破綻の縁に立ち、従来は無税であった貴族階級からも地租税(固定資産税)を徴収(可能なら約 40%の歳入増になった)する承認を得るため、長年開催されていなかった三部会(第一身分：僧侶／第二身分：貴族／第三身分：民衆、の合同議会)を開催しようとします。特権貴族の牙城・高等法院と一揉めあった末、1789 年初に招集状と選挙規則が公表され、選挙人と議員選出(現在も米国大統領選挙はこの方式)のための選挙戦が始まります。

第三身分の文筆家たちは検閲制度を無視して、社会批判のパンフレットを大量に頒布します。シャルトル大聖堂の副司教シェースが書いた「第三身分とは何か」が有名です。選挙が終わった 6 月、第三身分議員団は「国民議会」結成を宣言します。6/23 の国王親臨会議でルイ 16 世は国民議会と、これに合流していた僧侶代表とを威嚇しますが、彼らはこれに抵抗して議場に座り込みます。国王は近衛兵により解散させようとしませんが、ラファイエット侯爵等進歩派の貴族代表たちが剣を手に阻み、国王は武力行使を断念します。そのあと、進歩派の貴族代表も国民議会に参加します。

②**バスチーユ監獄の解放：** 国王は約 3.5 万人の軍隊を動員し、パリ全市の国民議会議員は対抗して市民軍の動員計画を進めます。1789/7/13、約 8,000 人の市民軍は廃兵院を襲い、32,000 丁の小銃と 20 門の大砲を奪います。更に火薬を入手すべく、監獄として使われていたバスチーユ要塞を襲撃し、7/14、陥落させ、7 人の囚人を解放します。

この日がフランスの「**革命記念日 Quatorze Juillet**(“7 月 14 日”の意)」となりました。議員団はラファイエットを国民衛兵の司令官に任命します。彼はパリ市の色・赤と青の間にブルボン王朝の色である白を挟んだ**三色旗**を国民衛兵の帽章として選びます。これがフランスの国旗になりました。反動貴族たちは続々と亡命を開始しました。7/17、意を決した国王はパリ市を訪問し、市庁舎にてこれらの出来事を追認し、民衆と和解します。

革命は地方に波及し、国王が任命した知事は廃止、市政と軍事権は常設委員会が掌握します。自治権を回復した自由な諸都市は、全国的規模で連盟を結成します。農村では領主の城館が襲撃され、農民を縛っていた証文・契約文書類が焼き捨てられ、領主は監禁・暴行・殺害などの被害に遭います。

③**人権宣言**： 1789/8/26 に国民議会でラファイエットが起草した「人権宣言」が可決されます。「第一条：権利の平等」「第二条：自由、所有権、安全、圧政への抵抗が、消滅することがない自然権として規定」「第三条：主権在民の原理」等の 17 条から成ります。ところがルイ 16 世は国民議会が決定した封建制度廃止の法令にも「人権宣言」にも裁可を与えません。10 月始めには王権強化のためフランドル連隊千人を呼び寄せました。

④**ヴェルサイユ大行進**： 1789/10/5 早朝に市庁舎前に数千人の女性が集まり、折から降り出した雨の中を 6 時間掛けてヴェルサイユまで行進します。まず議場に押しかけ、食糧の暴騰とフランドル連隊の暴行を訴えます。ルイ 16 世は狩りに出ていて、女たちは 4 時間待たされます。国王の食糧提供の約束で彼女らは少し穏やかになりましたが、明け方に衛兵の発砲で暴動状態となり、結局、国王と王妃は群集によりパリ市に連行されます。国王たちはチュイルリー宮殿に入り、国民会議の議場も王立馬匹調教場に移されます。これをヴェルサイユ大行進事件と呼びます。

この暴動事件は革命の行き過ぎであるとして、ブルジョワ的な革命指導者(ジロンド派等)の心胆を寒からしめます。ラファイエット(当時 32 歳)もこの時点から王政擁護へと転向します。彼らは 10/14、「暴徒鎮圧法」を上程します。

⑤**国王逃亡事件**： 1791/6/20 の夜中に国王一家の逃亡事件が起こります。事の緊急性・重大性に対する国王の考え方の甘さと、支援者との連絡の齟齬とで、彼らの逃亡は露見し、彼らが乗った馬車は国民衛兵に取り囲まれてパリに連れ戻されます。この報せが伝わると、パリの民衆は怒って国王の肖像を壊し、看板・標識から国王の文字を消し去り、国王関係の町名を変更して、国王の即時退位と共和制を求める叫びが挙がります。しかし、この時点では、国民議会の議員には共和制を要求する者はいませんでした。

⑥**シャン・ド・マルス事件**： 1791/7/17、急進派の民衆はシャン・ド・マルスの「祖国の祭壇」の上で、共和制要求の請願書に署名するために集会を持ちます。議会は集会の解散を命じ、ラファイエット率いる国民衛兵は成り行きから、壇上にいた民衆に射撃を浴びせ、死者 50 数人、逮捕者数百人が出ます。弾圧は強まり、共和的な新聞は発禁となり、共和系民衆の溜まり場コルドリエ・クラブは閉鎖され、民衆系の指導者ダントン、マラー、ロベスピエール等は身の危険を感じ、一時、姿を隠します。

⑦**8 月 10 日の革命**： 1792 年 1 月、議会は周辺諸国に革命の輸出をすべく、殆ど満場一致でオーストリア等に対し、宣戦布告をします。貴族系の将軍たちは、わざと連戦連敗とし、この機にクーデタを起こして王政復古すべく策動します。

これを察した議会は 6/8、パリ郊外に 2 万人の連盟兵(国民衛兵)を駐留させるべく、各地の連盟に招集をかけます。時、あたかも 7/14 の連盟祭(後の革命記念日)を控え、その行事参加を兼ねています。各地から集まってきた連盟兵はシャン・ド・マルスに宿営します。最も過激といわれたマルセーユ連盟兵はリール工兵大尉が作曲した「行け、祖国の子らよ。栄光の時は来た… (**Allons enfants de la Patrie, Le jour de gloire est arrivé !** …)」で始まるラ・マルセイーズ(現在のフランス国歌)を高唱しながら行進して来ました。ジャコバン・クラブ(モンターニュ派の本拠)はパリの区会と、集まってきた連盟兵たちに猛烈に働きかけます。ロベスピエールは「市民諸君！諸君はただのお祭りのためにパリにやってきたのか？」と呼びかけます。「祖国防衛の任を怠り、議会に不当な干渉を加えるラファイエットを罷免すべし！」「無能で腐敗した議会は解散し、普通選挙によって国民公会が招集され、憲法改正を行うべきだ！」と。

8/8、議会在ラファイエットの罷免案を否決した段階で指導部は蜂起を決意し、警鐘が鳴り響き、パリ各区は「蜂起のコミュン(自治体)」を立ち上げます。8/10 早朝、「拒否権氏(国王)を打倒せよ！」と叫んだデモ隊に続くマルセーユ連盟兵がチュイルリー宮殿に雪崩れ込み、スイス傭兵約 600 人、民衆側 476 人の

死傷者を出して民衆の勝利に終わり、日和見の議会も国王の権利停止を宣言し、813 年間続いたブルボン王家はここに滅亡しました。ラファイエットはオーストリアに亡命し、彼の地で戦争捕虜となります。当時は無名の砲兵士官であったナポレオンは宮殿の守備に就いており、この戦闘を詳細に観察しており、後に「この時に砲兵を活用すれば、国王軍は勝てた筈だ。」と述べています。彼も戦闘後は捕らわれましたが、才能を惜しまれ、数日間で釈放されました。

- ⑧**ヴァルミーの勝利**： 1892/8/16、プロシヤ軍は国境を突破、「国王夫妻に危害を加えたらパリを殲滅する」と脅迫し、これを聞いた民衆は憤激します。民衆の力を結集し得ないジロンド派の指導者たちはパリを放棄して政府を地方に移そうとします。だが、パリのコミューンは首都死守を主張し、武器を調達し、防衛工事を行い、兵士を募集します。「武器を取れ！市民諸君、武器を取れ！敵は我々の門前にいる！」と各地のコミューンに檄が飛びます。国境警備大隊が編成され、前線と首都の警備に就きました。1792/9/20、アルゴンヌの丘ヴァルミーで対峙したプロシヤ軍は 3.4 万人、各地から集まったフランス民兵は約 5 万人。悪天候の中で砲撃戦となり、フランス軍の大砲の性能が優れたこともあって、結果は精強を以て鳴るプロシヤ軍の退却で終わります。この勝利は戦術的な勝利ではなく、革命精神の勝利でした。人民の軍隊が歴戦の職業軍人に一步も譲らなかったのです。プロシヤ軍にあつて観戦したゲーテは感激して「この日より世界史の新しい時代が始まる("Von hier und heute geht eine neue Epoche der Weltgeschichte aus, und ihr könnt sagen, ihr seid dabei gewesen.")」と書き記しました。

- ⑨**流血の時代**： パリが手薄になっている隙に反革命分子が蜂起するとデマから 1792/8/30 から始まった家宅捜査で 3 千人の反革命容疑者が投獄され、民衆の手によって数日間で約 1,100 人が殺戮されます。この間に国民公会の選挙が全国的に進められ、公会の議員たちは 9/21 に全員一致で「王政の廃止」「国民議会の廃止」「一にして不可分の共和国」が宣言されました。750 人の公会議員はブルジョワ系のジロンド派と民衆系のモンターニュ(“山”の意)派と、それらの中間的な平原派から成っていました。公会における国王裁判でルイ 16 世は有罪・死刑の判決を受け、1793/1/23、ギロチンで斬首されます。

- ⑩**君主国の反撃**： ヨーロッパの君主国が受けたショックは大きく、各国は第一次対仏同盟を結成しました。この戦争指導で失敗し、経済危機への対応でも失敗し、ジロンド派の無能振りは明白となります。周辺国からの攻撃は待たなしとなり、「革命政府」の骨組みがジロンド派の意図を越えて作られて行きます。「革命裁判所」「監視委員会」「亡命者対策」「軍隊への派遣議員制度」等です。1793/6、遂に両派は激突し、武装した民衆が蜂起してジロンド派を排除します。各地に散ったジロンド派は地方の反乱を煽動し、外国軍はフランスに侵入して来ます。追い込まれた事情の中でモンターニュ派が取った対策は、民主的な憲法の施行を一時棚上げして「独裁」による強力な政府の樹立でした。1793/7/10 の公安委員会の改選で、右翼と見なされたダントンは外され、7/13 にはジロンド派に共感した若い女性によって指導者マラーは暗殺されます。

- ⑪**革命独裁政府**： 1793/8 に公安委員会が結成され、ロベスピエールが最高指導者となります。以後、大臣、将軍、軍隊が大公安委員会の指令下におかれます。革命裁判所は捕らわれていた王妃マリー・アントワネットを 10/16、処刑し、10/31 にジロンド派 22 人を処刑します。公安委員会の 12 人の委員の中に、作戦指導を行ったカルノー、軍需産業を統括したブリュールという職業軍人がいます。カルノーは史上初の国家総動員体制構築に成功し、1794/1 にはフランス軍の規模は 63.5 万人に達し、対する君主国連合軍は約 40 万人です。カルノーは軍隊内の体刑を禁じ、身分的差別を廃して能力主義で昇進させ、世界戦史に残る名将を輩出させました。また、ブリュールは一流の科学者を動員して、兵器の改良、増産に当たらせ、素晴らしい成果を挙げました。かくして反乱を鎮圧し、外敵を駆逐

することができました。

この時期に貴族や寺院の農地が、小作人や農奴の手に渡る本当の意味での**農地解放**が行われました。

⑫分派闘争と恐怖政治：当面の危機が遠ざかると、公安委員会は返って左右の勢力からの激しい攻撃に曝されます。委員会は遂に最後の手段として左翼のエーベル派を逮捕・処刑します。返す刀でブルジョワ派と通じるダントンも処刑されます。かくして独裁はますます強化され、陰謀の嫌疑を受けた者は全国からパリの革命裁判所に回され、陪審員は心証だけで判決し、有罪は即死刑となります。恐怖政治（テロ）です。この恐怖政治の主導権をとったロベスピエールは、弁護士時代には死刑反対論者でした。彼は「平時の政治は徳を以て行えば充分だが、革命のような非常時には徳と恐怖の組合せが必要だ。」と述べ、反対者を抹殺してでも革命達成に必要な政策は実行すべきだとの確信を持ってこの政策を強行しています。だが、この政策は他の人々には明日は我が身との疑心暗鬼を生み、モンターニュ派の反対勢力（テルミドール派）による 1794/7/27 のクーデタとなり、公安委員会と国民公会はロベスピエール（36 歳）とサン・ジユスト（27 歳）に死刑を宣告し、翌日、モンターニュ派の幹部たち 22 人は断頭台の露と消えます。ロベスピエールを没落させた原因は何でしょうか。社会が必然的にブルジョワ的發展を必要とする時期に、それを押し止めて小生産者の社会を永久化しようとする「巨大な錯覚」（カール・マルクス）は破れざるを得ません。その時期を決めるのは革命防衛のために彼らに権力を委ねたブルジョワ勢力であり、これを代表する平原派は、モンターニュ派がその役割を終えたと判断した時から、権力奪還へと動いたのです。

⑬ナポレオンの登場：翌年の 5 月に「パンと 93 年の憲法を！」をスローガンとする民衆の蜂起がありますが、テルミドール派は手際よく鎮圧し、30 人のモンターニュ派が処刑され、各地で白色テロ（右翼によるテロ）が本格化していたところで革命派の首が切られます。これに伴って王党派が息を吹き返し、1795/10/5、王党派は国民公会に武力攻撃を掛けました。公会は先般のクーデタの立役者バラスを司令官に任命して抵抗します。

バラスはツーロン攻囲の際に優秀な才能を見せたナポレオンを思い出し、副官として抜擢します。ナポレオンは議員団に対し「諸君は、国民が同じ国民に対して砲火を浴びせてもよい、という許可を私に与えてくださるでしょうか。」と発砲の許可を求めた上で、40 門の大砲を国民公会周辺に配置し、夕方には実際に躊躇なく砲撃し、暴徒の鎮圧に成功しました。ナポレオンが議場に姿を現すと、満場に賞賛の声が上がりますが、彼は殆ど無頓着といった反応しか表しません。彼はこの成功によって内部軍司令官に任命され、やがて師団長に昇進します。彼はその後、イタリア遠征軍司令官となり、驚異の連戦連勝で短期間にオーストリアの圧政からイタリアを解放し、圧制者から奪った莫大な富をフランスに送ります。

⑭プリュメールのクーデタ：1799/4 の選挙では前年に議会から追い出された左派が活発に選挙運動を行い、反政府の立場から、右翼である王党派からカトリックまでが左翼のジャコバン派を支援し、改選議員 315 人中政府支持者僅か 70 人という惨憺たる結果になります。これまで左派と右派を対立させて均衡を保つことを唯一の政策としてきた総裁政府は、最早、打つ手がありません。シェースが総裁の一人となり、多くの共和主義者たちが各省の大臣になりました。これをプレリヤール（草月：9 月）のクーデタといい、やりたい放題の総裁政府に対する抑圧された議会側の反乱でした。

またしてもクーデタか！人民、ことにブルジョワジーや革命で国有財産を獲得した農民たちはもう飽き飽きしました。左右均衡策が政局の安定を意味するのでないことは誰の目にも明らかになったのです。自分たちの利益を守ってくれるのは、強力な、独裁的な権力しか期待できないのではなからうか、この微妙な心理的变化を読んだのがシェース（彼は革命の幕を開け、革命の幕を閉じた男といわれます）でした。

シェースの意を受けたナポレオンは 1799/11/19、「500 人議会」に無血クーデタをかけ、元老会議は 3 人の臨時統領ナポレオン、シェース、デュコスの指名を可決し、法定定足数ぎりぎりの 100 人の議員により

指名を承認します。首都は臨時統領の任命を熱狂して迎え、地方も概ね静穏に決定を受け止めました。これをブリュメール(霜月:11月)のクーデタといいます。この後、ナポレオンによる独裁、そして帝政の始まりとなり、ここに**新秩序ができるまでに10年間を要したフランス革命**は幕を閉じます。

220年前のフランス革命は、日本の現状と重なる要素が多いのです。ルイ王朝による破綻寸前の国家財政、日本も先進国で較べるものなき巨額の国家債務(国債の残高)を次世代の国民に負わせようとしています。沸騰点に達するフランス民衆の不満、日本も「冷戦は終わった。勝ったのは日本だ」と評された1980年代の日本一人勝ち状態から1990年代からの「失われた20年」を経てもなお本格回復できずに少子化、グローバル化にも対応できずに格差拡大に募る民衆の不満、そしてフランスも日本も改革を目指す男達の野心と苦い現実で多くの共通項を持ちます。

時間が出来たら、一度、じっくりフランス革命の本を読んでごらん下さい。人生の、社会の、有益な勉強になります。最近刊行された「小説フランス革命」(佐藤賢一著:集英社刊、全10巻)も良いテキストになります。このテキストの最初の頁で定義した**近世**はここまでです。ナポレオンの帝政以降は次のテキスト「人類と社会…近代」に譲ります。

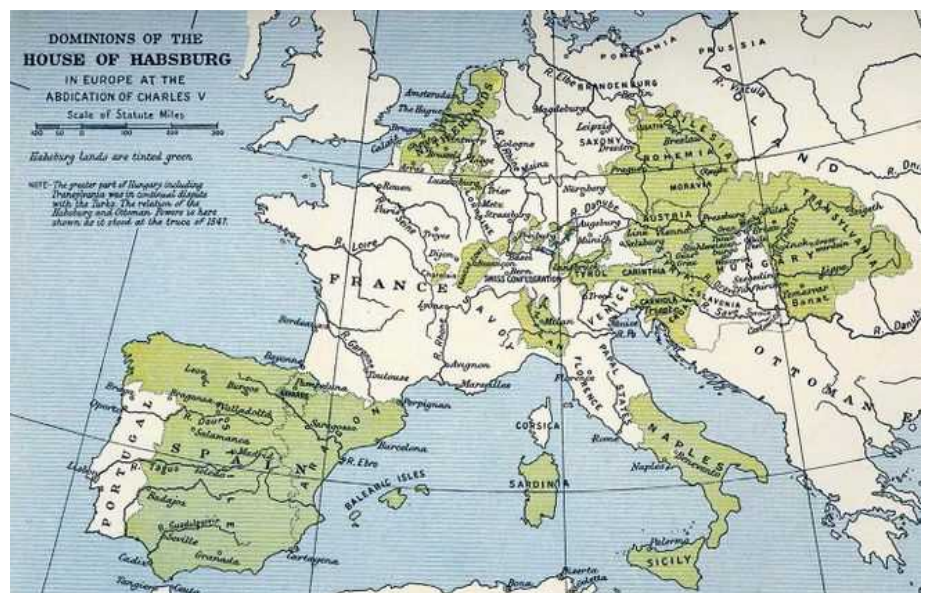
10・4 ドイツの悩める中世

ハプスブルグ家の存在: Habsburg家はスイスに発祥したドイツ系の王族で、カエサル一門の出身を名乗り、双頭の鷲を家紋にしています。「戦争は他家に任せておけ。幸いなオーストリアよ、汝は結婚せよ。」といわれる通り、政略結婚による領土拡大に成功しました。オーストリア帝国からお興入れしてきたフランス革命の主役の一人、マリー・アントワネットもハプスブルグ家とブルボン家の政略結婚の駒なのです。

当時は国家は国王の私有財産扱いなのです。ハプスブルグ家は中世から20世紀初頭まで、オーストリア大公国、神聖ローマ帝国(ドイツ等)、スペイン王国、ナポリ王国、トスカーナ大公国、ボヘミア王国、ハンガリー王国、オーストリア帝国等の大公、国王、皇帝を輩出したヨーロッパの王家の中でも屈指の名門です。

1438年にアルブレヒト二世がドイツ国王になってからはドイツ王位を基本的に世襲化することに成功し、1508年にマクシミリアン一世が皇帝を名乗ります。

この頃、婚姻関係からハプスブルグ家はブルゴーニュ公国領ネーデルランド(オランダ)とスペイン王国とナポリ王国を継承し、右図のグリーンの部分のような大規模な領土拡大に成功しています。



1547年時点のハプスブルグ家の版図 (Wikipedia)

宗教戦争の惨禍: 神聖ローマ(ドイツ)皇帝を戴き、諸侯や自由都市など300数十の国から成るドイツは国ごとにカソリック(旧教)、ルター派(新教)、カルヴァン派(新教)に別れていがみあっています。

16世紀末から17世紀初頭といえば、ヨーロッパの他の国々では、絶対王権の成立と共に、国内の宗教対立は殆ど収まっていたいました。

ところが、ドイツでは逆に宗教上の争いが諸侯たちの政治闘争を一層深刻にしていました。ドイツの宗教対立はハプスブルグ家が支配するボヘミア(現チェコ、スロバキアの一部)で遂に爆発しました。

ボヘミアは人口の9割までがチェック人で、ドイツ人の支配に対して民族主義的な反撥の感情が強く、かつ、新教徒が多い土地柄でした。1617年、熱烈なカソリック信徒である皇帝フェルデナンド二世がボヘミア王になると、これまでの新教徒に対する寛大な政策は捨てられ、いたるところで新教徒の役人や御領地農民が追われ、新教の教会が閉鎖されます。

これに怒ったボヘミアの新教徒は1618/5、新教貴族と千人を超える武装市民が首都プラハの王城に押しかけ、激しい口論の末、二人の代官を窓から下の堀へ突き落として(命は助かりました)反乱が始まりました。翌年、ボヘミアの新教徒は新教連合の盟主ファルツ伯フリードリヒを王に迎えます。しかし1620年、優勢な皇帝軍に粉砕され、破れたファルツ伯や土地を取り上げられた新教貴族など3万人の新教徒がこの国を逃れました。その後、ライン川中流・下流域で続いた新教諸侯の抵抗も1623年までには大体鎮圧され、ドイツでは皇帝を中心にカソリック派が完全な勝利を収めたように見えました。

ここから30年戦争は**宗教戦争の衣を着た(多数の国が二派に分かれて戦う)国際戦争に変質**します。この過程でドイツの力を徹底的に削ごうとする列国の思惑通り、最終的に荒廃したドイツが残され、約200年間にわたって世界の流れから取り残されることになります。

1625年、新教徒のデンマーク王クリスティアン四世がドイツに侵入します。その背後にはドイツの新教勢力の絶滅を恐れる新教国イギリス、オランダの援助と、ハプスブルグ家の盛強を憎む旧教国フランスの支援がありました。ところがイギリスが約束した戦費の支払いを滞らせたために傭兵隊が離れ、デンマーク王は1626年、敗北して領国に逃げ帰ります。封建貴族が君主の下に馳せ参ずる中世の軍隊から、絶対主義国家の常備軍が形成されるまでの過渡期にあたる当時は、金に釣られて集まる傭兵隊が軍の主力でした。

1630年夏、ドイツの新教徒を救うためと称してフランスの支援を受けたスウェーデン王グスタフ・ルドルフが北ドイツに上陸し、忽ち中部ドイツに侵入し、皇帝軍を散々打ち破ります。1632/11、リュッツェンの激戦でスウェーデン軍は辛くも勝ちましたが、戦死した獅子王ルドルフの遺体は折り重なる死人の山に埋まる惨状でした。1634年、スウェーデン軍はスペイン軍とドイツ軍の連合軍に打ち負かされました。

遂に黒幕フランスが直接ドイツに介入します。もはや宗教戦争の名目は雲散霧消し、ヨーロッパの支配権を争うカソリックの二大勢力、フランスのブルボン家とオーストリアとスペインを支配するハプスブルグ家の国際的な勢力争いに変質しています。

この間に戦争の直接的・間接的被害に遭ってドイツの人口は1,600万人から600万人に激減し、村落の6分の5は破壊されたといわれます。経済も寂れ、道徳や文化は地を払い、虚無的な生活態度や無知・迷信が蔓延し、飢えと背中合わせの暴飲暴食や、忌まわしい魔女狩りが猛威を振るいました。まさに**暗黒の中世**がここに集約されています。

当事者たちがいい加減、戦争に飽きてきて和平交渉が開かれ、1648年末にウェストファリア条約が調印され、「最後の宗教戦争にして最初の国際戦争」といわれた30年戦争は終結しました。フランスとスウェーデンは地政学的に重要な地点の領土を獲得します。

この条約で130年振りにドイツ国内の三つの教会勢力は1624年当時の勢力範囲で平和を締結し、新教徒2派はカソリック教徒と平等の権利が認められることになりました。

この条約はその後200年間のドイツの国家体制を決定します。この条約で、皇帝に対する諸侯の地位は一層高まります。300数十ある諸侯は自分の領内の立法・課税などの絶対君主権を得、勝手に外国と同盟を結ぶ外交権まで獲得しました。神聖ローマ皇帝の権威は有名無実となり、前世紀から進んでいたドイツの分裂はここに極まります。この条約が「**ドイツ帝国の死亡証明書**」と呼ばれる由縁です。

こうしてドイツはヨーロッパの日の当たらぬ場所となりました。戦争の痛手から立ち直ろうとしても、個々の諸侯国の小さな枠が制約となります。16世紀初め、宗教改革が一瞬見せた国民的発展の明るい展望も消え

失せ、以後 200 年間にわたり長い夜の闇がドイツを覆います。他国が大発展している大切な時期に、世界の大勢から立ち後れたとの苛立ちと焦りがドイツ国民を覆い、20 世紀になって二度の大戦に突っ走った怨念の爆発の源となっています。

この条約で、スペインの没落が明確になります。スペイン領であったオランダの独立戦争(1568～1648 年)と 30 年戦争は時期が重なっています。この条約でオランダとスイスの独立が国際的に承認されました。これらはハプスブルグ家の没落を象徴するイベントでした。国際政治の重心はイギリス、フランス、オランダという資本主義経済の発展が順調な国々に移り、その面に出遅れたスペインは急速に没落し、世界のメインプレイヤーの地位から外れました。

軍国プロシャの勃興：300 以上もの小国に分裂して、諸侯が勝手な行動をとるのでは、ドイツは国家としての体裁を全く呈していません。この時期、他国が海外進出で大発展するのを指を咥(くわ)えて見守るだけです。誰かが、これらを統一して普通の国家にまとめる必要があります。結局、これをやり遂げたのはベルリンを首都に持つプロシャでした。しかしながら、そこまでの道は長いです。このテキストでは 18 世紀末まで切りますので、統一事業の前半までしか取り扱えません。

17 世紀末から 18 世紀にかけて、ドイツの各地方は 30 年戦争の痛手から回復し、ライン川中流地方からは再び良質のブドウ酒が輸出され始め、下流地方にはゾリンゲンの刃物、絹、毛織物、木綿等の繊維工業、サクソニアでは麻織物工業が栄え、海外で名声を博するようになります。

エルベ川の西方を西ドイツと呼びますが、この地方ではほぼ地主貴族と農民との間の封建的な隷属関係は終わりを告げ、貴族は諸侯に政治権力を召し上げられて単なる地主になり、農民の間から自作農が出つつありました。ここでは、ほぼ、フランスと同じ社会発展のコースにあるといえます。

エルベ川東方の東ドイツでは村の専制君主であるユンカー(地主貴族)が平均 200 ヘクタールの農地を持ち、農民は自分の畑も持っていましたが、1 週間の内の何日かは強制的な賦役労働に服しました。ユンカーは村民に対する裁判権、警察権を持つ支配者でした。彼等は村に対する独裁権で成長し、18 世紀半ばには所有農地は平均 400 ヘクタールまで増加しています。西ドイツでは貴族が衰え農民が向上していったのに、東ドイツでは貴族が栄え、農民が萎(しぼ)んでいったのです。

東ドイツの諸侯の中の最有力者は、強国の間を上手く泳いだホーエンツォレルン家のプロシャでした。フランスと上手く組んだ大選帝侯フリードリヒ・ウィルヘルムはユンカーが依る貴族会議から政治権力を奪って中央集権の官僚制を作り上げ、始めて常備軍を創設しました。

息子のフリードリヒ一世はオーストリアに忠義立てして最初のプロシャ王となります。

次の兵隊王フリードリヒ・ウィルヘルム一世は 3.8 万人の常備軍を 8 万人に強化しますが、志願兵と傭兵だけでは不足、居酒屋や日曜日の教会から身体の良い若者を強制的に拉致して入隊させます。プロシャ軍の訓練の激しさと軍律の厳しさはヨーロッパ中に鳴り響いていました。彼は開拓により王領地を広げて農民の入植を勧め、歳入は父親の時代の 1.7 倍になりました。

次の**フリードリヒ二世**(在位 1740～1784 年)は暴力的な父親に反撥し、18 歳で友人と逃亡しますが、掴まって目の前で友人を斬首され、1 年間の禁固と監視つき生活をさせられます。すっかり老成した彼は 21 歳で結婚し、軍務の傍ら哲学、文学、政治の勉強に励み、音楽ではフルートを吹き、作曲もします。この時期、彼はフランスの啓蒙思想の哲学者ヴォルテールと文通し、啓蒙主義をマスターします。君主としての彼は、啓蒙主義の合理性を近代化の指針として取り入れながら、一方でユンカー制度のような古い支配関係を維持し、富国強兵を図ります。彼はこのギャップを冷徹に見詰めて、現実主義に徹します。



フリードリヒ二世 (Wikipedia)

1740 年、ハプスブルグ家の後継者としてマリア・テレジアが即位した時、フリードリヒ二世は些細な口実を設け、オーストリア領シレジア(東ドイツで最も工業が盛んな地域)へ侵攻します。1741/4 のモルヴィッツの会戦でプロシヤ軍はオーストリア軍に圧勝します。これを切っ掛けに各国が介入し、各地で戦争が始まります。しかしマリア・テレジアは正義は我にありと確信して頑張ります。18 世紀最大の外交官といわれたカウニッツ伯が 1753 年に宰相になり、彼の外交政策が効を奏してプロシヤは孤立し、気がついたらオーストリア、ロシア、スウェーデンを敵に廻していました。

当時、この三国は全て女帝であり、フリードリヒ二世がマリア・テレジアに「女に国政が務まるか」の類の女性蔑視の言動を吐いたのを取り上げてカウニッツ伯が三女帝を焚き付け、フリードリヒ包囲網が出来上がっていました。誠に**口は災いの元**、女性蔑視は全女性を敵に廻す愚かな言動でした。

1756/6、フリードリヒ二世は奇襲攻撃でサクソニアを占領、ボヘミアに侵攻します。1757/6 にオーストリア軍に敗退し、フランスが参戦したのを受けて 1757/11 にはシレジアを放棄したまま西へ向かってロスバッハでフランス軍を大敗させ、1 ヶ月後、シレジアのロイテンでオーストリア軍を破り、一息つくことができました。更に数次の戦いの後、1759/8 のクネストドルフでのオーストリア・ロシア連合軍との戦いで、プロシヤ軍は 45,000 人の軍の半分を失う壊滅的打撃を受けます。フリードリヒは国土の多くを敵に占領されながら、驚くべき持久力と組織の才を発揮して 10 万人の軍隊を維持し、2、3 の勝利さえ挙げます。

1762/1 にロシアのエリザヴェータ女帝が急死し、後を嗣いだピョートル三世はドイツ育ちでフリードリヒ二世の崇拝者でした。彼は直ちにドイツから軍を退かせ、6 月にはプロシヤと軍事同盟を結んでオーストリアを攻めました。1763 年の平和条約で、プロシヤのシレジア領有が改めて確認され、7 年間、ヨーロッパの列強を一手に引き受けて戦い抜いたプロシヤが大国の仲間入りをしました。

さすがに王の昔の自信と大胆さは消え失せ、二度とあの孤立に陥らないように心を砕き、23 年間、病身に鞭打ち超人的に働き続けました。彼が 1786 年に 74 歳で死んだ時、プロシヤの国庫には父親から受け継いだ時の 5 倍以上の資産が残り、国土も約 2 倍になり、人口も 250 百万人から 650 百万人に増え、軍隊も 8 万人から 20 万人になりました。この輝かしい治績により彼は大王と呼ばれ、プロシヤ人の崇拝的となりました。王が自ら言うように、ユンカー貴族は「王冠の最も美しい飾り、また、軍隊の光彩」であり、王と貴族階級との依存関係こそが封建国家プロシヤの背骨でありました。

王の晩年にベルリンにいたイギリス大使は次のように辛辣な批評をしています。「プロシヤ王国は、私には巨大な牢獄を思わせる。その真ん中に、囚人の世話に忙しい偉大な典獄が立っている」と。

10・5 ロシアの夜明け

キエフ大公によるキリスト教の導入：キエフ大公ウラジーミル一世(在位 955～1015 年)はロシア古来の原始宗教に飽きたらず、世界の宗教者を招いて比較調査をします。イスラーム教はロシア人の好物である豚肉と酒を禁ずるので駄目、ユダヤ教は祖国のない連中の宗教なので駄目、カソリックは威厳が不足しているので駄目となり、結局、絢爛無比の聖ソフィア教会、豪華な宮廷、威厳に満ちた聖職者、荘重な儀式が備わったギリシャ正教が選ばれます。彼は東ローマ帝国の皇女アンナを王妃として請じ、彼女が引き連れてきた数百人の付き人により、ロシアの文化改革が一気に進みます。キリル文字も、それまで文字を持たなかったロシア人にギリシャ語の聖書を教えるために、アンナと共に来た宣教師たちにより作られたもので、現在、スラブ語圏とギリシャ正教圏の重なる地域(ロシア、ベラルーシ、ウクライナ、ブルガリア、セルビア、マケドニア等)の用語となっています。

イワン雷帝：ロシア帝国を作り上げたイワン四世(在位 1533～1584 年)は、リューリュツク(バイキングの末裔)朝モスクワ大公国の君主です。彼は帝権の強化と周辺のモンゴル後継国を攻め取って版図の拡大に努め、ツァーリズム(専制政治体制)を固めました。極めて残虐・苛烈な性格であり、ロシア史上最大の暴君といわ

れます。彼は始めて身分制議会(大貴族、下層貴族、商人からなる)である全国会議を開催しています。また、バルト海に出口を求めてリヴォニア戦争をしますが、これは成功せず、彼の恐怖政治はこの時期から始まりました。

ロマノフ王朝の誕生：彼の死後、ポーランド軍とスウェーデン軍が侵入し、ロシアは崩壊状態になりますが、救国の英雄ミーニンとポジャールスキー公の率いる義勇軍がこれらを撃退し、イワン雷帝の流れを汲む五名家の一つ、ロマノフ家のミハイル(ロマノフ朝の開祖：在位 1613～1645 年)を選び、皇帝に就けます。300年間続いたロマノフ朝の創設です。外敵の侵略を受けたロシアの喫緊の問題は軍事技術の遅れを取り戻す近代化です。ミハイル帝は外人部隊を創設し、次いでロシア人部隊を西欧式に再編成し、外人将校に訓練させます。

次のアレクセイ帝(1645～1676 年)になると歩兵6連隊から成る外人部隊がおかれ、中にドイツ人が1,500名を数えたといひます。武器・弾薬も最初は輸入しましたが、やがてイギリスやオランダから専門家を招聘して工場を建設し、国産化を図ります。日本の明治維新と同じ近代化パターンです。

ピョートル大帝：近代国家ロシアの基礎を築いたのはピョートル大帝(在位 1682～1725 年)です。彼はアレクセイ帝の14番目の子です。彼が3歳の時に父が亡くなり、10歳で帝位に就きますが、実際の政治実権は叔母や母親に握られており、彼が実権を握るまでには複雑で愉快な経緯があります。

彼はモスクワの外人部落に住む技師チンメルマンから数学、地理学、砲術、築城術などを異常な熱意をもって習います。彼は器用でどんな技術でも直ぐマスターしました。その手は常に動いており、マメが絶えたことがなく、孵、椅子、食器、タバコ入れなど、多数の製作物が残されています。

他の人より頭だけ背が高い巨軀で、どんちゃん騒ぎをしても翌朝クロツとして起きたそうです。1697年、大使節団を編成し、その中の随員として偽名で紛れ込んでオランダ、イギリスの造船技術を実地に習得に行きます。オランダ滞在は4ヶ月に及び、造船所に日参して一職工として働き、余暇を見つけて工場、博物館、病院、裁判所、音楽館等、珍しいものは何でも見て歩きます。

イギリスでも3ヶ月の滞在をしますが、名誉革命で迎え入れられた顔見知りのオランニュ公ウイリアムがイギリス国王であり、ピョートルを歓待してくれます。ここでも造船所で技師見習として働き、各地の工場や軍艦を見学します。

ピョートルの一生は戦争に捧げられ、35年間の治世の内、戦争がなかったのは13ヶ月間だけでした。「海への出口」を求めることがロシアの発展にとって不可欠であり、彼が造船術を学び、海軍の建設に狂奔したのもそのためでした。彼は1700年、バルト海の制海権をスウェーデンと争って大敗し、7年の歳月をかけて軍隊の強化を図り、徴兵制を採用し、17万人の常備軍を編成し、300門の大砲を鑄造し、1709年、見事に雪辱を果たしました。これが「ヨーロッパの転機」をなしたといわれる「ポルターヴァの戦い」であり、以後、スウェーデンが没落して新興ロシアが大発展して明暗ところを変えました。

ピョートルはクロンシュタット湾のネヴァ川の三角州に、サンクトペテルスブルグを建設します。非常な困難の末、ヨーロッパで最も新しい、最も美しい首都が出現します。バルチック艦隊が編成され、バルト海で最強の海軍となります。ロシアの大貴族と下層貴族は常備軍の将校や国家の高級官僚になることを義務付けられました。国家の官職を武官と文官に分け、それを14等に格付けして近代的な官僚制度を創設します。ピョートルは流れに沈むボートを救おうとして寒中の水に飛び込み、これが原因で発熱し、急死しました。



ピョートル大帝 (Wikipedia)

1725年のことで、まだ、男盛りの53歳という若さでした。

エカチェリーナ女帝の時代： ピョートル大帝はロマノフ王朝5代目の君主です。10代目のエリザヴェータ女帝は世継ぎがないため、ドイツのホルシュタイン公に嫁した彼女の姉の子供を養子として貰い受けたのが11代目のピョートル三世です。この人物が先のフリードリヒ大帝の危機を救った人物です。近衛軍は彼のフリードリヒ崇拝に大きな不満を抱き、更に近衛軍が誇りとするピョートル大帝以来の濃緑色の長い上着を廃し、窮屈なプロシヤ軍服に替えるに至って遂に不満が爆発してクーデタを起し、彼を廃位します。代わって、北ドイツから彼の許に興入れして子までなしたが、前女帝エリザヴェータにも、ピョートル三世にも蔑(ないが)しろにされ、宮廷での地位を守るためロシア語を巧みに読み書きし、ロシアの歴史を学び、宮廷で並ぶものなきロシア通となっていたエカチェリーナ王妃が近衛軍に担がれて女帝(在位1762～1796年)として即位します。エルミタージュ美術館の基盤を作った女帝です。

この不世出の女帝は、生まれはドイツ、教養はフランス、ロシアでは文筆家として当代一流でした。後に科学アカデミーが「エカチェリーナ全集」を刊行した時、分厚い12巻本になりました。彼女がヴォルテールやグリムと交わした往復書簡は、優に1冊の本になるくらいでした。その文体は華美で機知に富み、当時のフランスの一流の作家と較べても引けをとりません。『『大工のツァーリ』によって始められた事業は『作家の女帝』によって完成された。』といわれます。

ロシアの農奴制： 悪名高いロシアの農奴制の第一段階はアレクセイ帝の時で、地主と農民の関係はまだ契約関係でした。農民はその年の取り入れが済んだ「ユーリーの日」に、これまでの債務を返済して自由に移動することが可能でした。第二段階はピョートル大帝の時で、農民は人頭税の財源として世襲的に土地に縛られることになります。第三段階がエカチェリーナ時代で、農民は遂に貴族である地主の奴隷に等しい存在になります。これは西欧では例のない最悪の農奴制で、農民が地主の全くの恣意に従わされ、その私有財産となります。地主は気に入らない農奴や働けなくなった者を、開拓民としてシベリア送りする権限を持っていました。

騎馬軍団優位の終焉： 古代・中世を通して決して人口は多くないが、定住民族に対して絶えず脅威となって世界史を動かした遊牧民族の騎馬軍団の時代も終わりを告げます。イワン雷帝の頃から「タルタルの軛」から脱したロシアは、その後、近代的軍隊を以てユーラシア草原を制覇し、今日に至ります。ロマノフ朝の歴代皇帝は軍隊の近代化に努め、もはや勇氣と忍耐心と馬と弓矢に頼る騎馬軍団では歯が立たない存在となりました。ユーラシア草原を我が故郷として自由に駆け回っていた遊牧民族も、定住民族が規定する国境のルールに従わざるを得なくなり、各国の国境線は今日の姿になりました。椅子取りゲームで座れなかった人のように、民族はあるが国がないクルド人のような存在が発生しているのはこのためです。

第8～10章で参考にした文献：

「世界の歴史3／中世ヨーロッパ」堀米康三／中央文庫

「世界の歴史7／近代への序曲」松田智雄／中央文庫

「世界の歴史8／絶対君主と人民」大野真弓／中央文庫

「世界の歴史10／フランス革命とナポレオン」桑原武夫／中央文庫

「文明の人口史」湯浅赳男／新評論

1 1. 中国の古代から近世を貫く専制君主制

中国の風土：古代の世界四大文明の一つ、黄河の殷文明(中国文明)は北緯 30～40 度の範囲に含まれる点でメソポタミア文明、インダス文明と共通性があります。四大文明は何れも大河の流域に発展した共通性がありますが、川との関わりの点では中国文明は他とは趣きを異にしています。河北の畑作は降雨に依存しており、黄河の灌漑だけに依存している訳ではありません。黄河の氾濫も規則性がなく、洪水の後の沈殿泥を天然の肥料とすることはできません。

農地面積を比較するとエジプトが約 3 万km²、メソポタミアが約 3 万km²であるのに対して、河北大平原は約 12 万km²という圧倒的な広さを有します。黄河は平原に出たから海に入るまでの勾配が他の川に比べて急であるため洪水による河道の変遷が頻繁にあり、黄河本流の治水は困難であり、古代には船運も殆ど行われていません。代わって黄河の支流と黄河系の小河川の治水が最初に行われ、その流域の平野が農地として開拓されました。前史時代の原中国人は約 7,000 年前に西部の黄河高原地帯(仰韶文明)と東部の平原地帯(竜山文明)にそれぞれの文明を築いたようです。

中国の歴史：中国は文字の国です。中国の文字は 3,400 年前に突然完成した姿で出現しています。このことは文字という概念が 5,300 年前に最古の文字が出現するシュメル文明から渡来したことを窺わせますが、漢字はその後、全く独自の進化を遂げており、中国文明は独立した文明として認められています。私がいた頃、台湾の放送は、その日の始めに必ず「中国 4,000 年の歴史」とアナウンスして幕が開けました。文字ができてからは、さすがは文字の国、大量の記録が残されています。

司馬遷(前 145～前 86 年)が著した「史記」は 526,500 字より成る浩瀚(こうかん)な歴史書で、当時残されていた多くの記録を元に、中国の神話時代から前漢時代までを綿密に記述しています。これが手本となって、中国では王朝が終わる毎に正史(その王朝に関する公式の歴史書)を書く習わしとなり、史記を頭とする二十四史が存在します。歴史資料から、中国の各時代を列挙します。

三皇五帝時代：伝承による神話時代です。特に三皇は神としての属性を持ちます。

夏王朝：考古学上の発見がないが、存在した可能性は高いと考えられている最初の世襲王朝です。

殷王朝 (前 1600～前 1046 年)：考古学的に実在が確認されている最古の王朝で、商王朝ともいいます。この頃から青銅器時代になります。湯王が夏王朝を倒して殷王朝の開祖となったと記録されています。「商人」「商業」の語源です。「酒池肉林」の悪政を行った 30 代目の天子紂王(ちゅうおう)が国を滅ぼしました。

周王朝 (前 1046～前 256 年)：周は文王を始祖とし、徐々に勢力を伸ばし、武王が紂王と戦って周王朝を興します。中国では、周王朝は古代の有徳王朝として敬意を払われています。12 代目の幽王は悪政を行い、反乱にあって殺されました。ここまでを西周といいます。

春秋戦国時代 (前 770～前 221 年)：平王が即位し、東の辺地に遷都して東周となり 37 代目の赧王(たんのう)まで存続します。儒学の祖・孔子(前 551～前 479 年)が書いた歴史書「春秋」が対象とした時代を春秋時代と呼び、前 403 年から前 221 年までを戦国時代と呼びます。春秋時代には東周、燕、魯、齊、宋、晋、鄭、衛、呉、楚、越などの国が鼎立(ていりつ)し、戦国時代には晋が分裂して更に韓、趙、魏が加わりました。この時代は孔子、孟子、老子、莊子など諸子百家といわれる学者たちが生きた学問の時代でもあります。

秦王朝 (前 221～前 207 年)：秦の始皇帝が中国全土を統一して封建政治を廃し、郡県制度を敷いて任命し

た官僚を派遣し、中央集権国家を築きます。中国では2,500年前頃から鉄器時代に入り、土木工事により灌漑事業を行うことにより、一挙に農業生産性を高めることができるようになりました。その代表的なものが秦の灌漑システムである鄭国渠であり、それによる農業生産力の飛躍的向上が秦による中華帝国の建設を可能にしました。

この治水灌漑農業が中国における覇権の生産力的な基盤であり、その**大規模事業のために強力な抑圧的な中央政権が出現**します。

秦が強大になったのは灌漑工事により農業生産が躍進し、国力が増大したためです。

始皇帝が行った主な事業を挙げましょう。①中国を統一する手段として、当時乱れていた**漢字を統一**した、②**万里の長城**を建設した、③各地に道路を建設した、④実生活や政治に不必要な言論を抹殺するため**焚書坑儒**(ふんしょこうじゅ：実用書以外の本を焼き、儒者を生き埋めにする)を実行等々。始皇帝が統一した範囲がほぼ現在の中国の版図になっています。



万里の長城 (joyphoto.com)

漢王朝 (前 206～220 年)： 始皇帝亡き後、天下麻の如く乱れ、「**項羽と劉邦**」が天下を争い、遂に劉邦が漢王朝を興しました。漢王朝は全体で約 400 年間続きます。この時代に**古代中国文明は全盛期**を迎えました。司馬遷が生きた時代です。王統は 14 代目の孺子嬰で一時途絶え、そこまでを前漢と呼び、紀元 25 年に劉秀が漢王朝を再建して後漢が続きます。後漢に倭(日本)の国王が勅使を出し、金印を受け、蔡倫が紙を発明しました。

「漢字」とは正に漢の文字なのです。中華文明を受容する立場の日本には、中国の文字と共に、色んな時代の文字の「読み(発音)」が入ってきています。

代表的なのは「漢音」「呉音」などですが、それ以外にも各種の時代の「読み」が取り入れられており、本場で忘れられた発音が化石のように生き残っています。文明の流れの終点に典型的に現れる現象です。

文字は数千年間に亘って殆ど変化していませんが、発音は驚くほど変化し、時代が異なる人たちの間では会話が成り立たないでしょう。現在の中国でも、地方毎に異なる方言も持ち、同じ中国人でも全く会話できないのを、私は台湾で目撃しています。このため、中国政府は北京語を標準語(普通語)とする徹底した教育を行い、テレビ等のマスメディアの発達もあって、中国で初めてのこの試みは成功しつつあります。



漢の高祖 劉邦 (Wikipedia)

三国時代 (220～280 年)： 184 年の黄布の乱(農民の反乱)で漢王朝は崩壊し、曹操・曹丕(そうひ)父子が率いる魏、劉備が率いる蜀、孫策・孫権兄弟が率いる呉の三国が天下の覇権を争う「**三国志**」の時代です。222 年より 45 年間、三国は鼎立し、耶馬台国の卑弥呼が魏へ勅使を出しています。

晋王朝 (280～316 年)： 魏の武帝が中国統一に成功し、晋(西晋)を建国します。

大乱の後、元帝が東に遷都して東晋を興します。

五胡十六国時代： 東晋の時代に華北にモンゴル系の匈奴(きょうど)と羯(けつ)、トルコ系の鮮卑(せんび)、

チベット系の氐(てい)と羌(きょう)が前趙、成、後趙、前燕、前秦、後燕、後秦、西秦、後涼、南涼、北涼、南燕、西涼、夏、北燕を建国します。これらの異民族はかなり長期間にわたり移住しており、また、これらの国も同時に存在したのではありませんが、この時代に大量の異民族が中国の版図に流入して北方や西方の文化が中国文明に混じり込むことの意義は大きいです。
この時代に中国に佛教が入ってきます。

南北朝時代 (420～589 年)： 420 年に劉裕が晋を倒して宋を建国し、439 年に北魏が華北全土を統一し、南に宋が、北に北魏が並び立つ南北朝時代になります。

隋王朝 (589～618 年)： 宋も北魏も変遷があり、589 年に隋の文帝が中国を再び統一します。文帝は都を長安に移し、万里の長城を修築し、行政改革を行い、**科挙**(高等文官試験)の制度を創設します。

唐王朝 (618～907 年)： 文帝の息子・煬帝(ようだい)は民衆の支持を失い、全国に反乱が起き、李淵(高祖)が長安に無血入城し、唐を興します。高祖の次男・太宗は**貞観の治**(じょうがんのち)と呼ばれる善政を行います。農地を成人男子に均等に与える**均田制**や**租庸調**という課税体系は後日、日本がそっくり取り入れます。**玄奘三蔵**が国禁を破ってインドへ仏典請来の大旅行を決行しました。彼の請来した仏典は、組織的に漢訳が進められ、後世の東アジアの仏教の基盤となりました。この大旅行が**西遊記**のネタになっています。

太宗の死後、皇后である則天武后が中国史で唯一の女帝になり、彼女の在位中だけ国名を周とします。712 年即位した**玄宗皇帝**は開元の治と呼ばれる善政を行ったが、高齢になってから**楊貴妃**にのめり込み、妃の一族の専横で国が荒れます。このように皇后が原因で国が乱れることが度重なり、遂に帝王が在位中は皇后を娶らない仕来りとなります。24 代続いた唐王朝も 907 年の黄巢の乱によって倒されます。

宋王朝 (960～1279 年)： 約 50 年間、各地で群雄割拠した五代十国の時代を経て、趙匡胤(ちょう・きょいん)が宋を興します。宋は学問を奨励し、芸術も盛んになり、中国の三大発明といわれる**火薬**、**羅針盤**、**印刷術**はこの時代のものです。日本の平清盛は大いに日宋貿易を推進しました。

1115 年、ツングース系の女真族が金を建国し、1126 年の宋との交戦で宋の欽宗皇帝と徽宗皇帝が北方に拉致され、徽宗の九男・趙構が南に逃げ、南宋を開きます。金も南宋も結局はモンゴル帝国に滅ぼされます。

元朝 (1271～1368 年)： モンゴル帝国の中国王朝です。フビライ・ハーンが大都(北京)を建設し、農民と融和的政策をとり、高度の政治力を発揮して中国を治めます。大都はモンゴル帝国の政治・経済センターとなり、シルクロードや海路による海外貿易の最盛期となります。日本に二度侵略(1274 年：文永の役／1281 年：弘安の役)を企て大軍を差し向けますが、二度とも台風に阻まれて敗退しています。

明王朝 (1368～1662 年)： 元朝は衰微し、白蓮教の統領・朱元璋が元朝を倒し、明を興して洪武帝を名乗ります。一旦、南北朝に別れたのを永楽帝が再統合します。洪武帝も永楽帝も恐怖政治をします。このため、明国の官吏は常にびくびくし、事なかれ主義になります。

永楽帝の時代に海外進出をしました。一時はヴェトナムを占領します。また、**鄭和**を南海探検の指揮官として 1405～1433 年に 7 回の大航海が行われました。鄭和の航海はジャワ、スマトラ、マラッカ海峡を経てインド西岸のカリカットに至ります。4 回目以降はペルシャ湾岸やアラビア半島に至り、イスラム世界との交流を開きました。東アフリカやアラビアのメッカにまで行っています。この航海によって、明はイスラム勢力と関係を結ぶとともに、大量の華僑を世界中に進出させることとなりました。

儒学が栄え、王陽明のような大學者も出ました。

清王朝（1636～1912 年）：女真族の一族である満州族にヌルハチ(太祖)という英雄が出て 1616 年に後金を興し、その子ホンタイジ(太宗)が国名を清とし、1644 年に北京を奪って首都となし、中国支配を始めます。

康熙帝(在位 1661～1722 年)の時代に清は大いに栄えます。乾隆帝(在位 1735～1795 年)の治世に清は最盛期を迎えます。チベットをも統治し、清朝の版図は最大となります。清朝が中国最後の王朝です。これから後は「人類と社会・・・近代」に譲ります。

中国の歴史を読むと直ぐ判るのですが、歴史時代に入ってから中国文明は、王朝が興り、王朝が栄え、王朝が滅びるワンパターンの経過を何回も繰り返しています。常に専制君主制を踏襲しており、政治の形態が時代の変化に合わせて進化して行ったヨーロッパとは全く異なった化石化した歴史を辿っています。

始皇帝の部で触れていますが、中国の農業の生産性を高めるためには大規模な土木工事による灌漑事業が必要で、民衆を大規模工事に駆り出すために専制君主制が好適なのです。しかし、この政治形態は民衆の側に少しでも経済的余剰ができると必ず中央に収奪され、民衆側に創意工夫を活かして新しいことを開発するための資金を残させてくれません。また、抑圧された民衆からは、啓蒙主義思想なども生まれてきません。

宗代にできた都市文化は元朝の民族的抑圧、明朝での重農主義的抑圧によって一つの層をなす階級として定着できず、ささやかな贅沢を失うことを怖れる小市民的なライフスタイル(そこから民衆の活動力が生まれ、次の時代の発展が導かれる)は遂に形成されることがありませんでした。

また、鄭和により開拓された中国の大航海時代もそのとき限りとなり、次の世代では船の規模まで制限する法律ができ、再び海に目を向けることはなく、大陸国家であり続けました。

このため、12 世紀までは技術的に世界の最先端を行っていた中国が、その後、少しずつ遅れを取り始め、18～19 世紀の産業革命以後の世界の大発展に取り残されたのです。

東西冷戦が終わった 1990 年代から中国は政治的には共産党一党独裁体制のままで経済の開放を行い、近代化の遅れ「失われた 200 年」を取り戻すべく、現在、猛烈なキャッチアップを行っています。しかし、政治形態は相変わらずの共産党王朝というべき専制君主制です。1950 年、独立国家チベットに武力で侵攻して自国に編入し、清朝の版図を回復したのだと主張しています。世界人口の 4 分の 1 を占めるこの大国は何処へ向かうのでしょうか。

「新王朝が始まって、平和と秩序が維持されるに至ると出産が死亡を越えることによって人口は順調に増大し、文化も分業によって長足に進出する。しかし、やがて人口密度が高まり、農業技術の革新や改良の欠如と相まって大衆の生存競争が次第に激しくなっていく。にも拘わらず、人口はなおも増大を続けて、サイクルの頂点である飽和点に達する。すると過剰人口の徴候である悪疫や飢餓が頻発して生活が段々耐え難いものとなり、革命や戦乱が勃発する。それは一時的に人口圧を和らげ、新王朝を成立させる。人口は更に減少を続け、遂にサイクルの底である最低レベルに達する。それは新しいサイクルの開始で、同じような局面が繰返され、それぞれのサイクルは数百年の長さをもつが、それは主に王朝没落直前の人口圧の程度によって決まる。」（陳達の人口史(1946 年刊)より：「環境と文明」湯浅赳男／新評論

p100~102)

陳達は中国の人口に 5 回のピークを見出しており、①前 2 年(前漢)：5,950 万人／②742~756 年(唐)：5,290 万人／③1098~1100 年(北宋)：4,300 万人／④1573~1600 年(明)：6,060 万人／⑤1933 年(中華民国)：4 億 6,000 万人、としています。人口サイクルのボトムでは、ほぼピークの半分です。陳達は 4 回目までは農業技術の本質的な進歩がなかったと結論付けます。その後に、新大陸から来たトウモロコシとジャガイモの栽培が始まり、食糧生産は革命を迎えました。しかし、高収量植物は土壌を微細粒子化して貴重な表土を降雨

により流出させます。中東では致命的であったこの現象は、栄養分に満ちた表土である黄土が奪われてもその下もまた黄土であるこの地の特徴により、致命的にはなりませんでした。

陳達は 1933 年を以て今回の人口サイクルはピークアウトして減少傾向に向かうだろうと予測していましたが、現在の中国の人口は約 13 億人で、彼の予測は裏切られました。中国の人口増加は、人口学の学者の過去の経験や知識が全く通用しない未知の領域に突入しています。

そして、このことは全世界についてもいえることなのです。私が小学校の時に習った地球の全人口は約 20 億人で中国人は約 4 億人、対して現在の世界の全人口は 70 数億人です。僅か 70 年間ほどで 50 数億人も増え、地球に 3.5 倍以上の負荷をかけているのです。仮に人口が半分であれば温室効果ガスも半分になり、地球温暖化の問題の危険度も半減します。地球の温暖化が進むと地域的に気候の二極分化(豪雨と旱魃)が激しくなり、農業に激変が訪れ、深刻な飢饉が訪れると予測されます。結局、現在、我々が直面している環境問題や食糧問題や資源問題の根本に在るのは、**指数関数的に増加する人類の暴走人口問題**なのです。

壮絶な人災と天災による人口の激烈な損傷。それにも拘わらず、漢族は決して滅亡することなく、宋代と清代には人口ベースのアップすら実現し、今なお破竹の勢いでもって増大し、遠からず人類の四人に一人を占めようとしている。この巨大な生命力には驚嘆しない訳にはいかず……その第一は漢族の生命哲学の現世性であり、その第二は中国における都市中間階級のライフスタイルの未成立であり、その第三は周辺の諸部族の漢族への同化による新しい血の絶えざる流入であろう。

第一の生命哲学の現世性であるが、中国文明においては超越的なものは存在しない。天にしても、その天命によって権力という極めて生臭いものを天下に与える存在であり、自然現象もまたその天子の徳によって左右することができる場所のものである。従って、価値意識も福、禄、寿を頂点としている。禄は権力に与って入手する物質的富であり、寿はこの富を最大限に享受するための時間＝長命である。そして福は多数の子供を設けて死後の祭をしてくれる子孫を確保することに他ならない。ここで漢族の生命哲学が関わってくる。……決定的に重要なのは、この祭を執行する者は父系宗族制という社会構造に照応して男系の子孫でなければならないことである。もしも男系の子孫が不在で祭られないならば、死後の魂は鬼(寄る辺なき靈魂)として彷徨(さまよ)い、飢えなければならないのである。

この思想が中国文明の核心であって、孝が第一の倫理的義務とされる理由である。孝は日本におけるように単に父母に対する敬愛で終わるものではない。まず祖先の祭祀を執り行い、彼等を鬼としないことであり、決定的には自らを含めて祖先を祭る男系の子孫を産み育てることなのである。それ故、孟子は「不幸に三あり。後(子孫)無きを大となす」と述べたのである。……しかも、前述のように生命に対するリスク(天災、人災)に充ち満ちた世界であるだけに、人口の増大は漢族にとって偏執とすらなったのである。……

(「文明の人口学」湯浅赳男／新評論 p153~155)

この章で参考にした文献：

「世界の歴史 1／古代文明の発見」貝塚茂樹／中央文庫

「文明の人口史」湯浅赳男／新評論

「疑史世界伝」清水義範／集英社

あとがき

このテキストには数多くの歴史の教訓が散り嵌められていますが、大きなものを挙げてみましょう。

- (1) 中世は王、貴族、富裕な民衆、貧しい民衆の間の支配・被支配の力関係の中で社会が動いています。同じヨーロッパでも各国の歴史は何故こうも違ってくるのでしょうか。例えば 17 世紀末から 18 世紀にかけての西ドイツでは地主貴族が勢力を失って単なる地主になり、自作農が勃興してくるのに対して、東ドイツでは地主貴族はますます勢力を増して農民が萎んで行きます(p47)。このテキストはその原因までは触れていません。もう一段深い分析が必要です。
- (2) 宗教は歴史の結果から見れば、人間集団間の激しい対立を生み、恐ろしいトラブルの原因となることが多いようです。キリスト教では、長期間にわたる苦い経験を通じて、殆どの国家が政教分離しました。だが、イスラーム教は社会構造自体に一体化する性格上、政教分離が困難で、現在でもイスラーム諸国は政教一致を守る国が多いのです。このため、多くのイスラーム諸国は産業革命に始まる近代化を受け入れることが難しく、社会の全体的富裕化が実現できず、貧困から来る緊張・軋轢・暴力から解放されていません。
- (3) ローマ帝国もモンゴル帝国も、共に人類の幸福な時代でした。世界帝国は各民族の文化、宗教に干渉せず、大きな抱擁力で小異を飲み込み、出自に関係なく最良の人材を活用しています。帝国内には都市を防衛する城砦も、各地で関税や通行税を取る関所ありません。戸籍制度、駅通制度、成文法が整備され、非常に治安と経済効率が良い平和な社会が実現しています。
- (4) 疫病はしばしば人口を 1/2~1/3 まで激減させていますが、戦火もそれに劣らぬ惨禍をもたらします。例えば 30 年戦争(p46)ではドイツの人口は 1,600 万人が 600 万人(38%)にまで減耗しています。
- (5) フランス革命は、短期間に大改革が進行する場合に、社会に何が起こるかを知る最良の教材です。

このテキストは事件や登場人物が多いです。一気に読めなかったら、何回かに分けて読んでください。

多数の年号が挙げられていますが、これは関連する事件の前後関係を明らかにするためで、これだけ多数の年号を憶える必要はありません。

多くのテキストは「何時、何処で、何々が起こった」と「結果」が書いてありますが、このテキストでは「どのような環境条件や事情があったから、その事件や社会的変化が起こったのか。似たような事件や社会的変化が前や後の時代に起こっていないか」が理解できるように、できるだけ「原因」と「関連」を書くように努めました。

どのような条件が揃った時に社会にどのような事件がどのような経過で起こるのか、が感覚的にでも掴めるようになれば、このテキストの目的は達せられます。

「原因」は「結果」に先立って存在します。歴史はこれまでに無数の社会実験を繰り返して行い、その記録が残されています。その実験結果は人類共有の貴重な財産です。「賢者は歴史に学ぶ」とは、それを指しています。

将来の「結果」を引き起こす「原因」は、現在、貴方の目の前に存在しています。

貴方は学校であれを学び、これを学びますが、何故これらの事柄を学ばなくてはならないのかについて突き詰めて知る機会は余り無いと思います。これらの教育は、人類が集団で生活し、社会を営む過程で生み出してきた知識の集積を次世代の人類に引き継ぐために、現在の社会が運営している大事な事業なのです。

このテキスト・シリーズは、無数の独立した知識が全体としてどのように人類の知識体系を構成しており、そのことをマクロ(巨視的)に理解しながら学習することが大切だという理解に従って書かれています。

これらのテキストが貴方の「歴史の眼」の能力を養う縁(よすが)となることを希望します。

このテキストの前に「サルと別れた日」「人類と社会・・・古代」がありました。このテキストの後に「人類と社会・・・近代」を置きます。

以上

補遺：

1. 西暦1000年の都市人口ランキング

……唐の都の長安が手本の平安京は、南北に貫く幅 84mの朱雀大路を中心軸に左右対称のプランで建設され、庶民にも1軒に 140 坪が割り当てられた。ところが、井上教授(京都産業大学)によれば、遷都から 200 年ほど経つ(源氏物語の作家)紫式部の頃には様変わりし、湿潤地が多い右京(西部)は廃れ、左京、それも四条以北の東北部への人口密集が進んでいた。「当時は死にそうな病人は家の外に出した。疫病が流行ると路上に屍体が放置され、鴨川にも屍体のごろごろしていた。捨て子が多く、ストリートチルドレンもいた。正暦5年(994 年)にも疫病の記録があり、下級貴族の紫式部は惨状を目にしたはずです。源氏(物語)には一言も出てきませんが」。

粗末な家が軒を連ねる庶民の暮らしは、王朝絵巻の世界からほど遠く、現代の途上国のスラムを思わせる。その平安京が、当時、世界屈指の大都市だったことは余り知られていない。

過去 4,000 年の世界の都市人口を推計した米国の歴史家ターシャス・チャンドラーによる西暦 1000 年の世界ランキング(人口順) は次の通りだ。

①コルドバ(スペイン) 45 万人／②開封(中国) 40 万人／③コンスタンチノーブル＝現イスタンブール(トルコ：当時はキリスト教圏) 30 万人／④アンコール(カンボジア) 20 万人／⑤平安京 17.5 万人／⑥カイロ(エジプト) 13.5 万人／⑦バグダッド(イラク) 12.5 万人／⑧ニシャプール(イラン) 12.5 万人／⑨アル・ハサ(サウジアラビア) 11 万人／⑩アンヒルワダ＝現パタン(インド) 10 万人。

一位のコルドバはイスラーム王朝(後ウマイヤ朝)の首都で、多くのモスクや公衆浴場、蔵書 40 万の大図書館もあった。二位の開封は宋(後宗)の首都。その繁栄振りは、絵では「清明上河図」、文では元住民の回想記「東京夢華録」が生き生きと描いている。千年前の人口推計に正確さを求めるのは無理だが、大きな傾向は掴める。人口の多い都市は、食料などの高い生産性、流通や治安の確保が前提になるから、十傑の都市を抱えた地域は当時の「先進国」と見なして良いだろう。

リストを一見して気付くのは、大半がアジア、半分がイスラーム圏で、西ヨーロッパが見当たらないことだ。チャンドラーの推計では、パリ(2 万人)やロンドン(1.5 万人)は田舎町だった。

過去二千年の各国の国内総生産(GDP)を推計したオランダ・フローニンゲン大のアンガス・マディソン教授によれば、西欧の所得は西暦 1000 年頃が「どん底」だった。一人当たり GDP は、ローマ帝国が栄えた千年前より低く、同時期のアジアやアフリカに及ばなかった。世界の GDP に占める西欧のシェアは 9%以下しかなかった。以後の西欧から見れば、どん底から這い上がり、頂点を極めるまでの軌跡だ。マディソン教授によれば、11 世紀に起きた農業の技術進歩が起点で、14 世紀に一人当たり GDP で中国に追いつく。産業革命以前に、既に最も富裕な地域になった西欧は、19 世紀から更に加速し、西欧の“出店”ともいえる北米と共に、世界経済を牛耳るに到った。以上は 20 世紀までの流れ。……

先進国の低成長と、非先進国の高成長の差が歴然としてきた。折しもサブプライム問題で巨額の損失を出した欧米の名門金融機関に、アラブや中国の政府系ファンドによる救済出資が相次ぐ。千年単位の歴史の振り子が戻り始めたのだろうか。気懸かりなのは、真っ先に西欧に追いついた日本。今の延長線なら、欧米と共に「縮み組」に入りそうである。(「千年単位の変化の予感」土谷英夫／日本経済新聞 2008/1/28)

2. 西暦1600年の国家人口ランキング

……当時のヨーロッパの人口は、凡そ 1 億人程度と推測されている。ヨーロッパ東方では、ロマノフ朝ロシアが誕生する直前。ロシア人の勢力がウラル山脈の東側にもようやく及び始めていた。

目をユーラシアの南西から南方に転じてみよう。そこには、ヨーロッパ諸王国の規模を遙かに超えた広大な領域に影響力を持つ帝国が連なっている。西から、オスマン帝国、サファヴィー帝国、そしてムガル帝国。ムガル帝国の人口は 1 億人を超え、1 億 5,000 万人に近かったとも言われる。当時の世界人口は凡そ 5 億数千万人と見積もられているので、その凡そ 5 分の 1 がここに集中していたことになる。

……

(「興亡の世界史 15: 東インド会社とアジアの海」羽田正／講談社 p14)

3. 旧大陸から新大陸への侵略を容易にしたのは病原菌

「8・4 大航海時代の次の主役スペイン」ではコルテスによる中米・メキシコ高原にあったアステカ帝国の征服、ピサロによる南米・ペルーにあったインカ帝国の征服が病原菌の助けを借りてのものだったと述べています。もう少し、丁寧に状況を説明しましょう。

1519 年、コルテスは人口数百万人を誇り、勇猛果敢な軍隊を擁する**アステカ帝国を征服**するために、600 人のスペイン兵士と共にメキシコの海岸に降り立ちます。1 回目の攻撃ではコルテスは自軍の三分の二を失いつつ海岸まで撤退しています。態勢を立て直しての 2 回目の猛攻撃でもアステカ軍もいたところで激しい戦いを挑んできていますが、スペイン側の勝利を決定づけたのは、一人の奴隷が 1520 年にメキシコに持ち込んだ天然痘の大流行により、アステカ帝国の人口のほぼ半分が死亡し、皇帝クイトラワクもその中に含まれたことでした。

戦前は 2 千万人いたメキシコの人口は、1618 年には 160 万人にまで激減しました。アステカ人の命だけ奪い、スペイン人は何の被害もない謎めいた病気はスペイン人の無敵さを示すように見え、メキシコ人は戦意を喪失して征服されました。

1531 年、ピサロは人口数百万人の**インカ帝国を征服**しますが、これもアステカ帝国を滅ぼした天然痘が陸路経由でインカ帝国に達しており、皇帝ワイナ・カパックとその後継者を含む多くのインカ人の命を奪っています。その王位継承を巡る内紛に乗じて、ピサロは少人数のスペイン軍によりインカ帝国を征服しています。旧大陸を起源とする感染症のうち、10 種類以上が新大陸の人々に感染しています。しかし、新大陸からヨーロッパに伝搬した致死性の感染症は梅毒だけです。

北米には約 2 千万人のアメリカ先住民がいました。これは当時の旧大陸に比較して、決して人口密度が低かった訳ではありません。**これらの感染症は北アメリカ大陸にも伝染し**、コロンブスの新大陸発見以後 200 年間で先住民の人口は 95% も減少して約百万人になっています。このため、広大な北米やカナダは無人の野の如くなり、旧大陸からの植民が殆ど抵抗なく遂行されたのでした。

1779 年のクック船長と共に梅毒、淋病、結核、インフルエンザが**ハワイ諸島**に上陸しました。1804 年には腸チフスも入ってきました。その結果、1779 年に 50 万人であったハワイの人口は、1853 年には 84,000 人にまで激減しました。更に天然痘がハワイを見舞った時には、残りの人口のうち、約 1 万人が犠牲になっています。

「サルと別れた日」の第 7 章に「牧畜が本格化したのは約 1 万年前ですが、家畜と密着した生活は、伝染病の被害を引き起こしました。家畜の病原体から人間に伝染するように変異した伝染病は 300 種を超え、その過半はイヌ、ヤギ、ヒツジ、ブタ、ウシからのものです。人間はイヌと 65 種類、ウシと 55 種類、ヒツジと 46 種類、ブタと 42 種類の病気を共有しています。代表的なものを挙げると、天然痘、結核、ジフテリアはウシに由来し、麻疹(はしか)はイヌのジステンバーの変異したもの、ハンセン氏病はスイギュウのウイルスが原種です。……」とあります。また「全世界で体重 45 kg 以上の哺乳類は 148 種存在し、その中の 14 種類だけが現在家畜化されています。……南米大陸では家畜化できたのはラマとその近縁種であるアルパカだけでした。……」とあり、地理的な条件から、たまたま新大陸では人類と家畜との接触が少なかったために家畜起源の感染症に対する免疫力が乏しく、ヨーロッパ人であれば罹病しても軽症ですむこれらの感染症が、住民の 50~95% が死ぬような致命的な劇症となったのです。数十年間のこの大試練を乗り越えて生き残った新大陸の人々はヨーロッパ人たち同様の免疫力を得ることができましたが、地域を支配する勢力分布は元には戻りませんでした。

旧大陸人が持ち込んだ**病原菌がなければ、新大陸の植民地化はこうも易々と実現しなかった**と思われます。このことは当時よりも航空機等により人々の移動性が格段に高まって伝染病に対して脆弱になっている**現代社会に対して、細菌兵器が如何に恐るべき結果を生む可能性があるかを警告**しています。そして、それに対しての対策が必ずしも万全でない実情に寒気を感じませんか。

補遺 了